HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	二つの論争 : ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニンとの論争に寄せて (I)
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 15, 1-91
Issue Date	1971
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5005
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112929.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

二つの論争

——ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニンとの論争に寄せて——（I）

外川継男

〔目次〕

はじめに
I　プロローグ
II　『再び古い主題による変奏曲』
III　ロンドンの『鐘』
IV　『終りと始め』
（以上本号）
V　「土地と自由」
VI　ゲルツェン，バクーニンと「ポーランド問題」
VII　ゲルツェン，バクーニンと「第一インターナショナル」
VIII　『昔の同志への手紙』
IX　エピローグ

Странное положение мое, какое-то невольное juste milieu в славянском вопросе: перед ними я человек Запада, перед их врагами чедовек Востока. Из этого следует, что для нашего времени эти односторонние определения не годятся.

Дневник Герцена, 17 мая, 1844

はじめに

19世紀の40年代がロシアの社会思想史の上できわめて特異な一時期であったことはよく知られている。後に「西欧派」と「スラブ派」と呼ばれるようになった才能ある若者たちが，それぞれサークル（кружок）を形成して当時西欧の思想界で問題となっていたあらゆる社会思想，哲学を論じあった。これらの若いインテリゲンツィアは，そのほとんどが地主貴族の家柄に生まれ，今日から見るならば，その数も想像以上に小人数であり，生活態度や趣味の上でもきわめて homogeneous な一握りの知識人であった。彼らの肖像については，作家・思想家としては凡庸であったが，すぐれたジャーナリスト的感覚を身につけていた同時代人のアーンネンコフがその『文学的回想』の中で「素晴らしき十年」として描いている[1]。さらにこの時代を論じた多くの研究者の中では，同じタイトルのバーリンの短いがすぐれたエッセーがいくつかの興味ぶかい示唆に富む指摘をしている[2]。

1) П. В. Анненков, Литературные воспоминания, М. 1960 このほかにもИ. И. Панаев, Литературные воспоминания, М. 1950（邦訳，パナーエフ『文学的回想』，井上満訳 I-II，岩波文庫）А. Я. Панаева, Воспоминания, М. 1956, А. И. Кошелев, Записки, Берлин, 1884 がある。

2) Isaiah Berlin, "A Marvellous Decade, 1838-48: The Birth of the Russian Intelligentsia," *Readings in Russian History*, edited by S. Harcave, Vol. 1, N. Y., 1962, pp. 344-362。これは最初，*Encounter*, *IV* (June, 1955) pp. 27-39に掲載され，B.B.C. からも放送された。

イギリスの一般の知識人を対象としたこのエッセーの中でバーリンは，留保をつけながらも，文学や芸術に対する「フランス的」態度と「ロシア的」態度の相異をつぎのように説明している。

19世紀のフランスの作家は，総体として，自分たちが purveyor だと信じていた。彼らは知識人とか芸術家の自己自身及び公衆に対する義務というものは，できるだけすぐれた作品を作ることにこそあるのであって，もし画家ならば可能な限り美しい絵画を，作家ならばできる限りすぐれた作品を書けばそれでよいのであり，芸術家の個人的生活は，大工の私生活が公衆と関係がないのと同様に公生活とは関係ないものだと考えていたというのである。テーブルを作ることを大工に頼む場合，大工がその仕事によき動機を持つか否か，あるいは彼が妻子とうまく暮しているか否かはまったく問題にならない。大工の品行が悪いからといって，彼の作ったテーブルの品位がさがると言うのは馬鹿げたことである。このような批判は大工としての彼のメリットを云々する場合にはおよそグロテスクなものであると彼らは考えていた。

これは極端な例かもしれないが，およそこのような「フランス的」な態度は，19世紀のロシアの大部分のすぐれた作家たちによって，はげしく拒否されたところであった。しかもそれは単に倫理的あるいは社会的傾向を持った作家の場合だけではなく，芸術のための芸術を信じていた唯美主義的傾向の作家についても言えるのだと，バーリンは指摘しているのである。

「ロシア的」態度というのは，（少なくとも19世紀の場合）人間というものを分けることのできないものと考えるところにある。したがって人間が何かを為すとすれば，それは彼の全人格をもってするのであって，よきことをなし，真実を語り，美しきものを作ることこそ彼の義務である。もし彼が小説家ならば，彼は小説家として真実を語るべきだし，バレーの踊り子ならば，その踊りを通して真実を表現すべきだというのである。

さらにロシアの作家は誰でもが，公けの場において証言をしているのだと自覚していた。したがって，どんなささいな嘘も，真理に対する情熱の欠如も，憎むべき犯罪と考えられた。おそらくトルスルイの場合は文字通りこれを極端なまでに実行した例であろうが，ロシアの作家の中でも，もっとも西欧的で，芸術の純粋性と独立性を誰よりも信じていた「審美的な」ツルゲーネフの場合でさえも，社会と道徳の問題こそが人生と芸術の中心課題であるとの確信から免れえなかった，とバーリンは説明しているのである[1]。

いずれにせよゲルツェン，バクーニン，ツルゲーネフというこの三人のきわだった個性が，ともにこのような知的風土の中で育った代表的四十年代人であったことは否定すべくもない。また彼らはともに，ツルゲーネフの作品の言葉を借りて言うならば，六十年代の

1) I. Berlin, ibid., pp. 356-358。なおツルゲーネフにおける政治と芸術の問題については R. E. Matlaw, "Turgenev's Novels: Civic Responsibility and Literary Predilection," in *Russian Thought and Politics*, Cambridge Mass., 1957, pp. 249-262 参照。この中で Matlaw は，ツルゲーネフの政治的意見と美学的判断は本質的に異なっていた。政治はツルゲーネフの芸術的ビジョンにとって alien なものであり，ツルゲーネフ自身の政治と芸術の二分が，それらを芸術的に綜合する彼の能力に影響を与えていたと言っている。p. 250, 254。

「子」の世代に対して，「父」の世代に属する代表的インテリゲンツィアでもあった。

以下における「二つの論争」は，六十年代にゲルツェンによって書かれた二つの書簡形式の論文『終りと始め』（ツルゲーネフあて）と，『昔の同志への手紙』（バクーニンあて）を取り上げて，それをさまざまな角度から見てゆこうとするものであるが，これらの中で取り上げられた問題は，ゲルツェン自身その自伝の中で四十年代をふりかえって「後に仕上げられたすべてが，この時代に関係している」と言っているように[1]，いずれもこの四十年代の論争とふかくかかわりを持つものである。さらに，このような公開の書簡形式の論争というものも，以上に紹介したバーリンのいう「公けの場における証言」というロシアに特徴的な思想的雰囲気と切り離すことのできない関係にあることも，われわれは最初に確認しておかなければならない。

ゲルツェンはその生涯に数多くの公開の書簡形式の論文を発表しており，これはある意味で彼の「好みのスタイル」であったとも言えるが[2]，1861年の農奴解放令をはさんで，このような形式の論文は数を増し，それぞれが相手を設定した上での論争の形をとるようになってくる[3]。ゲルツェンの立場からするならば，一方にはカトコーフ，チチェーリンといったリベラル右派と，アクサーコフ兄弟，サマーリンに代表されるスラヴ主義者がおり，他方にはチェルヌイシェフスキー，ドブロリューボフら『同時代人』誌による「新しい世代」のラジカルな若者がいた。そしてそのいずれとも彼は論争を交えているし，政治的な立場という点からするならば，それらの論争を通して考察した方が，現実の状況の中におけるゲルツェンの位置づけはより明確になるであろう[4]。しかし，以下に見るように，ツルゲーネフおよびバクーニンを相手としたこれら「二つの論争」においては，「ロシアとヨーロッパ」，「ナロードとインテリゲンツィア」という四十年代にさかのぼるロシアの思思界の中心的テーマが，二十年の歳月を経て，より深められ，明らかな形となってあらわ

1) А. И. Герцен, Собрание сочинений в тридцати томах, т. IX, стр. 112。『過去と思索』第四部第24章。以下においてこのアカデミー版の作品書簡集を引用する場合は巻数と頁数のみを記すこととする。

2) これと並んでゲルツェンの「好みのスタイル」として対話形式があげられるが，このスタイルの必然性については拙稿「ゲルツェンの『向う岸から』について」『スラヴ研究』No. 14, p. 5 参照。

3) См. С. Д. Лишнер, "Эпистолярные циклы в публицистике Герцена шестидесятых годов," Проблема изучения Герцена, М. 1963, стр. 189-214

4) 農奴解放前夜においてゲルツェンがチチェーリンに代表されるリベラルな陣営と次第に対立してゆく過程については岩間徹氏がすでに扱っている。「ロシア・インテリゲンツィア——法秩序と革命——」岩間徹編『変革期の社会』御茶の水書房，1962, pp. 113-134
さらにこれらの問題を全面的に扱ったものとしては Лемке の古典的ともいうべき Очерки освободительного движения "шестидесятых годов," Спб. 1908 が多くの素材を提供してくれる。近年のソビエト史学のグループ研究による，Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг. М. 1960, 1962, 1963, 1965, 1970 の五巻の論文集と，二つの業績 Ш. М. Левин, Общественное движение в России в 60-70-е годы XIX века, М. 1958 と Н. Г. Сладкевич, Очерки истории общественной мысли России в конце 50-х-начале 60-х годов XIX века, Л. 1962 もとくに参考となる。西側の研究も少なくないがここでは F. Venturi, *Roots of Revolution*, N. Y., 1960, E. Lampert, *Sons against Fathers*, Oxford, 1965 をあげるにとどめる。なお Н. И. Мухина によれば革命後1959年春までに農奴解放前後を扱った文献は 1,921 の多数にのぼるがこのうち自由主義の運動を取上げたのはわずか八編である。См. Леволюционная ситуация в России в 1859-1861 гг., М. 1960, стр. 522-527

れてくるのである。

ツルゲーネフにあてられた『終りと始め』が書かれたのは1862～63年のことであり，バクーニンあての『昔の同志への手紙』はそれから6年たって1869年に書かれた。この間にゲルツェンの見解，とりわけ歴史とロシアの未来に対する見方がどのよにう変化ないし発展し，またどの部分が変らなかったか，ということも本論を通して明らかとなろう。

ゲルツェンとツルゲーネフの論争についていうならば，1954年より65年にかけてゲルツェンの著作・書簡集がソ同盟の科学アカデミーから出版され，またツルゲーネフについても1961年から68年にかけて全集の一部として13巻の書簡集が同じく科学アカデミーから出版されたことによって，従来よりもはるかに詳細な研究が可能となった。これらの著作集，全集には最新の研究成果をとりいれた，くわしい注がついていて，とくにツルゲーネフの書簡の場合には，いままで用いられてきた «Письма К. Дм. Кавелина и Ив. С. Тургенева к Ал. Ив. Герцену с об'яснительными примечаниями М. Драгоманова, Женева, 1892» には入っていないものも含まれている。またこれよりもはるかに詳細な解説がほどこされ，手紙の日付も正されている。これに加えて，ゲルツェンがロンドンの自由出版所から出していた『北極星』(1855～1862) が1966年から68年にかけてファクシミリ版で出版され，さらにまた全号揃った形ではソ同盟でも四つの図書館にしかなかった[1]『鐘』(1857—67) が同じくファクシミリ版で1962年から64年にかけて出版されたことによって，書簡の背景となる事実もずっとくわしく研究しうるようになった。このことはゲルツェンとバクーニンの関係についても言える。

研究史の上でいうならば，ゲルツェンとツルゲーネフとの関係は，40年代を対象としたものに Л.В. Павлов の «И. С. Тургенев и А. И. Герцен (к истории взаимоотношений в 40-е годы»[2] があり，60年代については В. Батуринский の «Герцен и Тургенев»[3] と З. Коган の «Тургев и Герцен»[4] があって，これらを参照することができた。[5] いずれも参考になったが，それぞれ史料上や紙数の制限からして十分問題を究めつくしているとは言い難い。この問題は，あえて言うならば文学史家と歴史家の谷間になって取り残されている。

ゲルツェンとバクーニンについては，史料としてギイヨーム版，スチェクロフ版，ゴーロス・トルーダ版，ブリル版のバクーニン著作集・史料集のほかに，とくに書簡としてはドラゴマーノフの編集した «Письма Мих. Ал. Бакунина к Ал. Ив. Герцену и Н. Пл. Огареву, Женева, 1896» がある。一方研究の方はソビエト時代になってからはコジミーンの論文以外きわめて少なく，最近になって，ピルーモヴァの著作[6] があらわれたが，いずれも両者の関係を全面的に扱ったものではない。[7] 以下の論文はこれまでの研究成果を

1) З. П. Базилева, «Колокол» Герцена1857-1867 гг., М. 1949, стр. 11.
2) Уч. зап. орловского пед. ин-та, т. 17, 1963, стр. 9-36.
3) «Исторический вестник», янв. 1900, стр. 203-228.
4) И. С. Тургенев (К 50-летию со дня смерти) Сборник статей, Л. 1934, стр. 107-132.
5) このほか И. В. Винникова, "Полемика И. С. Тургенева с А. И. Герценом в 1862-1863 гг." があるが未だ見ていない。
6) Н. Пирумова, Бакунин, М. 1970
7) このほかの文献についても同様のことが言える。См. А. И. Герцен, Семинарий, М-Л, 1965, стр. 261-264

生かしながらも，できうる限り原史料にあたって「二つの論争」をその背景にまでさかのぼって明らかにすることをめざすものである。

（本論における日付は慣例に従い，ゲルツェンがロシアを去る1847年以前は露暦を，それ以後は新暦を用いた。）

I プロローグ

1840年の初めにゲルツェンは五年におよぶ流刑が許されて首都に帰って来た。そしてそこに幾つかの「新しいサークル」を見出すが，とくにその中でも彼の注目を惹いたのは，「バクーニンとベリンスキーを長とするスタンケーヴィチの友人たち」のサークルと，「後にスラヴ主義者と呼ばれるようになった」人びとのグループとであった[1]。

これらのサークルの中にゲルツェンは「古き戦士」，「昨日の人間」として受け入れられ，とくにヘーゲル哲学を貪るごとく摂取しつつあったバクーニンやベリンスキーたちの，はげしい哲学的渦の中に巻きこまれる[2]。

五年前に当時最新のサン＝シモン主義を学んだまま知的社会から遠く離れていたゲルツェンにとって，ロシアの思想の「調子，関心，研究——すべてが変ってしまった」[3] ことが大きな驚きであったことは想像に難くない。しかも，彼らの自分とはまったく異なる「土台，武器，言葉」をくらべてみるとき[4]，勝敗の帰趨は一見して明らかであった。ここから六年にわたるゲルツェンの「死物狂いのヘーゲル主義」（отчаянный гегелизм）[5] の時代が始まるのであるが，ヘーゲル哲学をめぐってのバクーニンとの論争[6] も開始される。

当時ベリンスキーは，「すべての現実的なものは理性的である」というヘーゲルの命題を文字通りに受けとって，それならば「われわれの上にのしかかっているこの奇怪な専制政治も理性的であり，存在しなければならなくなる」というゲルツェンのするどい指摘を受けなければならなかった。この二人の間に立ってバクーニンは，両者を「和解させるために説明し，説得しようと努めた」が，次第に「ときどき考えこむ」ようになったといわれる[7]。

当時のバクーニンの何よりの望みはヘーゲル哲学のメッカたるベルリンへ留学することであった。このため彼は両親にあて長文の手紙を書き[8]，費用の拈出を懇願したが，息子の「ドン・キホーテ」的「空想」癖を危惧していた父親は，すぐに金を送ることは不可能だ

1) Герцен, IX , 9, 16, 40。ゲルツエンは "Michel Bakounine" と題する一文の中で，1839年にバクーニンと知り合ったと書いているが，これは40年はじめの誤りであろう。т. VII, 343
2) Герцен, IX, 18, 21
3) Герцен, IX, 16
4) Герцен, IX, 40
5) 1842—45年のゲルツエンの日記参照。（とくに1842年4月13日，7月29日，9月30日，12月27日，1844年4月19日等）
6) Герцен, IX, 23
7) Герцен, IX, 22-23. 金子幸彦訳『過去と思索』，筑摩書房，I, 1964, p. 268
8) 1840年3月24日の書簡。М. А. Бакунин, Собрание сочинений и писем под редакцией и с примечаниями Ю. М. Стеклова, т. II, М., 1934, стр. 392-407 （コルニーロフは日付を3月22日としているがこれは誤りである）。

が，将来1,500ルーブルまでは出してやろうとの返事を書いた。[1] «La mer germanique» の夢をいかにしても捨て切れぬバクーニンは，そこで友人たちを物色してゲルツェンに目をつける。

「ごらんのように，ゲルツェン，ぼくはくだくだしい中国式儀礼は抜きにして，君に単純，卒直に頼むのだ。君から金を借りるのは，愚かな，またつまらぬ空想を満たさんがためでは決してない。ひとえにぼくの生涯の唯一の人間的な目的を達成したいがためにほかならない。」[2]

かくてゲルツェンから2,000ルーブルの金を無期限に借りたバクーニンは，1840年6月29日クロンシュタットの港から乗船し，翌日ロシアを去って行った[3]。つい先頃のカトコーフとの喧嘩から友人は誰一人として見送りに来ず，ひとりゲルツェンだけが去り行く友を見送ったのである。

「汽船がネバ川を出るやすぐにバルト海のはげしい風が，もっと冷い奔流と一緒になってわれわれに襲いかかった。船長はやむなく引返すことを命じた。この引返しはわれわれ二人にとってこの上なく辛いことに思われた。バクーニンは何年もの間これでお別れだと思っていたペテルブルグの海岸が再び接近して来るのを悲しげに眺めていた。埠頭にはそこここに兵士や税関吏や警官やスパイの不吉な姿が使い古した傘の下で震えているのが見られた。

私はバクーニンにペテルブルグの陰惨な光景をさして，あの素晴しいプーシキンの詩を引用した……バクーニンは岸に降りようとしなかった。出発の時間まで船室で待っていたかったからである。私は彼から去った。黒いマントに身を包み，無情な雨に打たれた彼の大きなからだが今も思い出される。船首に立って彼は私に最後の挨拶をするために帽子を振っていた……」[4]

十一年後にゲルツェンはこの時の様子を，このようにミシュレに書き送っている。

*

* *

バクーニンはゲルツェンよりもわずか二歳年下であるが，ツルゲーネフは六歳半も若く，はじめてゲルツェンとツルゲーネフが知り合ったのは1842年頃，モスクワにおいてであったとツルゲーネフ自身後年上院の査問委員会へ回答している[5]。パーヴロフの研究

1) Там же, стр. 478 А. А. Корнилов, Молодые годы Михаила Бакунина, М. 1915, стр. 437-438.
2) М. А. Бакунин, Указ. соч., т. II, стр. 422 (1840年4月20日の書簡)
3) Корнилов, Годы странствий Михаила Бакунина, Л. 1925, стр. 5
4) Герцен, VII, 343-344.
5) И. С. Тургенев, Полное собрание сочинений и писем, Письма, т. V, М., 1963, стр. 391; 1863年4月3日付書簡（以下本書を引用する場合は巻数と頁数のみを記す）。

によれば，おそらく1843年の前半と考えられるが[1]，いずれにしても両者の関係は年齢的なへだたりもあって，1848までは表面的なものであったということができよう[2]。

ツルゲーネフがドイツへ留学したのは，バクーニンよりも二年前の1838年5月のことであり，この年の9月から二学期間，スタンケーヴィチやグラノーフスキーらと共にベルリン大学で学んだ[3]。翌1839年の秋，母親に呼ばれて一度ロシアに帰ったあと，彼は1840年の一月半ばに再び国外に出，四カ月間イタリア旅行をした。スタンケーヴィチと個人的にもっとも親しくなったのがこの時期である。しかしこの年6月，スタンケーヴィチは結核で不帰の客となる。このときのツルゲーネフのふかい悲しみは彼がベルリンからグラノーフスキーに書送った手紙の中に見ることができる[4]。

ツルゲーネフがベルリンでバクーニンと知己になるのは，このイタリアの旅から帰ってからであるが，両者の関係は急速に親密の度合を深め，40年から41年の冬には二人は同じ下宿で暮すまでになる[5]。この年の五月に再びロシアに帰ったツルゲーネフは夏を自分の領地のスパースコエで送り，10月にはバクーニン家を訪問しプレムーヒノで一週間をすごした。尊敬する兄の友人であるツルゲーネフをバクーニンの妹のタチャーナが恋するようになったのはこの時のことであった[6]。

この頃のツルゲーネフはモスクワ大学の教授になることをのぞみ（1826年にダヴィードフが去って以来空席となっていたポスト），フィヒテを再読しプラトンの『共和国』の注釈をしている[7]。

一方バクーニンについては，ゲルツェンがつぎのように当時の姿をつたえている。

「バクーニンははじめその意気込みと才能と思いきってする結論の大胆さによってベルリンの教授連を大いに驚かせたが，まもなくドイツの学問の寂静主義（クビエチズム）に退屈して，これと手を切るようになった。バクーニンは闘争以外に思惟と現実の間の二律背反を解決するすべを見なかったのである。そして彼は次第次第に革命家となっていった。彼はアーノルド・ルーゲの指導する《ハレ年誌》によって，ドイツの教授連中の不毛で貴族主義的で非

1) Л. В. Павлов, И. С. Тургенев и А. И. Герцен.—К истории взаимоотношений в 40-е годы, Ученые записки, Орловский государственный педагогический институт, т. 17, Орел, 1963, стр. 10。この中で著者は，ツルゲーネフの「ファウスト論」がゲルツエンの「科学におけるジレッタンティズム」の直接の影響下に書かれたと言っているが（стр. 14），いずれにせよ，バクーニンやベリンスキーほどの親しい交際はゲルツェンとの間にはなかった。

2) 当時のゲルツェンの往復書簡の中でツルゲーネフについて言及されているのは1844年3月1日のケッチェルあて手紙と，1846年1月2日のベリンスキーからゲルツェンにあてた手紙ぐらいで，その調子も通りいっぺんのものである。

3) Henri Granjard, *Ivan Tourguénev et les courants politiques et sociaux de son temps*,Paris, 1954, pp. 73–74.

4) 1840年7月4日付ツルゲーネフのグラノーフスキーあて書簡参照。Письма, I, 191–193.

5) マガルシヤックは，当時のバクーニンが友人に好かれていなかったことから，彼に惹かれたのは多分ツルゲーネフひとりだったろうと言っている。David Magarshack, *Turgenev–A Life*, London, 1954 p. 53.

6) Корнилов, Годы странствий Михаила Бакунина, стр. 74, 91. Granjard, ibid., p. 74. ツルゲーネフが『猟人日記』の材料を得たのがこの夏のスパースコエでの生活であったとマガルシャックは記している。Magarshack, ibid., p. 54

7) Granjard, ibid., p. 97

人間的な学問の理解に抗議をとなえる若い文士の仲間に属するようになったのである。」[1]

ツルゲーネフがプレムーヒノを訪問した頃，バクーニンはドレスデンに旅し，この地で発禁処分を受けた《ハレ年誌》に代ってこの年から再刊されるようになった《ドイツ年誌》の編集長であるアーノルド・ルーゲと知己になった[2]。上述のゲルツェンの文章が示しているように，彼は青年ヘーゲル派に急速に近づき，早くも翌1842年の10月には《ドイツ年誌》に有名な処女論文『ドイツにおける反動』を執筆するようになる[3]。彼がツルゲーネフや弟妹と別れて一人ですごしたこの1841年から42年にかけての冬が「バクーニンの転向の決定的な時期」だったことは E. H. カーも記している[4]。

ロシアに戻ったツルゲーネフは，翌1842年の7月末にドレスデンに来て，このすっかり変ったバクーニンを見出すことになる。当時バクーニンはまさに前述の『ドイツにおける反動』を執筆中であり，ツルゲーネフがこの論文の校正や出版に立ち会ったことは疑いの余地がない。またバクーニンがこの年下の友に，新たなヘーゲル左派の福音を伝道しようと懸命になったことも間違いのないところである[5]。

しかし二年前にはバクーニンの精神的権威に唯々諾々と服していたツルゲーネフも，今度は容易に説得されることはなかった。この理由についてグランジャールはつぎの二点を指摘している。第一にツルゲーネフが「自分の精神的指導者が革命的理想のドン・キホーテとなった」と感じたこと。言葉をかえて言うならば弟子からすればなによりも一・二年前に師が自分に教えた信念を裏切ったという心理的反撥があったということである。さらに第二として，――この方がより重要であるが――，一年間のスパースコエの領地における田園生活が，ツルゲーネフをして「祖国の社会的，政治的現実」については自分の方がバクーニンよりもよく知っているのだとの確信を与えたということがあげられる[6]。

それならば彼はいかなる「現実」を把握したのであろうか？この点に関して，帰国早々内務省に奉職して「試験の形で」書かされた『ロシアの経済とロシアの農民についての若干の意見』[7] という論文がわれわれに多くの示唆を与えてくれるように思われる。新しいアカデミー版の『ツルゲーネフ全集』の注釈によれば，彼が内務省に勤務するように決心したのは，この1842年の夏から秋にかけてのドレスデン滞在中と推測され，しかもその理由として，「ロシアの農民を農奴たることから解放する仕事に力相応に援助」するためには，内務省がもっとも適していると考えたからであったといわれる[8]。いずれにせよツルゲーネフは，形式的には1845年のはじめまで（『自伝』によれば1843年には早くも休職をとっているが）[9]，官吏として生涯ただ一度の勤務についたのであった。因みに当時の

1) Герцен, VII, 356.
2) Granjard, op. cit., p. 98, E. H. Carr, Michael Bakunin. N. Y., 1961 pp. 113-114
3) ゲルツェンはこの年（1842年）8月15日の日記の中ではじめてこの雑誌について触れ，ドイツ哲学はこれによって講壇から生活の中に入り，社会主義的な革命的なものになったと激賞している。(т. II, 223)
4) E. H. Carr, op. cit., p. 114。大沢正道訳『バクーニン』，現代思潮社，上，1965年， p. 154
5) Granjard, op. cit., p. 99
6) Granjard, op. cit., p. 99-100.
7) Тургенев, Сочинения I, стр. 459-472.
8) Там же, стр. 629.
9) Там же, XV, 207.

内務大臣レフ・ペローフスキー（1792—1856）は，若い頃デカブリストの「福祉協会」のメンバーだったこともあり，精力的な反農奴制主義者であり，ツルゲーネフの直属上司たる特別官房の長は言語学者・作家として一家をなしたウラジーミル・ダーリ（1801—1872）であった[1]。

ところでツルゲーネフの農奴制に対する見解は『猟人日記』などの作品や書簡を通してもうかがい知ることができるが，このように論文の形でまとまったのはほかになく，また後のゲルツェンとの論争ともふかい関係があるので，1842年12月23, 24日の日付のあるこの論文を以下においてやや詳細に検討することとしたい。勿論これが当局に呈出する公文書である以上，そこに「公式的な修辞的調子」が見られるのはやむをえないが，全集の注釈者が言うように「それでも意見の内容において，未来の作家は自分自身の思想を表現しようと努めた」[2]と言ってよいであろう。

まず冒頭においてツルゲーネフは，自分は専門に経済学を学んだとは言えないが，かつて歴史や地理を学び[3]，また経験や読書によってある程度かなりな量の知識を身につけたものであり，今後国家の経済を研究すべく全時間を捧げる決心をしたので，その証拠として本論を執筆した次第であると述べている[4]。

ところで農民問題は，ロシアのみならず，フランスでもイギリスでもドイツでも重要な問題になっているが，とくに農業国であるロシアにとってこの問題はその未来を左右するきわめて大切な問題である[5]。さらにまた歴史的に見て，ロシアと西欧との間には地主＝農民関係に大きな相異がある。即ち，西欧では地主貴族は征服民族であり，農民は被征服民族であるのに対して，ロシアでは貴族も農民も同じ人種であって，同一の言語を話している。そして国家が一つの大家族をなし，その長に父なるツァーリ（царь- батюшка）があった。またロシアには西欧に見られたような封建制が存在しなかった代りに，家父長的な関係があった。このような関係は，一方ではロシアの風俗習慣や宗教心の純粋性と結びついているが，他方からするとロシアの市民的発達（гражданское развитие）を阻むことにもなっており[6]，どうしても変化せざるをえないものである。これを最初に押し進めたのがピョートル大帝であり，この「偉大な統治者」のおかげでロシアはヨーロッパの強国となったが，それでも多くの未解決の問題が残されたままになっている。われわれはこの事業を引き継いで完成させなければならないのであって，いたずらにピョートル大帝のなした仕事を恐怖をもって眺めたり，民族の発達をおしとどめようとすることは，われわれの現在と未来に対する不信と呼んで然るべきであろう[7]，とツルゲーネフはスラヴ主義

1) Там же, стр. 630. ダーリが政治的には保守的見解の持ち主であったことについては1970年9月プリンストン大学の Prof. Joachim T. Baer が北大文学部における講演の際に詳述している。
2) Там же, стр. 629.
3) ツルゲーネフのモスクワ大学時代における，歴史や地理の学習については B. A. Громов, "Студенческие записки Тургенева по географии, истории, статистике, законодательству и философии," Тургеневский сборник, т. I, М., 1964, стр. 212-228 参照。
4) Там же, стр. 459.
5) Там же, стр. 460.
6) これは，チチェーリンに見られる如く西欧派リベラリストの中心的考えである。
7) Там же, стр. 461-462.

者を批判している。

いずれにせよ，わが国の経済を見るとき，そこに移りかわり（переход）が始まっているのを認めないわけにはゆかない。古いものが執拗に残っているが，次第に新しいものが，導入されて勝利を占めつつある。私はかなり長い間ロシアの農村で，即ちあの肥沃なオリョール県で育ち，生活したものであるが，そこにおいてロシアの農民と地主を親しく知る機会を持った。これらの農民を間近に見てみると，彼らの理解の早さ，善良さ，生まれながらの英知に感心しないわけにはゆかないのであるが，くりかえして言うが，彼らの以前の地主との関係が変ってしまったのに気づかざるをえない。昔の純朴な家父長制が消え失せてしまったのに，いまだに合法的な確固とした関係がそれに代って生まれていない。わが国の農民の生活が完全に保障されているとは言い難いのである。ところで個人的な熟練や計算にもとづく工業の運用は，あり余るほど莫大な富をもたらすが，これは本質的に信頼できるものではない。反対に農業は，土地そのものと同様に確固不変なものであって，過度にわたらずとも農民の生活を十分に保障することができるものである。[1]

しかしロシアの農地を見るに，その大部分は耕作状態が悪く，地主をも農民をも十分満足させるには程遠いものがある。しかしてこの理由には次のものがあげられよう。

（1） 第一に，数人の耕作地が入り交って存在する，いわゆる чересполосность владений の問題がある。この点今日ロシア各地で行われている土地の境界をきめる作業（размежевание земель）はきわめて有益である。共同所有[2] の廃止こそロシアにおいては理性的経済への第一歩である。それぞれの地主が自分自身の境界と資産と利益を知るようになることが必要であって，所有権がはっきりせぬうちは，より以上の改善も実行されえないのである。

（2） 第二に，地主と農民の関係が法的にはっきりしていないことがあげられる。オブロークもバールシチナも地主の一方的な恣意で決定されている状態である。この点バールシチナの方がオブロークよりも，もっとはっきりしていない[3]。賦役農民の大部分は，いわば，自分の旦那の所でパンにありついている有様である。このような状態は早く改めなければならない。したがって，貴族の農民に対する関係を定める陛下の勅命はきわめて有効であるに相違ない。

（3） 第三は，わが国における農業，畜産，林産が学問的にきわめて不満足な状態にあることがあげられる。これは大土地所有者の怠慢と，小地主の時間不足，資金不足からきている。もし自分の手で土地を耕作しながら，農民が満足することも生活を保障されることもないならば，所有者が富裕になることはありえない，というのは論争の余地のない真理である。

（4） 第四にあげられるのは，商取引と農業が完全に均衡を保っていないことである。不作の年には農民を食わせられないとこぼし，豊作すぎれば値が下がるとの嘆きは，何度耳にしたかわからない。政府の施策で飢饉のための予備の貯蔵庫を設けたりして，必要不

1) Там же, стр. 462-463.
2) 強調—原文
3) 第 III 章におけるツルゲーネフの自分の領地におけるバールシチナからオブロークへの改革参照。

可欠な施策をきびしく監視しなければならない。これに加えて，わが国の道路の不満足な状態や，流通資本の不足も改善されなければならない。

（5） 第五に指摘さるべきは，わが国の農民における市民感情や法律を遵守する気持が未発達なことである。ロシアの農民もわれわれと同じように法の保護下にあるのだが，自分自身を市民とは感じていない。私は誰よりもロシア人の聡明さと理解の早さを確信しているものであるが，一方ではこの理解の早さというものを，おかしなたとえで恐縮だが，狐の敏捷さに比較せずにはいられないのである。したがって，もし農村の若者の教育に関する陛下の勅令が出るならば，喜ばずにはいられない。[1] わずか読み書きができるだけでも，文盲にくらべるならどれほどすぐれているかわからない。しかし読み書きができるだけでは，市民感情は生まれて来ない。フランス中部諸県の文盲率はわが国とさほど変らないが，市民感情という点では大きな相違がある。しかしこの様な感情の発達には時をかさねばならない。理解を徐々に[2] ひろめ（постепенное распространение понятий），とくに政府の効果的な処置を待たねばならない。現在のところ農民は自らの状態を不安定で当にはならぬものと感じており，時として自分自身の財産をもなげやりに，ほとんど嫌悪をもって扱っている。しばしば，飲酒にふけってわれを忘れようとするのもここから来ている。

（6） 第六として，今日ではもう時宜に適さなくなってしまった，以前の家父長的習慣から受け継いで来た制度があげられる。地主の邸内にあまりにも農奴が沢山いること，農民に食料の供給が確保されないところから来る必然的な結果，馬泥棒・盗伐等々が問題となってくる[3]。

（7） 最後には，貴族の社会的精神（общественный дух）の欠如が指摘されなければならない。わが国の地主の中には自分の農民の所有権を移転する者がある。また貴族の中には土地の細分化をやめて英国流の長子相続を主張する者がいる。しかし冒頭でも述べたように，ウィリアム征服王に従ったノルマンの騎士の後裔たる英国の貴族と，ツァーリに恭順なるわが国の貴族とは，発生的にも職分の上からもまったく異なるものである。自国の民族の歴史や生活の中にしみこんでいる現象にさからうのは不可能でもあれば，罪なことでもある。その上ロシアの土地は広く，そこには多くの持主が必要である。わが国の住民の大部分は農村人口であり，ヨーロッパ・ロシアにおいてすら都市人口はたかだか一割にすぎない。たしかにわが国の農村の生活慣習は変らなければならないが，この変化はゆっくり，徐々に[4]（медленно, постепенно）行われるべきである。そしてすべての貴族階級がこの変化に参加するのでなければ，これは遂行されないであろう[5]。一言でいうならばこの点に関してあらゆる中央集権はほとんど有害であるように私には推測されるのであ

1）第 III 章におけるツルゲーネフの《読み書きと初等教育普及協会》案参照。
2）強調—引用者。のちに見るように постепеновщина という考えはツルゲーネフにおいて中心的なものであって，これは生涯変わることがなかった重要な概念である。
3）第 III 章 1859 年 11 月 3 日付 イヴァン・アクサーコフへの手紙参照。
4）強調—引用者。
5）ツルゲーネフにおいてかかる見解は農奴解放の前後を通して一貫して変らなかったところであった。

る[1]。

それならばどのようにしたらこの目的が達成されるであろうか？この問題の完全な解決はおそらく次の世代が享受するところであろうが，二，三の意見をここに提出してみたい。

わが国の経済の不備を述べながら，私は意図的に農奴の身分（*крепостное состояние*）[2]については触れなかった。いわゆる奴隷制（радство）[3]はロシアの真の必要について完全に無知な輩の空虚な大言壮語の恰好な話題であった。奴隷制というのは非キリスト教的概念であって，キリスト教国には存在すべきではないし，またかつて存在したこともなかった。しかし問題はそんなことではない。イギリスの職工の状態はわが国の農民よりももっと奴隷と呼ばれるにふさわしく，またドイツではどこよりも遅れて農奴解放の行われたメルレンブルグにおいて，つい先頃も地主の殺害が行われた。ここでは農民は人格的には自由であるが，その地方の少数の地主に依存しており，この地主たちが自分のもとを離れた農民を雇わないように申し合せをしたのであった。またボヘミアに居た時私は，解放された農民が地主台帳によっていわゆる世襲財産裁判で迫害されるのを一度ならず目撃したことがある。このような諸外国の例は見ならうべきではないし，わが国の現在および未来の諸制度は，まったくこれとは異った起源と性格を持つものである。ロシアの «*мир*»[4]や старость は，ドイツの Gemeinde や Schulze とは大きな相違がある。しかしドイツ農業のやり方を研究することは大いに参考にはなる[5]。

農民の生活を改善したり，あるいはたとえば農民の共同体に裁判制度を確立したり，共同体内部の行政を改善すべきとの提案は何度も耳にするところである。しかしこのようなことがなかなか行われない理由はまったく理解できる。家族関係というのはその精神からいって法的に決定し難いものであり，わが国の地主と農民との関係は家族関係に類似したものであったからである。わが国の農民の未来についての課題の解決はひとえに地主にかかっており，農民の生活も変らなければならない[6]。

以上において私はわが国の経済の欠陥を指摘してきたが，近年における多くの改善についても言及すべきであろう。分別ある地主たちは，次第に古い昔からの関係を変えようと努力している。

私は以上の意見を統計によって裏付けるべきなのだが，経済学上の知識の不足からそれはせずに，もっぱら自分自身の経験や専門家の意見にもとづいて述べてきた。家内農奴，御料地・国有地農民についてなどの重要な問題にも触れなかった。

前に私はロシアにおける農民階級の問題は，ロシア国民全体の問題と結びついていると言ったが，さらにわが国民の未来に関しては，ひとりわれわれが考えているのみでなく，全ヨーロッパも考慮しているのである。たとえば学問の国ドイツはわが国のことをフラン

1) Там же, стр. 463.-468.
2) 強調——原文。
3) 当時の慣用では農奴制もこのように表現された。
4) 強調——原文
5) 以上に見られる如く，ツルゲーネフの農奴制に対する態度は，廃止自体よりも，廃止したあとの地主＝農民関係，農民の生活をどのように保障するかにより大きな関心が向けられていた。
6) Там же, стр. 468-469.

スよりもはるかに理解し，スラヴ的要素を理解し，評価しようと努めている。そのフランスにおいてすら «Colosse aux pieds d'argile»（粘土足の巨人）という古い比喩は愚かしいものだと感じ始めている。そしてロシア国民の中にしっかりした，いきいきとした破壊することのできない原理があるのを認めないわけにはゆかなくなってきている。イギリスはどうかといえば，われわれを立派な競走相手として尊重している。最近『タイムズ』紙はイギリスとロシアとを比較して，偉大な性格はどこよりもイギリスとロシアに見られると結論しているのである。しかし西ヨーロッパの学者にスラヴ的民族性の幽玄な意味などと言っても受け入れられるものではない。なぜならわれわれ自身いまだにあきらかな独自性にまでは到達してないからである。この独自性は芸術作品や学問等すべてにあらわれて，他の民族も認めぬわけにはゆかぬものなのである。われわれはヨーロッパの一民族である[1]ばかりか，故あって東洋と西洋の仲介者の立場におかれている。ただロシア的であるからといって，すべてロシア的なものに盲従したり，西欧，とくにドイツを恩知らずに（卒直に言うが）非難することがあってはならない[2]。

われわれの同胞たるロシアの農民は，より教養ある自国の活動家から献身的な援助を期待してよい。この点でわれわれは，わが国の政府の指導の下に，詩人の次の言葉をくりかえすことができるのである。

栄光と善とをのぞみつつわれわれは恐れを持たずに前を視る[3]。

以上かなり詳細に24歳のツルゲーネフの論文を見てきた。ここにおいてわれわれは20年後の論争との関係において，まずつぎの諸点を確認すべきであろう。その第一は当時の彼がすでに後に明らかにした如く，ロシアもまたヨーロッパ民族の一つであり，過去の家父長的な諸関係をいまだ残しながらも，次第に市民的秩序の確立に向って進んでおり，また進まざるをえないと考えていたことである。西欧との歴史的相違をツァーリズムの特殊性や地主＝農民関係に認めながらも，ツルゲーネフは，民族の独自性は芸術や学問の領域にこそ現われるのであって，この点ロシアは未だその段階にまで到達していないと考えていたのである。これはすでに死んだグラノーフスキーをはじめカヴェーリンやチチェーリンら西欧派自由主義者に共通の見解と言ってよいであろう。第二の点は，彼が改革へのイニシアチブを政府と貴族に見ていたこと，そしてこの改革の事業が一夜にして行われるものではなく，漸進的に（постепенно）行われるべきものと考えていたことである。この「漸進主義（постепеновщина）」の主張は近年のソビエト史学でまったく取り上げられておらず，最近の『歴史百科辞典』にもこの項目はないが[4]，19世紀ロシアの自由主義の思想を考える上で無視できないものと思われる。そして以上の二点はその後20年以上たっても全く変ることがなかったいわばツルゲーネフの《リベラリズム》の核ともいうべきものであることをまずもって確認しなければならぬ。さらに第三としてわれわれはこの論文に

1）強調——引用者。
2）Там же, стр. 469-472.
3）プーシュキンの "станс" から，主語のみ複数に変えて引用している。
4）『ソビエト大百科辞典』には簡単な説明がある。

見られる現実認識を指摘したい。前にわれわれはバクーニンの「転向」に対するツルゲーネフの批判的態度の奥にある彼の現実認識の自覚を問題にしたが，この点は後年のゲルツェンとの論争においても，終始彼が主張して譲らなかったところであった。自分の方がロシアの現実を，農民の本当の姿を知っているのだという自負が後年のツルゲーネフの態度には屢々見られるのであるが，そのような姿勢がすでにこの論文にもあきらかに見ることができる。そしてかかる農民の真の姿に対する彼の認識が後に『猟人日記』の中に見事に形象化されることは言うまでもあるまい。以上のようなツルゲーネフの論旨を，彼がわずか二ケ月前にドレスデンで読んだに違いないバクーニンの『ドイツにおける反動』[1] の次のような結びの文章と比較するとき，両者のちがいはもはや決定的であると言ってよいであろう。

「疑いもなく人類の大部分をなす人民は貧しい階級であり，すでに理論的にはその権利が認められてはいるものの，いまだその出身と地位から貧しい状態に，無学に運命づけられている。したがってそれは事実上奴隷の身分であるのだ——本来この階級こそ真の人民であり，彼らは至る所において恐るべき様相を呈し，自分たちにくらべて弱い敵の人員を計算し始めている。そしてすでに万人によって認められている自分たちの権利の実際の規定を要求するようになってきているのだ。すべての人民，すべての人が何かある予感に満たされている。いまだ器官が麻痺していない人はすべて，解放という言葉を発する近づきつつある未来をば，胸を高鳴らせつつ期待を持って見ている。ロシアにおいてすら，このわれわれが殆ど知ることのない，しかし偉大な未来が前途にあるに相違ない雪に覆われたはてしなき王国においてすら，雷雨を予告する黒雲が蔽いつつある。ああ，空気は息苦しく，嵐を含んでいる。

されば われらが迷える兄弟たちに大声で呼びかけよう。悔い改めよ！悔い改めよ！天国は近づきたりと……

ひたすら破壊し滅ぼすが故に永遠の精神を信じようではないか。それこそはあらゆる生の尽きることなき永遠に創造的な源泉なのだ。破壊への情熱は同時に創造的な情熱である。」[2]

ゲルツェンがこのバクーニンの論文を読んだのは，1843年の1月7日のことであった。作者がバクーニンであるとは夢思わず，「一フランス人」とのみ思いこんでいた[3] 彼は，この日の日記に次のように記している。

「芸術的ですばらしい論文だ。これはフランス人（私はフランス人を知っているが）の中でヘーゲルを理解し，ドイツの思惟を理解したほとんど最初の人物だ。これは民主主義の党派の大きな，公然たる，荘重な声だ。力に満ち，現在と未来の全世界の共感を得るに

1) М. А. Бакунин, Указ. соч., т. III, М., 1935, стр. 126-148.

2) Там же, стр. 148.

3) この論文は Jules Elysard というペンネームで書かれ，しかもタイトルの次にかっこして「一フランス人の論稿」として発表された。

違いないという確信に溢れている。彼は権力を持っている保守主義者に手をさしのべているが，それによって彼らの時代錯誤的な志向の意味をおどろくほどはっきりとあばいて見せ，人類に呼びかけている。始めから終りまで論文全体が実にすばらしい。フランス人がドイツの学問を——勿論理解した上でだが——まとめて一般化する時には Betätigung[1]（行動）の偉大な局面が表面に出てくる。ドイツ人には未だこのための言葉はない。またこの点についてわれわれはほんの片言しか言えないだろう。」[2]

ほとんど手離しの礼讃である。当時のゲルツェンがおそらく漠然と心に感じていたことを一人のフランス人が胸のすくような論調でよくぞ表現してくれたとの気持がここには見られる。ところでツルゲーネフがロシアの農業問題につき論文を書き，バクーニンが旧体制の総体的破壊への呼びかけをしていた時に，ゲルツェン自身はロシアにあってどのように現実を見ていたのであろうか。ゲルツェンは1842年から45年までの4年間，日記をとびとびにつけており，これによってわれわれは当時の彼の内面的苦悩や問題意識をかなりよく知ることができる。当時の彼はヘーゲル哲学の研究からヘーゲル左派へと接近し，またスラヴ主義をはげしく批判するとともに個人的な共感をも示しているのであるが，ロシアの実際の経済，とくに農業問題に対する直接の関心はこの日記からはあまり見ることができない。この点ではわずかに1843年6月20日の日記につぎのような記述を見出すことができるくらいである。

「ああ，身のまわりを眺めるなら……貧しい，貧しいロシアの百姓（ムジーク）たち。彼らの状態を改善する手段の大部分はすでに準備ができているのに，地主の貪欲と国有地農民の整理のつかぬ状態が彼らをこのようなありさまに陥らせている。彼らの生活を見ていると贅沢に暮していることが何か恐ろしい罪のように思われる。このあたりの百姓はふだんは決して肉を食わない。パンも欠乏しがちで，すこし豊かなものでもキャベツを食べている。家族と一緒に毎日どうにかこうにか飢え死にしないでやってゆくのが精一杯だ。貯えなどまったく思いもよらない。馬も牛も死んでしまって，百姓はもうどん底だ。働き手の多い所はもう少しましな暮しをしているが，こんなのは多くない。彼らの貧しい畑のかたわらには百姓の手で耕やされた地主の豊かな畑が，穀物のむらが，乾草の山がある——なんと天使の如き自己犠牲か！今日となり村の貧民たちが窓辺にやって来た。毎日地主に一人残らず仕事に追い立てられているのだ。彼らにパンのないことは一見してわかる。もしパンさえあって，地主の良心が正しいもので，腹一杯食べられたら，彼らはそれ以上は何も望まないのだ。われわれは（古代の）[3] 剣闘士に驚いている。しかし，はたして一世紀もたったら人びとはわれわれのことを，われわれのひどい残忍さを，人間性の欠如を驚かないであろうか？はたしてわれわれがスリナム[4]の植民者やインドのイギリス人よりも良いということがあろうか？いや，われわれの方が悪いのだ。なぜならわが国の農民の方が野蛮人よ

1）原文のまま。
2）Герцен, II, 256-257.
3）引用者の挿入。
4）オランダ領ギアナ。

りも良いからだ。要するに彼らは生活の重い十字架を悲しく背負い，暗い生活を送っている。前途にあるのは笞刑，飢え，賦役―― もし小作人なら新兵にひっぱられるか（地主の）[1] 邸にとられることだ。」[2]

そしてこのすぐあとにゲルツェンは，後年ツルゲーネフとの論争で問題になった共同体についての見解をつぎのように書いている。おそらくこの記述は，後に彼がくりかえし奏でたあの「変奏曲」の「主題」たる「共同体を核として資本主義を経ずに直接社会主義」へという考えが「萌芽」の形で出てくる最初のものである。

「われわれのスラヴ主義者たちは，共同体の原理について論じ，わが国にはプロレタリアートはなく，耕地の分割があるという。すべてこれはよき萌芽であるが，また未発達にもとずくものでもある[3]。たとえばベドウィン人にはヨーロッパのエゴイスチックな性格の所有権はない。しかし他方で彼ら（スラヴ主義者）[4] は，そこには自己自身に対する尊敬がないということ，あらゆる圧迫に愚かにも耐えているということ，即ち，このような状態で生きることはとてもできないということを忘れているのだ。その耕地が自分の耕地でなく，妻，娘，息子すら自分自身のものでない時に，私的所有の意味での所有権がわが国において発達しなかったということが驚くべきことであろうか？奴隷にどのような権利があるというのか？それはプロレタリアートよりも悪く，res（もの）であり，畑を耕やす道具である。主人が彼らを殺せないというのは，ピョートル時代にある地方で樫の木を伐ることができなかったのと同じで，裁判の権利が与えられた時にはじめて人間たり得るのだ。1200万の人間が hors la loi（法律外）におかれている。Carmen horrendum（恐るべき法よ。」[5]

先に見たツルゲーネフの論文とくらべるならば，日記ということもあろうが，問題に対するゲルツェンの姿勢は理論的というよりは，むしろ感情的であり，情緒的ですらある。そしてこれは単に年齢の問題だけではないように思われる。年からいうならばこの日記を書いたときゲルツェンはすでに31歳になっていた。やはり相違は両者の気質，性格にかかわる根本的なものと考えないわけにはゆかないようである。

当時のゲルツェンは理論的にも私生活の上でもまさに岐路（à la croisée des chemins）[6] に立っており，上に見るようにスラヴ主義者の主張する共同体的原理についても，それをプロレタリア化を防ぐ「よき萌芽」と評価しながらも，他方ではこの原理と個人的原理をいかに調和させるかということを考えあぐねていたのであった。（ある意味でこの二律背反の止揚こそ彼の生涯を通しての問題であったと，今日われわれは言うことができよう。）ツルゲーネフのように，政府や貴族による「漸進的な」改革に全幅の信頼をかけ

1) 引用者の挿入。
2) Герцен, II, 287-288.
3) 第 II 章 31～33頁参照。
4) 引用者の挿入。
5) Там же, стр. 288.
6) H. Granjard, "Herzen à la croisée des chemins", *Revue des Etudes Slaves, t. XXXV*, Paris 1958, pp. 57-76.

て安んじていることは，なんとしてもゲルツェンにはできないことであった。一度ならまだしも，二度におよぶ流刑[1]の経験が，彼の権力への不信をいっそう強めたことは否定できない事実であろう。われわれは先にツルゲーネフにおける現実認識を問題にしたが，認識が現実的だからといって問題解決の手段・方策が現実的だということには必ずしも直線的につながるものではあるまい。おそらく当時のロシアの状態を「出口のない現状」[2]と定義した時，このゲルツェンの現実認識を否定し得るものはあるまい。それならどこに「出口」を見出したらよいのか？漸進的な改革が，あるいはバクーニンの主張するようなすべてを滅ぼしつくす徹底的な革命的破壊か？あるいは道はこの二つしかないのか？このような問題意識が生涯を通してゲルツェンに執拗につきまとって離れなかったのであり，さらに言うならばゲルツェンのゲルツェンたる所以は，かかる問題の追求において幾多の曲折を経ながらも追求の姿勢そのものは死ぬまで崩すことがなかった点にある。そしてこのことをわれわれは以下の「二つの論争」において詳細に見てゆくであろう。

*
*　*

ゲルツェンがその家族とともにロシアを去って「あこがれの地」であるパリに向ったのは，この日記を書いてから3年半ほどたった1847年1月19日のことである。「ベルリン，ケルン，ベルギー」を「半ば夢うつつ」に通りすぎて，彼がパリの「ライン・ホテル」に旅装をといたのは三月も末であった[3]。

「わたしは宿にとどまっていることができなかった。わたしは服を着て，あてもなしに外へ出た。バクーニンやサゾーノフをさがすために。rue St.-Honoré（サントノレ街），シャンゼリゼ――すべてこれらは，わたしにとって，むかしから親しい名前だ。すると本当にバクーニンがすがたを現わした。

わたしはある町角で彼に出会った。彼は三人の知人とつれ立って歩いていた。モスクワにいたときと同じように，たえず立ちどまったり，巻きたばこをもった片手をふりまわしたりしながら，彼らになにかを宣伝していた。このときは彼の宣伝も結論なしにおわった。わたしがそれを中断したからである。そしてわたしは彼といっしょに，わたしの到着でサゾーノフをおどろかせるために出かけた。」[4]

ゲルツェンのバクーニンとの出会いはクロンシュタットの港で別れてから七年ぶりであった。当時のバクーニンは，プルードンやジョルジュ・サンドら一部のフランス人を除けば，「何人かのロシア人やポーランド人としか会わず，隠遁生活を送っていた」[5]といわれる。ゲルツェンは彼やサゾーノフに会ってヨーロッパの諸情勢を聞くとともに，彼らに最近のロシアのニュースを伝えたが，これはバクーニンを落胆させるに十分であった。

1) ゲルツエンは1841年7月からまる一年間ノヴゴロドへ追放された。
2) Герцен, II, стр. 278（1843年4月21日の日記）。
3) Герцен, X, стр. 16.
4) Там же, стр. 17.　『過去と思索』金子幸彦訳，筑摩書房，II, p. 9.
5) Герцен, VII, 345. エリスベルグはプルードンのほか，ルイ・ブランの名をもあげている。Я. Эльсберг, Герцен, Жизнь и творчество, М., 1956, стр. 214.

「彼らは政党や結社や内閣の危機（ニコライのもとで！）や，反政府的行動（1847年に！）が語られるのを期待していた。それなのに私は大学の講座について，グラノーフスキーの公開講義[1]について，ベリンスキーの論文について，大学生や神学生の状況について語った。彼らはあまりにもロシアの生活から切り離されており，全世界的革命の関心[2]やフランスの問題に入りこんでしまっていたので，わが国における『死せる魂』[3]の出現が二人のパスケーヴィッチ元帥や二人のフィラレート主教の任命より重要なのだということがわからなかった。ただしい情報もなく，ロシアの新聞も雑誌もなしに，彼らはなにか理論的に，またあらゆるへだたりが人為的にうかびあがらせる記憶によってロシアと関係していたのであった。」[4]

七年の歳月がバクーニンをロシアの社会や思想界の動きから遠ざけてしまったのは事実であろう。だがこの時はゲルツェンも自分が生涯二度とふたたびロシアの土を踏めないとは考えてもいなかったし，さらに長年のロシアからの別離がロシア社会の現実への無知につながるとして後にツルゲーネフから批判されるようになるとは夢にも思わなかったに違いない。

バクーニンはこの年11月29日に行われた，1831年のポーランドの蜂起の記念日における演説[5]がたたって，パリを追放されてブリュッセルへと去る[6]。そして翌1848年2月23日に革命の知らせを聞いて，三日後にはすでにパリに戻った。「バクーニンは若返り，自分のすべての力と精力的な活動力が発展する可能性をはじめて感じた」[7]のである。そして早くも三月にはオーストリアのスラヴ人に対するプロパガンダのためにパリを去ってプラハに向った。

他方ゲルツェンの方はローマで二月革命のニュースを聞き，五月になってようやくパリへと戻る。[8]したがって両者はすれちがって会っていない。[9]ふたたび二人が出会うのはこの時からさらに13年余たってバクーニンがシベリアから脱出してロンドンのゲルツェンの許へ身を寄せた1861年12月のことである。

1848年の革命をこの二つの個性がどのように経験したかは，それ自体はなはだ興味あるテーマであるが，いまは触れない。バクーニンは文字通り革命の実践家として全ヨーロッパに知られる活動をしたのに対し，ゲルツェンはゲルツェンなりに，傍観者というよりは一人の証人としてこの革命に全力を尽して関わったと言ってよい[10]。これを証明する彼の著作『向う岸から』はゲルツェン自らが呼んでいるようにこの内面の「たたかいの記念

1) これについてはГерцен, II, 111–115 及び1843年11月24日，12月11日，21日の日記（II, 316, 319, 320）参照。
2) 強調——原文。
3) 『死せる魂』のゲルツェンに与えた強烈な印象については1842年7月29日の日記（II, 220)参照。
4) Герцен, X, 323
5) この時の演説については M. A. Бакунин, Указ. соч., т. III, стр. 270–279 参照。
6) Герцен, VII, стр. 345.
7) Герцен, VII, стр. 345.
8) 拙稿「ゲルツェンの《向う岸から》について」『スラヴ研究』No. 13, p. 6 参照。
9) Герцен, X, 355.
10) 拙訳『向う岸から』，現代思潮社，p. 5.

碑」と呼んで然るべきものであり，そのことについてはすでに論じた[1]。

1842年の末にロシアに戻ったツルゲーネフが，ふたたび国外に出たのは1845年の5月のことであるが，この時は南フランスを旅行して半年たらずでロシアに帰った。彼がつぎに外国に出たのは1847年1月で，二月革命をはさんで今度は1850年6月まで三年半の長きにわたって国外で生活を送っている[2]。

彼が二月革命の報を耳にしたのは，2月26日の朝のことであった。それより少し前にパリからブリュッセルに来ていた彼は，「フランスが共和国になったぞ！」という叫びをベッドの中で聞き，「その日のうちに鉄道でパリへ発った。」国境ではすでにレールがはずされていて，荷馬車を使ったりしてようやくパリにたどりついた。途中見た三色旗が彼に「1793年，1794年をわれ知らず思い出させた。」[3] パリに到着したツルゲーネフは「至るところで三色の記章や武装した労働者やバリケードの破壊された石など」を見かけた[4]。この時の彼が，事態にどのように対処し，革命の勃発をどう考えたかは，1月17日から4月29日までの書簡が一通も残っていないのでこれを直接うかがい知ることはできない[5]。ツルゲーネフ自身が当時を回想して書いたのは，これより30年もたったあとのことであり，それも《灰色眼鏡の男（1848年の思い出から）》と《仲間の使い（1848年パリの6月事件の歴史からのエピソード）》というタイトルでいずれも文学作品としてである[6]。

前者の『灰色眼鏡の男』というのは，ツルゲーネフがブリュッセルに発つ前，まだパリにいて毎日パレ・ロワイヤルのキャフェ「ラ・ロトンド」に通っていた頃，ムッシュー・フランソワと名乗るえたいの知れない「灰色にいぶしたレンズをはめこんだ錆びた鉄縁の眼鏡を鉤鼻にはさんだ一人の男」[7] から，革命の予告と，さらにルイ・ボナパルトのクー・デターの予言とを聞いた話である。しかもこの中には「当時パリにいた，知らぬ者なき著名なア・イ・ゲ（ルツェン）」[8] が登場して，ツルゲーネフにこの「灰色眼鏡の男」がスパイだから気をつけるように注意するエピソードまで出てくる。しかし前述のように，ゲルツェンは前年の末からイタリアに行っていて，革命後三ケ月近くたった五月にならなければ，パリに戻って来ていないのであるから，このエピソードは事実に反するし，また「灰色眼鏡の男」の予言もあまりにもうがちすぎていて，はたしてどの程度事実にもとづくものであるか疑問なしとしない。[9] この点は話としてよりよく出来ている『仲間の使い』も同様であって，グランジャールが指摘しているように，1874年の le manuscrit parisien

1) 前掲拙稿「ゲルツエンの『向う岸から』について」。
2) Тургенев, Письма, I, 640–641.
3) Тургенев, Сочинения, XIV, 128–129.
4) Там же, стр. 130.
5) Cf. Granjard, *Ivan Tourguénev*, p. 206. この点について最近 П. А. Васильчков の日記が公刊された。これは『仲間の使い』の背景を知るによい資料である。"Тургенев о революционном Париже 1848 г.", Литературное наследство, т. 76 (1967) стр. 342–358.
6) 邦訳ツルゲーネフ，（1）原久一郎訳『文学と生活』，1949，創芸社。「灰色眼鏡の男」，「仲間がよこした」。（2）中村融訳『文学的回想』，角川文庫「灰色眼鏡の男」「仲間の使い」。
7) Тургенев, Сочинения, XIV, 110.
8) Там же, 125.
9) Cf. Magarshack (op. cit., p. 101) も同じ疑問を呈している。

には1871年のパリ＝コミューンの印象が見てとれる。[1]

しかしこの革命をツルゲーネフがどのように見ていたかは，これら二つの作品と5月15日付のヴィアルド夫人あての手紙[2]からある程度うかがい知ることができるように思われる。この5月15日というのは，パリの民衆が政府のポーランド独立運動への援助拒否に抗議して，大規模なデモを行い，議会にまで侵入した日であるが，この日一日マドレーヌから議会の辺りを歩きまわって事態を目撃したツルゲーネフは政府による鎮圧を見て，「秩序が，ブルジョワが今回は勝利しました。もっともなことです。」[3]と記し，強く印象に残った点として三つをあげている。その一は，民衆が議会に侵入したにも拘らず，議会の周辺の外的秩序[4]がずっと保たれており，兵隊は蜂起した民衆をできる限り慎重に取り扱っていたという点である。第二は群衆の中を欲深げな満ち足りた顔つきで，シロップや葉巻を売り廻っていた商人の完全な無関心さ。そして最後に，「このような瞬間における民衆の感情」がツルゲーネフにはどうしても理解できないように思われたということである。

「誓って申しますが，私には彼らが何を欲しているのか，何を恐れているのか，果して彼らが革命的なのか反動的なのか，それとも単純に秩序の友なのか推測することができませんでした。彼らは雷雨の終るのを待っているようでした。——それでも私はしばしばブルーズ[5]を着た労働者にたずねました……彼らは待っていたのです……彼らは待っていたのです！歴史とはそれではいったい何でしょうか？……摂理，偶然，皮肉（アイロニー），それとも宿命（フアタリテイ）でしょうか？……」[6]

ここに見られるツルゲーネフの調子は，完全に第三者のそれであると言ってよい[7]。そしてそれは同じくこの日一日，事態の動きを目撃したゲルツェンの「革命は敗れたのだ。このつぎは共和国が敗れるであろう……議会が勝ったのだ。君主制の原理が勝ったのだ。晩の九時ごろ私は家に帰った。心は重かった。」[8]という調子と，同じ第三者とは言いながら何と大きな相違があることだろうか。さらにこの相違はゲルツェンといっしょに聞いたあのラシェルの「ラ・マルセイエーズ」の印象や[9]，六月事件の記述[10]において一層あきらかになる。「私はバリケードのこちら側でも向う側でもたたかうのは似つかわしくなか

1) Granjard, ibid., p. 206, n. (21). Павлов, Указ. соч., стр. 26.
2) Тургенев, Письма, I, 299-304. これには *Relation exacte de ce que j'ai vu dons la journée de lundi 15 mai (1848)* と題がつけられて，1898年にフランスとロシアの雑誌に発表された。См. I, 589.
3) Там же, стр. 303.
4) 強調——原文
5) 当時ブルーズ（仕事着）を着ていることの意味は『仲間の使い』で説明されている。
6) Тургенев, Там же, стр. 304.（……原文）
7) アーンネンコフはこの時のツルゲーネフの作家としての目，才能を高く評価している。Анненков, Указ. соч., стр. 396-397.
8) Герцен, V, стр. 132-133.
9) ツルゲーネフの印象は『灰色眼鏡の男』に，ゲルツエンのそれは『向う岸から』の中の「嵐のあと」に見られる。
10) ツルゲーネフの『仲間の使い』とゲルツエンの『嵐のあと』および『過去と思索』の中の「家庭の悲劇の物語 I ——1848年——」参照。

った」[1] というツルゲーネフの言葉と，「『なぜ私は労働者から銃を受け取って，バリケードの向う側に残らなかったのだろう？』もし弾丸に当って倒れたとしても，私はまだ二，三の確信をいだいて墓に入れたであろうに……」[2] というゲルツェンの言葉は両者の本質的相違を端的に示している[3]。

ゲルツェンはこの1848年の革命を，自分の全存在をかけて受けとめ，革命の敗北に耐え，この苦悩を通して『向う岸から』というきわめてユニークな作品を生み出した[4]。一方ツルゲーネフの方はあくまでも第三者として，この革命を見ている。しかしその彼も亦，革命のさなかにおける自己の経験を通して，「歴史とはいったい何であるのか」考えざるをえなくなったのである[5]。しかしツルゲーネフがこの疑問を疑問として残したまま，それを直接には作品として結実化させなかったのにたいし，ゲルツェンの方はこの疑問を思想の次元で徹底的に追求し，その結果を『向う岸から』に結晶化したのである。だが両者の抱いた疑問と回答はその後十数年を経て二人の論争の一つの焦点となる。

反動が勝利を祝っていたこの年の夏じゅう，ゲルツェンは「母国のことばで，腹を立てたり，ぐちを言ったりしていた。[6] この頃彼の家と同じ建物にツチコーフ一家が住んで，両方の家へツルゲーネフはアーンネンコフといっしょに「毎日のようにたずねて」いった。この頃彼は戯曲 «Где тонко, там и рветься» を書いていて，それを当時まだ19歳だったナターリャ・ツチコーヴァに読んでやったり，また時には雄鶏の真似をして子供たちを嬉しがらせてもいる[7]。このようなツルゲーネフに対して，ゲルツェンが庇護者的な「寛大な」目で見ていた[8] のに対し，ゲルツェンの妻は，あからさまに嫌悪を示している[9]。しかしゲルツェン家の中で，このようなツルゲーネフの内面の悩みを，はたして見抜いていた者があったかどうかは，うたがわしい。おどけた表面とはまったく反対に，彼の内面はペシミステックな暗い気持で満たされていたのであった[10]。

この1848年の冬から翌年にかけて，パリには伝染病がはやり，冬にはゲルツェンの下の娘がチブスにかかった。このときツルゲーネフは夜中に薬屋までアンモニアを買いに行

1) Тургенев, Там же, стр. 139.
2) Герцен, X, 231.
3) ゲルツェンと比較してのツルゲーネフの «cool detachment» については Freeborn も最近の研究で言及している。Cf. R. Freeborn, *Turgenev*, Oxf. Univ. Press,1960, p. 16.
4) 前掲拙稿参照。
5) 前掲5月15日付ヴィアルド夫人あて書簡参照。なおパーヴロフは，1848年の革命に対するツルゲーネフの「どっちつかずの態度（двойственно）」を指摘し，一方では反動の残酷さを摘発しながら他方では自然発生的な民衆の力に恐れを示していると言っている。Павлов, Указ. соч., стр. 24.
6) Герцен, X, 229, Н. А. Тучкова-Огарева, Воспоминания, М., 1959, стр. 280 и след.
7) Н. А. Тучкова-Огарева, Указ. соч., стр. 281–282.
8) Проф. Ив. Иванов, И. С. Тургенев, жизнь-личность-творчество, Нижинь, 1914, стр. 599.
9) Н. А. Тучкова-Огарева, Указ. соч., стр. 282.
10) ヴイアルド夫人あて10月20日付，1849年1月10日付の書簡参照。ツルゲーネフ自身はこのようなおどけた態度を «Safety valve» と呼んでいた。Cf. Magarshack, op. cit., p. 104. なおこの頃のツルゲーネフの «spleen» については Haumant も記している。E, Haumant, *Ivan Tourguénief*; *La vie et l'oeuvre*, Paris, 1906, p. 51–52.

き，ゲルツェン夫妻といっしょに看病に当ったが[1] 翌年の初夏には今度はツルゲーネフ自身がコレラにかかってゲルツェンの看護を受けている。この時ゲルツェンは妻や子供らを皆ヴィル・ダヴレーの母の家にやって，ひとり残って彼を介抱したのであった[2]。

ツルゲーネフとゲルツェンが，もっとも身近かにつきあったのはこの1848年から49年にかけてであり，この頃の彼はゲルツェン家の「客というよりは家族の一員」[3] と言ってよかった。1849年の6月，ゲルツェン一家はパリからジュネーヴへ避難するが，この頃から当時パリに在住していたロシア人の間に，ゲルツェンの亡命の噂が流れ出した[4]。そしてこの噂を耳にしたツルゲーネフは，7月31日付の手紙でつぎのようにゲルツェンに書いている。

「君のある意図について聞いた——だが多くの人が後に称讃するであろうことをぼくはほめない。なぜなら，君にとってこうすることはシャンパンを一瓶飲みほすのと同じくらい自然なことだからだ。君は好漢（славный малый）だ——そしてぼくは君がとても好きなのだ…」。[5]

そして翌50年の6月にツルゲーネフはロシアへ帰るのであるが，その直前の6月22日付のゲルツェンあての手紙はつぎのようである。

「親愛なるアレクサーンドル，丁度君が出発した[6] 一時間後にぼくは村[7] から出て来た。どんなにこのことが残念だったか想像できるだろう——ロシアに帰る前にもう一度君に会えたらどれほど嬉しかったことか——そうだ，兄弟。ぼくは帰るのだ。荷物はみんな納められ，明後日にはパリを去る。一週間後，来週の土曜にはもうシュテッチンから乗船していることだろう。——君の手紙や書類は全部ぼくが届ける。信じてくれて大丈夫だ——たとえ君が住所を知らせなくても——ぼくは君との約束を必ず実行する。とりきめたように本や雑誌はエルン嬢の名でロスチャイルドへ送ろう。今日彼の所へ行って，この件を知らせておこう。——今度君に手紙を書くのはいつだか，ロシアでぼくに何が待っているかは神のみぞ知るだ。—— mais le vin est tiré — il faut le boire.（酒瓶は抜かれた。飲まねばならない。）——なにか重要なことが起ったら，«Journal des Débats» に m-r Louis Morriset de Caen の名で広告を出してぼくに知らせてくれることができよう。ぼくはこの雑誌を読むから君がぼくに言いたいのだということがわかろうというものだ——さらば，親愛なるゲルツェン。多幸を祈る。ぼくは君の代りに君の友達全部を抱擁しよう。彼らと君のことを語ろう。オガリョーフたちの情報を同じ宛先で書くようにしよう。元気でできるだけ頑張ってくれたまえ。君の奥さんと子供さんたち全部にしっかと握手する。へ

1) Герцен, X, 235.
2) Там же, 43–44.
3) Павлов, Указ. соч., стр. 35.
4) ゲルツエンがロシア政府の帰国命令を断って，はっきり亡命の決意を固めたのは1850年9月のことである。
5) Тургенев, Письма, I, 353.
6) ゲルツェンはこの時パリをたってニースへ移った。
7) ツルゲーネフは当時，クルタヴネル（Courtavenel）に住んでいた。

ルヴェーグと彼の奥さんによろしく。
もう一度君を抱擁しつつ，君の

イー・ツルゲーネフ」[1]。

II 『再び古い主題による変奏曲』

1856年7月，ツルゲーネフは6年ぶりに外国へ出た。前年の三月ニコライ一世が死んで新帝アレクサーンドル二世が即位し，この年の三月には三年近く続いたクリミア戦争も終ってロシアは「新しい時代」に入っていた。1856年になると国外旅行の制限も幾分緩和され，ロンドンに来るロシア人もぼつぼつ増えてきた[2]。

クリミア戦争の始った1853年にロンドンに「自由ロシア出版所」を設立したゲルツェンは，55年には『北極星』の第一号を出し，56年の四月にはロンドンにオガリョーフ夫妻を迎えて，さらに『ロシアからの声』を出版する準備をすすめることになる。

ニコライ一世の死の知らせにゲルツェンがどれほど狂喜したかは，1855年3月3日付のマーリア・レイヘルにあてたつぎの手紙の調子が何よりもよく示している。

「いや，おめでとう。
おめでとう。
おめでとう。
われわれは酔った。
われわれは狂った。
われわれは若返った。」[3]

そして，この年4月6日に第一号を出した『北極星』の中で，新帝アレクサーンドル二世にあてて彼は以下のように祝福の言葉を書き送った。

「陛下，
あなたの治世はおどろくほど幸せな星の下で始りました。あなたの上には血のしみもなければ，あなたには良心の苛責もありません。
あなたの父親の死の知らせが，あなたに殺害者の名をかぶせることもありませんでした。王座につくためにロシアの血を浴びて広場を通ることもあなたには不要でしたし死刑をもって人民に即位を知らせる必要もありませんでした[4]。
……
あなたにはやさしさが期待されています。

1) Там же, стр. 385-386.
2) З. П. Базилева, Колокол Герцена 1857-1867 гг., М., 1949, стр. 53.
3) Герцен, XXV, 242.
4) いうまでもなくパーヴェルー世の殺害とアレクサーンドル一世の即位。デカブリストの処刑とニコライ一世の即位をさす。

あなたには人間的な心が期待されています。——
あなたは稀にみる幸せな方です！

……

さだめしあなたはロシアを愛していることでしょう。そしてあなたはロシアの民衆のために多くのことを——実に多くのことを為すことができるのです。

……

もとより私の旗はあなたの旗ではありません。私は変りようのない社会主義者ですし，あなたは専制君主なのですから。しかしあなたと私の旗の間には一つの共通のものがありえます。——まさにそれは人民への愛であり，このことを問題にしてきたのです。

……

陛下，ロシアの言葉に自由を与えられますよう……われわれに自由な言語を与えられますよう……

農民に土地を与えられますよう。それでなくても土地は彼らに属するものなのですから。

……

お急ぎ下さい！　将来農民が血を流す破目にならぬよう，彼らを犯罪的行為と流血とから救われんことを……」[1]

ここに見られるのは，あきらかに上からの改革への期待である。そしてその姿勢は要求というより懇願に近く，ここに「50年代のゲルツェンの自由主義的な動揺と錯覚の証拠」[2]をソビエトの研究者は見ている。

翌1856年3月30日，パリにおいてクリミア戦争の平和条約が締結された。その翌日執筆された「前進！　前進！」と題する『北極星』第二号の巻頭論文において，ゲルツェンは再び言論の自由と，土地をつけての農奴解放の旗印をかかげて，政府に速やかな改革を要求する[3]。しかしそれだけではない。この論文には1849年以来，彼が「くりかえし発展させてきた」[4] テーマである「ロシア的社会主義」の思想がまたしても示されているのである[5]。

ロシア社会がブルジョア西欧社会とは本質的に異なるものであり，共同体的土地所有を基礎に独自の社会主義を発展させる可能性があるとの主張は，1849年1月から2月にかけて «La Voix du Peuple» 誌上に連載された «La Russie» と題する論文から始って，1850年の «マッツィーニ宛ての一ロシア人の手紙»，翌51年の «ロシアにおける革命思想の発達»，と «ロシア人民と社会主義，コレージュ・ドゥ・フランス教授 J. ミシュレー氏への手紙»，1853年の «ロシア農奴制» と «洗礼を受けた財産»，そして1854年の «ロシアと

1) Герцен, XII, 272-274: Полярная Звезда на 1855, книга первая, факсимильное изд., М., 1966, стр. 11-14.（句読点は後者による）。
2) Герцен, XII, 539.（注釈）
3) Там же, стр. 306-312, Полярная Звезда на 1856, III-X
4) Ленин, Полное собрание сочинений, изд. 4-е, XVIII, 11.
5) この「ロシア的社会主義」の形成については，筆者は前に本誌で扱った。"Sur la formation de la théorie du socialisme russe chez Herzen."『スラヴ研究』No. 4, pp. 87-103.

古い世界» というように，過去5年間に七編もの論文[1]においてゲルツェンがくりかえし述べてきた「古い主題」であった。

ゲルツェンがロンドンにあってその出版活動を通じてしだいにロシア国内への影響力を高め，亡命革命家のあいだにも名声を博するようになったこの期間に，国内にあったツルゲーネフの方も «村の一ケ月» (1850)，«猟人日記» (まとまった一冊の形では1852年に初めて出る)，«三つの出会い» (1852)，«ムームー» (1854)，«余計者の日記» (1850—のち1856に新版)，«ファウスト» (1855)，«ルージン» (1856) とつぎつぎに作品を発表している。

しかしこの六年間のロシアにおける生活は彼にとって必ずしも幸福なものではなかった。

「私にはエジプトのスフィンクスのようにじっと動かずにヴェールをかぶった巨大な暗い影，ロシアが待っていることでしょう。それが後になって私を呑み込むかもしれません……」[2] とパリを去る直前にヴィアルド夫人に不吉な言葉を送った彼は，はたして1852年にゴーゴリの死を悼む文章[3] を発表したかどで，「一ケ月警察署に拘禁の憂目をみたあとで，田舎に住むべく送還された」[4] のであった。ツルゲーネフの不吉な予感は事実となったのである。スフィンクスの「暗い影」が彼の上に容赦なくのしかかってきたのである。この時彼はアレクセイ・トルストイ伯のすすめで，皇太子アレクサーンドル大公に身のあかしを立つべくつぎのような手紙も書いた。

「私は当局に服従しなかったり，その意志にさからったりすることは考えてもみませんでしたし，それだけでなく，なんらかの法律違反を犯すなどとは夢にも思ってみませんでした。もしも私の行動が，たとえわずかでも不服従と見なされる可能性がありますならば，ただちにこの論文を破棄するでありましょう。目下私にはこれ以外のいかなる罪も考えられません。そして警察による拘禁を受けております——今後のことは不明であります。私の健康が首都の医者により診察をしばしば受けることを必要としていますだけに，これは私にとってなおさらつらいところであります。かかる状態にあります故に，私は陛下のご寛大なる処置と，いと高き庇護とをひたすら乞い願うのみであります……」[5]

しかしこの「拘束，つづいて田舎への蟄居」は彼にとって「疑う余地なき利益をもたらす」ことにもなった。なぜならそれは彼の「関心の網目からこぼれ落ちたであろうロシアの生活の諸側面に接近せしめた」[6] からである。

かくて1852年の五月からほぼ一年のあいだ，ツルゲーネフは心ならずもスパースコエの領地ですごすことになった。ゴーゴリの死を悼んだ彼の論文が「口実にすぎないこと」，

1) これらは《ロシアの農奴制》が英文で，《洗礼を受けし財産》がロシア語で書かれたほかはすべてフランス語で書かれた。
2) Тургенев, Письма, I, 382. (1850年5月16日)。
3) Тургенев,, Сочинения, XIV, 72-73に所収。
4) Там же, стр. 74-75.
5) Тургенев, Письма, II, 382. (1852年 5月9日)。
6) Тургенев, Сочинения, XIV, 75.

当局の真のねらいが彼の「文筆活動の禁止」にあることは彼自身にもよくわかっていた。彼にとって「1852年は春がない」ことはたしかだったが，「それよりももっと悲しいことは国外を旅行するあらゆる望みに訣別しなければならないこと」[1] であった。約束したゲルツェンへの手紙も，ロシアにいた六年間一通も出していない。もとよりロシア当局の帰国命令を拒否して亡命の決意を固めたゲルツェンからは，一通の便りもなかった。ゲルツェンがツルゲーネフのロンドン来訪を耳にしたのは1856年8月のことであるが[2]，8月はじめにロシアを発ったツルゲーネフはベルリン，パリを経て8月31日にロンドンへ到着し，9月8日まで滞在した[3]。

この日ゲルツェンはマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークにつぎのような手紙を書き送っている。

「ツルゲーネフが今日発ちました。彼はわれわれに多くの興味ある話をしてくれましたが，中でも面白かったのは，ペテルブルグの烈しい若者たちが私を真に熱愛しているのにたいして，汎スラヴ主義者が私を憎んでいることです。そしてことさら奇妙なことは，私がモスクワよりもペテルブルグではるかに愛されていることです。」[4]

この短い一文はじつにさまざまな内容を含んでいる。おそらくこの話の中でツルゲーネフは，当時のペテルブルグの大学生の傾向や，彼らの間に人気のあった『同時代人』誌の批評部門を担当していたラジカルなチェルヌイシェフスキーのこと，さらにはつい先頃くわだてられた，チェルヌイシェフスキーをやめさせてアポロン・グリゴーリエフをそのあとがまに据えるという噂[5] などを詳細に話したことであろう。あるいはまたチェルヌイシェフスキーの「芸術観」を「ばかげたもの」[6] だと苦笑しながらゲルツェンに語ったかも知れない。

ところで「モスクワよりもペテルブルグで」ゲルツェンがより愛されているとはどういうことであろうか。ローゼンターリの比較的最近の研究[7] によれば，当時の自由主義陣営のうちもっとも大きなグループは，モスクワのアレクサーンドル・スタンケーヴィチ[8] のグループと，ペテルブルグのカヴェーリンのそれであった。前者は1855年にグラノーフスキーが死んだあと彼に近かったスタンケーヴィチを中心に組織されたもので，スタンケーヴィチ自身はオルガナイザーというだけでイデオロギー的に指導する力はなかったといわ

1) Тургенев, Письма, II, 55. (1852年5月13日付ヴィアルド夫妻への手紙)。
2) Герцен, XXVI,1 8 (1856年8月16日マーリア・レイヘルあて手紙)。
3) Тургенев, Письма, II, 643, III, 654.
4) Герцен, XXVI, 23.
5) Левин, Общественное движение в России в 60-70-е годы XIX века, М., 1958, стр. 113.
6) 1855年8月6日ボートキンとネクラーソフあて手紙 (Тургенев, Письма, II, 300-301. 尚この手紙には彼のチェルヌイシェフスキーの芸術観に対する批判がよく出ている。さらに1856年11月28日付トルストイあて手紙を参照するとこの点はより明らかである)。
7) В. Н. Розенталь, "Идейные центры либерального движения в России накануне революционной ситуации", Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг., М., 1963, стр. 372-398.
8) これは若き日のツルゲーネフの師友たりしニコライ・スタンケーヴィチの弟である。

れている。むしろその点ではチチェーリンが目立ったが，そのほかにクドリャーフツェフ，バブスト，コルシ，ボートキン，ケッチェルらがいた。一方ペテルブルグのグループは40年以来のミリューチン兄弟のグループを継ぐもので，官吏などが多く，モスクワのグループにくらべるとよりプラクティカルだったと言われている[1]。彼らは単に集会に出たり，雑誌で論ずるだけでなく，農奴解放についての具体的プランを作って，動揺する政府の尻を叩くなど実際的な活動もしていた。

ゲルツェンとの関係について言うならば，一時ゲルツェンに接近の姿勢を示し，1857年までは『鐘』を自分たちの陣営に引き入れようとつとめたチチェーリンは，1858年の末に至って有名な「起訴状」を発表してゲルツェンと完全に手を切ることになるのであるが[2]，このときカヴェーリン，アーンネンコフ，ツルゲーネフらがチチェーリンの期待に反してこの「起訴状」に反対し，この旨ゲルツェンに告げているという事実がある[3]。とすればペテルブルグの後にゲルツェンと手を結ぶ急進的傾向の若者以外に，このリベラルな二陣営のゲルツェンに対する態度の相違も考えられよう。

いずれにしても，ツルゲーネフがロンドンに来た1856年の秋は，チェルヌィシェフスキーに代表されるラジカルな若者の登場と，カヴェーリン，チチェーリンに代表される自由主義陣営の形成[4]，さらにアーンネンコフ，ドルジーニンらに代表される右派の「純粋芸術」の主張などで，ロシアの思想界は大いにわきたっていた。そしてツルゲーネフ自身は穏健な自由主義者としてこれら両極端の間に立っていたということができるように思われる。[5]

しかし以上のことはいずれも推測の域を出ない。ツルゲーネフがゲルツェンと六年ぶりに会って，具体的に何を語ったかは，これを直接示す史料がないからである。わずかにツルゲーネフがペテルブルグのコルバーシンにたのまれてゲルツェンの作品を出版する許可をとりついでやったことと[6]，ゲルツェンによい銃を買うようにたのんだことぐらいがはっきりしている。この件についてゲルツェンはおどけてつぎのようにツルゲーネフに書いている[7]。

「猟人閣下

閣下の愛顧される従者たるそれがしは，月曜（あるいは火曜）に Cock Spur Street に急ぎ参り，次の特別文書にてお知らせ致すべく候。」[8]

1) Розенталь, Указ. статья, стр. 390.
2) Там же, стр. 383.
3) Левин, Указ соч., стр. 80. 岩間徹「ロシア・インテリゲンツィア」,『変革期の社会』御茶の水書房，1962, p. 122. チチェーリン自身もその『回想記』においてこのような意見の「二分」を認めている。Воспоминания Бориса Николаевича Чичерина, Московский университет, т.II, стр. 29.
4) これはカヴェーリン自身の表現でもある。См. Розенталь, Указ. статья, стр. 372.
5) П. Г. Пуствойт, Иван Сергеевич Тургенев, Из курса лекций по истории русской литературы XIX века, М., 1957, стр. 41-42.
6) 1856年10月31日付ツルゲーネフのコルバーシンあて手紙，11月10日のゲルツェンあて手紙及びゲルツェンの10月27日付ツルゲーネフあて手紙参照。
7) 1856年11月8日付の手紙。
8) Герцен, XXVI, 46.

問題はそのつぎの一節である。

「今日君[1] に約束した手紙を書き終えた——とうがらしと West Indian pickles が入っているやつだ。題は
«再び古い主題による変奏曲
(И. C.への手紙) »
となろう。
これが問題だ。ぼくはわざと И. C. としたが，もしかするとこれはイッポドローム・スホザネート[2] ととられるかも知れない。まあ，とにかく君の命令次第でどうにでもなる。印刷はさらに二ケ月後になるだろう——とにかく一筆してくれたまえ。」[3]

«И. C.» がツルゲーネフのイニシアルであることはいうまでもない。ゲルツェンはこの書簡形式の論文を公刊するにあたって，その内容からみてツルゲーネフに多少なりとも迷惑のかかるのをおもんぱかって，このように問い合せたのである。これに対してツルゲーネフはすぐに返事を書いている。

「…イッポドローム・スホザネートの名前には腹をかかえて笑った。…結構だ。遠慮しないでやってくれたまえ。ぼくは多大の興味をもってその手紙を期待している。ロシアにいた時にも，ぼくは君と知己であり，君が好きだということをかくしたことはない。まして今では誰の前でもこのことを卒直に認めることができる。」[4]

しかしこれから一ケ月ほどして書かれたゲルツェンへの手紙では，この点について意見が変ってくるのである。

「…ぼくがよく会う（ニコライ）・ア（レクサーンドロヴィチ）・メ（リグノーフ）が，君の手紙の冒頭にくる二字について気になることを言うのだ。彼はこれを危いと断言するのだが，ぼくはとるに足りないことだと確信している。ただ手紙そのものの中でわれわれの会った時たまたま出た話を詳しく書くことはしないでもらいたい。」[5]

これに対してゲルツェンは，「ちゃんとした人物」ならわかるだろうし，そうでない人間には不要なことだから匿名にしょうと心安く答えて[6]，この書簡形式の論文を『北極

1) 手紙の調子が変る。
2) Ипподром Сухозанет——名前は競馬場で Ипполит の駄酒落か。姓の方はロシア人にはあるが Сухозадый（尻の痩せた）のこれまた駄酒落か，結局「競馬場の痩せ尻」ぐらいのところであろう。
3) Там же, стр. 46-47.
4) Тургенев, Письма, III, 26 (1856年11月10日)。
5) Там же, 44 (12月6日)。
6) Герцен, XXVI, 51 (12月8—9日付)。

星』の第二号に«Письмо к....» とだけ付して発表した[1]。しかもそれだけでなく執筆の日付もおくらせて「ロンドン1857年2月3日」と慎重に記すことも彼は忘れなかった。これがいずれもツルゲーネフの名前や，彼との会話が当局に感知されることを避けてのカモフラージュになったことはいうまでもない[2]。

ところでこの『再び古い主題による変奏曲』の内容であるが，まず冒頭においてゲルツェンは，八年前に『向う岸から』の中で書いた自分の考えが，本質的にはまったく変っていないことをことわっている。

当時からゲルツェンの見解に対してロシアの自由主義的知識人が非難したのはつぎの二点であったと彼は自ら言っている。即ちその第一は，「自分の西欧観が，いまでもわが国には必要である信念をゆるがすものである」ということ，第二は，「自分のロシア観がスラヴ主義者に自分を近づけるものである」という二点である[3]。

しかしニコライ一世が死んで，新しい皇帝の下でロシアが農奴解放とか検閲や笞刑の廃止とかの問題をめぐってわきたっている時に，いまだに「民族の格の上下についてや真理の国民性についてスコラ的弁論」を云々していることは，退屈でもあればなげかわしくもある。自分もスラヴ主義者のいくつかの論文を読んでみたが，恐怖と嫌悪なしには読めなかった。もし彼らが権力についたら，それこそ第三部も顔まけのひどいことをやり出すことだろう。私がこのようなスラヴ主義者に近いとはまったく心外だ。しかも君たちのスラヴ主義者との論争はまったく何の役にも立っていない。彼らは現実の[4]ロシアをまったく知らない「化け物」なのだから，ほっておくのがよいのだと，まずはじめにゲルツェンは自分とスラヴ主義者との相違を強調している[5]。

そして次に彼は，自分の西欧主義と，いわゆるリベラルな「西欧主義者」との相違がどこにあるかを説明する。

「君たちはヨーロッパの思想を愛している——私もまたそれを愛している。」これこそエジプト，インドからギリシャ，ローマに始まり，カトリシズム，プロテスタンティズム，ラテン民族，ゲルマン民族の「全歴史の思想」であって，もしこの思想がなかったら「われわれはアジア的寂静主義（クビエテズム）かアフリカ的愚鈍に陥っていたことだろう。」ロシアはこれらの思想をもってのみ[6]，偉大な人類の遺産を継承することができるのであって，「この点で，われわれの見解は完全に一致している。」ただ違う点は，彼らが「ヨーロッパの今日の生活がこれらの思想にふさわしいものではない」ということを知ろうともしないし，また知ることを恐れているということにある。彼らはヨーロッパで実現しなかったような思想が，どこかほかの所で実現される筈はないと考えているが，「歴史の発生学がこのような結論を正当化することはまずあるまい。」たとえ新しい社会思想がヨーロッパの現在

1) Полярная Звезда на 1857, стр. 291-305.
2) См. Герцен, XII, 563.
3) Герцен, XII, 423.
4) 強調——原文。
5) Там же, стр. 424.
6) 強調——原文。

の生活にふさわしくないとしても，そのことからこの思想がどこにも適合しないものであると結論づけることはできない。たとえばヨーロッパの理想の一側面たるアングロ＝サクソンの理想が，大西洋の彼方のアメリカにその表現を見出したとは言えないだろうか，とゲルツェンは例をあげて説明する[1]。

ついで彼は『向う岸から』において展開した歴史観をあらためてくりかえす。即ち，「歴史の中では，発展の道はきわめて緩慢なものでありそれは本質的に単純ならざるものなのだ。」すでに出来上った結果や成功した場合だけと顔をつき合せているわれわれには，歴史の発展の途上で起った不成功の例がよくわかっていない。完全に生をまっとうしないものの中に他のものにとって代られるといった場合のあることがよくわかっていないのだ。マンモスや魚竜は象やワニにとって代られ，エジプトやインドはギリシャやローマにとって代られた。しかしだからといって，これらのものが犠牲になったということは言えない。なぜなら，彼らはその生を生きたことによって自分の子供にではないが，他のものに遺産をつたえたからである。

あるいは，抑圧された大衆が独占者の手から科学によって発達した力を奪いとるかも知れないし，あるいはブルジョワジーが政府権力に依拠して大衆を抑圧するようになるかも知れない。科学は国家形態や民族性[2]とは関係なしにヨーロッパ的生活の偉大な結果として残り，まさに人々の重荷となった歴史的形態を変えるかも知れない。いずれの場合でも，思想は救われるのであって，問題の本質はここにある。

ヨーロッパの未来についていうならば，「私はそれが最終的に決定されたものとは考えない。」[3] とゲルツェンは『向う岸から』その他でくりかえし言ったことをここでくりかえす。しかしどんなにひいきめに見ても，卒直に言って十年近く「書物や理論でなしに，集会や広場」で現在のヨーロッパの政治生活や社会生活を見てくると，近い将来によい解決があるものとは考えられない。一方には工業の病的ともいえる片寄った発達と富の集中とがあり，他方には大衆の未発達と革命政党の未熟と動揺がある。「この上なく恐ろしい流血の戦いなしにブルジョワジーが近いうちに崩壊したり古い国家体制が一新することは予見できない。」しかし，その「決定を君と一緒に待つことは私にはできない。君い髪はすっかり白くなり，私ももう44歳になる」のだから[4]。

しかし，ヨーロッパの外を見るならば，そこに「二つの活動的な国」を見ることができる。アメリカとロシア[5]がそれである。これら「成長するものは若いものである。」しかしロシアはアメリカと同じように成長しつつある力であるが，植民地でも外国の侵略によって出来た国でもなく，自らの土地に確固として存在する独自の世界である。アメリカはなだれのようにあらゆるものを押し流して前進するが，ロシアは水のように周囲を浸す。「ロシアはアメリカとは違う法則で拡大するのだ。」[6] アメリカで発展した思想は純アング

1) Там же, стр. 425.
2) 強調——原文。
3) Там же, стр. 426.
4) Там же, стр. 427. この表現は7年後に『鐘』の中でツルゲーネフを批判した言葉「白髪のマグダレーナ」を想起させる。
5) 強調——原文。
6) Там же, стр. 428.

ロ＝サクソン的なものであって，そこには強い人民と弱い政府という自治の思想がある。アメリカが将来社会主義にどう対処するか，言うのはむずかしい。そこには会社（組合）的精神，連合の精神は大いに発達しているが，ロシアに見られるような農村共同体はないからである。

これに対してロシアは，まったく特別な世界である。その生理学的性質は，アジア的でもヨーロッパ的でもないスラヴ的なものである。ロシアはヨーロッパの運命に参加しているが，ローマ法，封建制，カトリシズム，プロテスタンティズムといったヨーロッパの歴史的伝統を持たず，その過去の約束ごとから免れている。わが国の生活の基礎には，土地の共産的所有（коммунистическое владение землею）を行っている農村共同体があり，そこでは選挙によって代表をえらんで管理し，それぞれの農民の年貢をただしく決めている。そしてすべてこういった制度は，たとえ抑圧され歪められた状態とはいいながら，最悪の時代を生き抜いて，現在でも行われているのである[1]。

ヨーロッパの中でもプルードンとかマッツィーニとかカーライル，ミシュレといったまじめな人びとは，ロシアに特別の注意をはらってきたが，三十年にわたるニコライの治世が終って新しい時代に入った今日では，未来への力と権利は否定すべくもない[2]。すでにアレクサーンドル二世はアラクチェーエフの屯田制を廃止したし，軍事的専制はいまや過去のものとなりつつある。

わが国には，ヨーロッパがつまづいたような敷居はない。農村の生活の自然なやり方，ブルジョワジーの欠如，他のものをやすやすと自己のものに取入れる能力といったものは，われわれをしてすでに出来上って疲れきった民族よりも一歩先んじさせているのだ。

もしわれわれのまだ固まっていない地盤の上に唯一の確固たるものがあるとすれば，それは農村共同体であり，これをこそ保持しなければならない。

ロシアにおける共同体についての論争を読んだが，面白いことは面白いがどうも問題の本質をついているように思えない。農村共同体の始まりが先祖から伝来のものだったかあるいは国家が作り出したものか，地主のものだったか大公のものだったか，農奴制は共同体を強化したか否か。すべてこれらの問題は明らかにする必要があろうが，「われわれにとって何よりも大切なのは現状なのだ。」[3] 国家も農奴制もそれぞれこの伝来の共同体を保持してきた。「土地の共同体的所有，ミール，選挙はわが国の黒土と同じようにヨーロッパにはない地盤であり，新しい社会生活はその上でこそやすやすと成長することができるのだ。」だからこそ自分は，病み疲れたヨーロッパの死の前の苦しみに背を向けて，自分がロシア人であることを内心で喜んでいるのだ。

ロシアが現在入りつつある時代はかつてないほど重大な時期だ。ロシアは小さな政治的改革ではなしに，巨大な経済的[4] 変革に，農奴解放に直面しているのだ。それだけではない。われわれは暴力的破局なしに，問題の解決を社会と国家が手をたずさえてやろうとしているのだ。われわれは土地の所有権や，労働者と生産手段の関係をこわして作りなおす

1) Там же, стр. 430.
2) 強調——原文。
3) Там же, стр. 431.
4) 強調——原文。

よう要請されているのだ。これは未来の成長への輝かしい前進ではないだろうか。われわれの歴史的行為の新しいプログラムはこのようにすこぶる単純なものだ。何を為すべきかを知るためには，特別な才能は不必要であって，目がありさえすればよいのだ。ただ政府の臆病と不器用と怖気とが道を見るのを妨げ，貴重な時を空費させているのだ。ニコライ時代の冬が去って，血管に凍りついた血が溶け，収縮していた心臓が再び生き生きと鼓動を開始したこの時を利用しなくてもよいものだろうか[1]。

機は熟している。機関車は燃料を焚いて走り出す準備ができている。足りないのは大胆な手だけだ。

われわれの機関士に知らせよう。人民はそこに力と大胆な思想を感じさえするならば，ピョートルの野蛮もエカテリーナの淫蕩も許してきた。しかし無制限の権力を持ちながら，状況を愚かしく利用し悪ふざけをするようなときは決して許さないであろう。しかしアレクサーンドル二世のよき心がこのような愚かなまねをするようなことはあるまい。

ヨーロッパには近い将来に可能性はないだろう。もし自分がロシア人でなかったら，とうの昔にアメリカに渡っていたことだろう。

しかし私は運命論者でもないし，宿命を信じてもいない。自然と歴史とは，日毎に，世紀ごとに，遅くなったり速くなったりしながら，また新しい道を切開いたり古い道に出っくわしたりしながら進むのだ。「私は発達の可能性について語っているのであって，それが不可避だと言っているのではない。……けだし諸民族の生活においては，きわめて多くのことが人物や意志に依存しているからだ。」「私はわが心と知性とで歴史がまさにわれわれの戸口をノックしているのを感じている。」[2] もしわれわれがそれを開かなかったら，アメリカやオーストラリアにお鉢が廻るかも知れない。われわれが大きな力を持ちながら，いたずらにこの力と時間とを空費しているとは何と残念なことか。いつになったらこのことがわかるのだろうか！ニコライの死を聞いた時，われわれは「新しい時代がロシアに訪れた」と言った。そうだ，時代を新しく[3]するのだ。そのためには決心しさえすればよいのだ。

しかしアレクサーンドル二世の改革の歩みはなんと遅々たることか。このような状態では今日のプロイセンの状態に到達するのにさえ200年もかかってしまう。なんで皇帝や政府は未だにニコライ時代のヨーロッパの恨みを買うような愚かな政策を追っているのだろうか。ピョートルはオーストリアのためにハンガリーを抑圧するようなまねはしなかった。アレクサーンドル二世はポーランドでいったい何をやっているというのだ。早く夢からさめなければならない。[4]

われわれは農民が地主の権力から解放されることを欲している。もとよりこれは夢ではない。われわれは政府に援助ではなく，妨害せぬように求めているのだ。

ヨーロッパはすべての持てるものと同様，保守的になってしまって，自らの富を利用することすらできないでいる。「われわれには大切なものは何ひとつない。」[5] 勿論，貧しさ

1) Там же, стр. 432.
2) Там же, стр. 433.
3) 強調——原文。
4) Там же, стр. 434. 早くもここでアレクサーンドル二世への期待と並行してのちに皇帝への決定的不信の原因となる「ポーランド問題」が言及されているのは注目に価する。
5) Там, же, стр. 436.

がそれだけで自由につながるか，それとも奴隷制につながるかは何とも言えない。反対の原理からは反対の結論が出る。この点で私はスラヴ主義者ではなく，彼らの思想の中のあるものに出会ったのだ。私がどういう点において「モスクワの文学的旧教徒」と同調するか，わかってもらえたことと思う。

われわれの目的は同じはずだ。人民の自由な発展を妨げている柵をとりはずし，人民自身の政府の自覚をうながそう。

「それ故に私は君への長い手紙を次の言葉をもって締めくくろう。

仕事をしよう。われわれのために十分働いてくれたロシアの人民のために仕事をしよう。」[1]

すでに見たようにゲルツェンの共同体への着目は1843年6月28日の日記に明らかであり，十数年へだてたこの文章の中にわれわれはまったく同じ表現，同じ発想法を見出して，ある意味では彼の思想の変化のなさ，ないし一貫性に一驚を禁じえない。しかしゲルツェンは1848年の革命の挫折を経験してこの共同体への期待を一段と強め，論文 «La Russie» 以下において，これをもって将来特殊なロシア的社会主義の核となるべきことをくりかえし主張してきたのであった。だがかつての旧友たるロシアの「西欧主義者」たちにしてみれば，この点が大きな疑惑とも不満ともなっていたのである。ツルゲーネフにもっとも近かった旧友グラノーフスキーもこのことに関してゲルツェンを何度も批判している[2]。「西欧の欠点を見て君はスラヴ主義者に傾き，ホミヤコーフやアクサーコフに手をさしのべようとしている。もし此処で暮していたら，別のことを言っただろう。」[3] というグラノーフスキーの言葉は，ゲルツェンにとってまったく無視することのできぬものがあったに違いない。そこで彼はこの「変奏曲」の中で，まず自分とスラヴ主義者とがどの点で類似しており，どの点で本質的に違うのか明らかにしたかったのである。彼にしてみれば，すでに幾度となくくりかえしてきた主張をあらためてくり返すことに少なからぬためらいと恥じらいを感じたことが推測される。この論文の表題がそれを示している。しかし，ツルゲーネフに会って直接ロシアの論壇の自分に対する批評を耳にしたとき，「再び」この点について自分の立場をはっきりさせるべきだと心を決めたのであろう。また「新しい時代」に入ったロシアがいつまでも改革をためらい，知識人があいかわらず「スコラ的」な論争をたたかわしていることも，ゲルツェンから見るならば，いかにもじれったいことに思われたに違いない。「主題」はたしかに「古い」が，このあせりが「変奏曲」の随所に新しいトーンとなって出ている。それだけではない。彼がロンドンの「自由ロシア出版所」で出していたそれまでの文書は，「大きな困難と極秘のうちに」[4] ロシアに持ち込まれ，ごく一部の人々にしか読まれなかったのが，新帝の即位後『北極星』が出版されるようにな

1) Там же.
2) グラノーフスキーのゲルツェンあて書簡参照。Литературное наследство т. 62, стр. 86–104. とくに1851年5～6月（стр. 99），1853年8月（стр. 100），1855年5月末—6月始め（стр. 102–103）の部分にこの点ははっきりと出ている。
3) Там же, стр. 103.
4) Там же, стр. 102.

ると今までよりははるかに多くの人に読まれるようになったという背景[1] も執筆の動機としてあったに違いない。

このように考えてみると，上記の論文はツルゲーネフのロンドン来訪を一つのきっかけとして書かれたのは疑いないとしても，その意図はツルゲーネフとの個人的な関係をはるかにこえて，ロシアに居るかつての友人や論敵にあらためて自分の立場を説明し，改革を前にして彼らの不毛な論争にとどめをさすことをめざしたものと考えることができる。したがってこの書簡形式の論文もリシネルのいう「宛先なき手紙」[2] の一つと考えるべきであり，ゲルツェンはもとよりツルゲーネフもこのことを十分承知していたものと思われる。というのは，この時のツルゲーネフが『北極星』を読んでいて，折にふれゲルツェンに感想を書き送っていたにも拘らず[3]，この論文についてはまったく言及していないからである。

後年の両者の論争との関係について一言するならば，ここでゲルツェンがスラヴ主義者とのみならず，リベラルな西欧主義者とも次の三点で相違していると主張している点は記憶さるべきであろう。即ちその第一は，ゲルツェンが西欧社会が歴史的に受け継いできた思想を，人類に普遍的なものとして，ロシアもまたこれを継承すべきであると考えながら，ロシアの発展の道は西欧とは歴史的にも「生理学」的にも異なるものであると考えていたこと，第二に，今後のロシアの発展が農村共同体を核とし，さらにそこに西欧の個人の原理をはじめとする思想を導入することによって可能である（必然ではない）としていること，そして最後にその発展の第一歩として，一日も早くロシアに根本的な改革が行われねばならず，それは何よりも農奴の解放と言論の自由とをまずもって獲得しなければならないということである。しかもこの最後の点については，アレクサーンドル二世の改革への期待をいまだ保持しながらも，もし逡巡したり，農民の期待を裏切ることがあるならば，下からの革命は避けられないとゲルツェンは考えていたことは特記せねばならない。

このような改革を前にしての彼の焦燥感が『ロシアからの声』や『鐘』の発行に踏み切らせたということができるのである。そしてゲルツェンとツルゲーネフをはじめリベラルな西欧主義者との間のみぞが，ますますラジカルになってゆく『鐘』の調子とともに，しだいに埋めることができないほど大きくなってゆくことをわれわれは以下において見るであろう。

III ロンドンの『鐘』

1857年7月1日，『鐘』の第一号がロンドンの自由ロシア出版所から『北極星』の付録という形[4] で発行された。この間の事情をナターリア・ツチコーヴァ＝オガリョーヴァは

1) Эльсберг, Указ. соч., стр. 399.
2) С. Д. Лишнер, Указ. статья, стр. 194.
3) Тургенев, Письма, III, 130 (1857年7月17日の手紙), 180—181 (1858年1月7日の手紙)。
4) この付録という文字は1861年12月22日発行の No. 117 まで付されており，それ以後は消えている。

次のように『回想記』の中に記している。

「私たちがこの家に移って間もなく，私の居合わせたところでオガリョーフが昼食のあとゲルツェンにこう言いました。

——ところでアレクサンドル，『北極星』も『過去と思索』もいいけど，これは必要なものではない。これはわれわれの味方との対談ではない。たとえ二週間に一度，月に一度でもよいから規則正しく雑誌を発行することがぜひ必要だろう。ロシアに対しても他に対しても自分たちの見解と要望を述べたらどうだろう。

ゲルツェンはこの考えにすっかり夢中になりました。

——そうだ，オガリョーフ——と彼は意気こんで叫びました。——雑誌を出そう。『鐘』という名をつけよう。雀ケ丘で二人きりだったように，二人だけでヴェーチェの鐘を鳴らすのだ。だれかがそれに答えるだろう。」

つづけて彼女はこの計画に対して，ツルゲーネフがどのように反応したかをすぐあとに書いている。

「この日から彼らは『鐘』のために論文を準備し始め，しばらくしてからこのロンドンのロシア人の機関紙の第一号が出ました……彼（ゲルツェン—引用者）はこれを至るところに送り，まもなくロシアでもその存在が知られるようになりました。その当時イヴァン・セルゲエーヴィッチ・ツルゲーネフがパリからやってきました。オガリョーフとゲルツェンは彼にこの喜ばしいニュースをつたえ，『鐘』の第一号を彼にも示しました。しかしイヴァン・セルゲーヴィッチはこの計画にまるっきり賛成しませんでした。デリケートな作家であり，またたぐいまれな才能と洗錬された趣味の持ち主でもある彼は，『北極星』と『過去と思索』の出版には喜んでいましたが，つねに政治的見解や志向からかけ離れていましたので，英国で孤立している二人がはるかに遠い国の仲間と活発な対談を交わして，その国の中に言うべき言葉を見出し，その国が必要とするものを理解できるというようにはとても考えられなかったのです。

——いや，それは不可能だ——とイヴァン・セルゲーヴィッチは申しました——そんな空想は捨てるべきだ。君たちの力を分散してはならない。それに君たちには沢山の仕事があるじゃないか。『北極星』と『過去と思索』。それに君たちは二人っきりだ。

——しかしもう仕事は始っているんだ。続けなければならない——と彼らは答えました。

——成功はおぼつかないよ。それに文学は多くのものを失うことにもなろう。——イヴァン・セルゲーヴィッチは一生懸命反対しました。」[1]

このように雑誌『鐘』はオガリョーフの提案をゲルツェンがいれて創刊されるに至ったのであるが，この点についてはゲルツェン自身も後年ツルゲーネフにあてた手紙の中で述べている[2]。ところでこの時のツルゲーネフのロンドン訪問は，先の1856年の初秋につ

1) Н. А. Тучкова-Огарева, Указ. соч., стр. 111-112.
2) Герцен, XXVII, 265（1862年11月22日付）。本論83頁参照。

ぐ二回目のもので1857年の5月24日から約一ケ月にわたっている[1]。『鐘』を創刊しようというオガリョーフの提案はこの年の春のことと推測されるが[2]，ツルゲーネフの訪問までには大体準備のできていたことが，ゲルツェンの5月25日付ミシュレあての手紙でわかる。

この手紙の中で彼はミシュレにツルゲーネフを紹介するとともに[3]，「6月1日から，アクティヴで完全に政治的な反体制の月刊誌を出します。われわれはロシアとポーランドにのみ限定するつもりです。」[4] と言っている。出版の技術的な面や販路拡張には，チェルネツキーやトホルジェフスキーなどのポーランドの亡命革命家をはじめとして，身分も国籍もさまざまな亡命者が協力して着々と準備が進められた[5]。

しかしこの企画に対するツルゲーネフの態度は，いま見たツチコーヴァ＝オガリョーヴァが「回想」しているように，決して好意的なものではなかった。彼の目からすれば，第一にロシアから離れて実状にうといゲルツェンたちが，はたしてロシア国内の世論を動かすほどの力を持ちうるか否か，政府に対する批判の行きすぎが，かえってマイナスの結果を生むことになるのではないかとの危惧があったに違いない。さらに『過去と思索』を読んで，「強き好き印象」[6] を受けたツルゲーネフにしてみれば，なによりもこの作品の完成をのぞみ，ゲルツェンがあまりにもジャーナリスティックになることによって，「文学が多くのものを失う」ことを懸念したのであろう。

そして，このようなツルゲーネフの予見は，早くも『鐘』の第一号にあらわれることになる。

言論の自由と農奴の解放と地主の農奴に対する殴打の廃止の三つのスローガンをかかげ，「沈黙は賛成のしるしである」として，今こそ自由な声，〈Vivos voco〉をロシアの内外であげようとの呼びかけを「序文」にかかげたこの第一号は，「雑録」の中で皇太后アレクサーンドラ・フェオードロヴナの西ヨーロッパ旅行を痛烈に諷刺し，農奴制支持者である彼女とアレクサーンドル皇帝との微妙な対立関係までもすっぱぬいた[7]。

ゲルツェンのこの一文は「センセーションを巻き起し」[8] とくに宮中ではかなりなショックを受けたと言われる[9]。ツルゲーネフもこのことを心配し，7月17日の書簡でゲルツェンに対し，第三部の長官がオルローフに代って反動で知られたドルゴルーコフ侯になったこと，憲兵が再び私生活にまで干渉するようになってきたので慎重に行動することを求めている[10]。

---

1) Тургенев, Письма, III, 654.
2) Базилева, Указ. соч., стр. 59-60.
3) ツルゲーネフは1月8日付の手紙でゲルツエンにミシュレを紹介してほしいと頼んでいる（Тургенев, Письма, III, 69)。
4) Герцен, XXVI, 93-94.
5) Базилева, Указ. соч., стр. 61-62.
6) Тургенев, Письма, III, 77（1857年1月16日ゲルツエンあて)。
7) Колокол, Факсимильное изд. М., 1962, выпуск I стр, 8-9.
8) Герцен, XXVI, 112（1857年8月14日ツルゲーネフあて)。
9) Тургенев, Письма, III, 513-514.
10) Там же, стр. 130.

しかしもう一方でツルゲーネフはこの『鐘』のためにコチュベーイ事件[1]について資料を送り，できるだけ早くこれを誌上に発表するよう頼むなど協力もしている。[2] このことは『鐘』の第二号（1857年8月1日）にのった『ロシアにおける革命』や第四号に掲載された『アレクサーンドル二世への手紙』が示すように，上からの平和で改革的な道がロシアにおいても可能であると当時のゲルツェンが考えていたことと関係がある。

この『ロシアにおける革命』と題する論文は，農奴解放前のゲルツェンの見解がもっともよくまとまって表現されているものと考えられるので以下においてこれを見ることとする。

まず冒頭においてゲルツェンは，ロシアが改革の「前夜」にあるだけでなく，すでにその中に入っており，世論は改革の不可避なること，いまや政府も「発達と変化と進歩の新しい局面」に引き入れられたのだと述べている。

しかしロシアでは革命の前に通常見られるような徴候はなく，人びとは静かに新しい政府を好意をもって見守っている。ロシアでかつてあった根本的改革はピョートル一世という一人の人間によるもので，それはフランス革命のような流血の闘争を生むことがなかった。「疑いもなく，蜂起や公然たる闘争は革命のもっとも強力な手段であるが，決して唯一のものではない。」歴史的に見ても，フランスで血で血を洗う戦いが行われていた時に，英国はゆっくりとした足取りで巨大な変化をなしとげた。職業的な革命家はこのような平和な道を好まないが，われわれは「心から平和で人間的な発展の道の方が流血の道よりもよしとする」ものである。しかし「同時にニコライ時代の statu quo の停滞よりは，突発的で制御されない発展を同じように心からよしとする」ものである。[3]

陛下は改革をのぞまれているが，それならば人民の希求を理解しようとしている人びとを抑えつける代りに，これら人民と共に生きている人たちの声に耳を傾けなければならない。ピョートル一世は，専制権力と個人的な力に立脚して人民の意志に反して，改革を行ったが，現在の政府は「進歩的テロ」に頼るべきではない。少数ではあるがロシアには人民のために人民と共に進もうとしている人びとがいる。これらの人たちは西ヨーロッパの人びとにくらべて社会問題の論議にはなれていないかも知れないが，彼らよりも若く，伝統にとらわれていない。しかも彼らは西欧の「偉大な不幸」を見て，成長もしたし，考え深くもなった。

今日ヨーロッパのすべての政府は，土地所有の問題，労働とその報酬の問題，共同体とプロレタリアートの問題等の前で恐れおののいている。これらの問題の解決こそアレクサーンドル二世に課せられた「歴史的使命」ではないだろうか。しかしこれらの課題の前で，政府のみならず，われわれも亦問題のむずかしさに自信を失っているのが現状である。われわれはロシアの汚点を癒しがたいものと考えて，よく外国人の前で赤くなったものだ

1) 1853年6月ポルタワの大地主コチュベーイが自分の領地の管理人であるオーストリア国籍のザリツマンを撃って負傷させたにも拘らず，罪を問われず逆にザリツマンが拘禁された事件。См. Тургенев, Письма, III, 538.

2) Там же, стр. 176（1857年12月22日付ローマからの手紙）。この資料は『鐘』の第7号(1858年12月1日）に『非公開の裁判は何を意味するか』と題されて掲載された。

3) Колокол, выпуск I, стр. 11.

が，このような自信のなさは早く捨て去らなければならない。

ロシアの人民は遅れていると言われる。彼らは自分たちを圧倒している貧困や無権利になれてしまっているのだとも言われる。しかし人民大衆の歩みは，動き出すやおどろくほど巨大なものだ。われわれが為さねばならないことは，このような人民を新しい生活に導くというよりも，彼らの昔からの生活習慣が抑えつけているところのものを取り除いてやることである。

われわれはよくロシアの人民と比較して，外国の人民がはるかによいと考えているが，たとえば革命前のフランスの農民の状態は現在のロシアの農民と変るところがなかった。彼らは貯えるどころか餓死しないでいるのが，やっとだった。そして一片のパンのために絶望的な戦いをしたのである。そしてその結果はどうだったろうか。はたして革命の理想は実現されただろうか。半世紀もたってみたらフランスは市民的聖物(シモニー)売買とブルジョワ的堕落の下に弱り衰えてしまったではないか。「われわれが同様な革命をしなければならないということはないのだ。われわれには別の課題があり，その解決のための力も別なものなのだ。」[1]

フランスの歴史的慣習が何世紀ものあいだかかって形成され，フランスの諸制度もまたこの国民の慣習や生活に深い根を持っていることを忘れてはならない。わが国にはこのような「封建制や都市の生活やカトリシズム」と歴史的につながるものは何もない。わが国にあるのは「皇帝の独裁と農村的生活慣習 (императорская диктатура и сельский быт)」である。ピョートル一世とともに始ったロシアの「再建」は，数々の外国の制度をモデルとして取入れたが，根底にあるところの農村はまったく変ることがなかった。「これを変えることはきわめてむずかしいことであろう。それに必要なことでもあるまい。まったく反対にこの上にこそ未来のロシアが築かれなければならないのだ！」[2]

軍事的専制やドイツ的官僚制から，もっと単純で人民的な国家構造の原理に移ることは勿論容易なことではあるまい。しかしそのための障害がどこにあるのか正しく知ることが第一である。

陛下は官房や役人どもによって正しく事態を見ることができないでいる。そして忠言をしうるような人たちは，あたかも氷の上の魚のように声を出さずに無益にのたうちまわっている。ピョートルの事業を継続するためには，彼がモスクワ時代と訣別したように陛下もペテルブルグ時代と訣別しなければならない。これらの人為的な統治の道具はもう古いものになってしまっている。「権力を手に，一方では人民に依拠し，他方ではロシアのすべての思考する教養ある人びとに依拠するならば，現在の政府はいかなる危険もなしにおどろくべき事業をなしとげうるであろう。

アレクサーンドル二世のような状態は，ヨーロッパのいかなる君主にも与えられてはいないのである。しかし多く与えられるものは，また多くを求められるものでもある！」

このようなロシアの特殊性を前提にした上でのツァーリによる平和な根本的改革への期

1) Там же, стр. 13.
2) Там же, стр. 14.

待は，『鐘』の第四号にのった『皇帝アレクサーンドル二世への手紙』にも同じようにあらわれている。先に見た『北極星』第一号にのったアレクサーンドル二世の即位を祝し，その改革を期待する気持ちが依然として自分たちには続いていることをゲルツェンはこの中でもあらためて断言している[1]。

このようなゲルツェンの態度はツルゲーネフから見れば先の皇太后に対する諷刺よりもはるかに好ましいものであった。

この点についてツルゲーネフは1858年1月7日付のローマからの手紙でゲルツェンに次のように書いている。

「……ぼくは『鐘』のすべての号に君の陛下へあてた手紙のような論文が書かれ得ないことは承知している。しかし《わるふざけ》（«игривость»）は不必要だ。とくにロシアでまったく真面目な事業が準備されている現在ではなおさらだ。二つの勅書とイグナーチエフあての第三番の勅書はわが国の貴族層にかつて聞いたこともないような恐慌をまき起した。表面上は覚悟をしているがその下にはこの上なく鈍い頑固さがかくされている。恐怖もあればけちな考えもある。しかしもう後へさがることはできない。le vin est tiré——il faut le boire.（酒瓶は抜かれた——飲まねばならない。）」[2]

ツルゲーネフにしてみれば，皇室に対するふざけた調子は，『鐘』の権威を下げ，ロシアの心ある知識人をかえって遠ざけるものに思われたのである。しかしゲルツェンは必ずしもそうは考えない。ツルゲーネフのいわば個人的忠告を一般化し，公けの場に出して反論する。彼は『鐘』の第八号で，「笑い」は新しき生命の成長を阻止せんとするすべての古いものに対する「武器」であるとして，アリストパネス以来の笑いの歴史について語り，ともするとロシア人が冗談に対して侮辱を感ずる一方，上からの嘲罵には忍耐ぶかいのはなぜであろうかと，かつて15年前にベリンスキーの提出した疑問をあらためて持ち出している[3]。

ツルゲーネフとしてもこのようなゲルツェンの考えをまったく知らなかったとは思われない。先の皇太后を諷刺した一文の上には，「目に見える笑いの蔭に目に見えない涙がある！」[4] というゴーゴリの言葉が記されてあったことを彼が見落したとは考えられぬ。しかしツルゲーネフの目からみれば，いよいよアレクサーンドル二世が解放の事業に乗り出さんとした矢先に，しかもロシアにはこの事業にあきらかに反対する地主貴族が沢山いるのに，このような皇室に対する誹謗はともすれば反動勢力を助長するものと考えられたからであろう。

ここでツルゲーネフが記しているアレクサーンドル二世の勅書が，1857年11月20日[5]

1) Там же, стр. 30.
2) Тургенев, Письма, III, 181.
3) Колокол, выпуск I, 65-66
4) Там же, стр. 8.
5) この日付は皇帝の署名の日付である。ナジーモフ勅書の公布は11月24日ということになっているが，これは厳密にいえば公布されたのではなく，小部数が印刷されて総督や貴族団長に送付されたにすぎなかった。Cf. Terence Emmons, *The Russian Landed Gentry and the Peasant Emancipation of 1861*, Cambridge, 1968, p. 51, n. 4

（露暦）にヴィルノ他二県の総督であるナジーモフに与えられたものと，同年12月5日（同）ペテルブルグ総督のイグナーチエフに与えられたものであることはいうまでもない。ただ「イグナーチエフあての第三番目の勅書」というのはツルゲーネフの誤りで，これは第二番目であって，第三番目の勅書は同年12月24日にニジェゴロト県知事にあてられたものである[1]。先の1月7日付のツルゲーネフの手紙は露暦で12月26日であるから，はたしてローマの彼がいち早くこのニュースをキャッチしていたかどうか疑わしいが，おそらくこのころのロシアからのニュースには多少の混同があったことも推測される。

いずれにせよこのナジーモフあての勅書は農奴解放への具体的な第一歩をなすものであるが，これに対して「直ちに反応を示したのはリベラリスト達」[2] であって，12月28日にはカヴェーリンの提案でこの勅書の精神を称え，解放事業を政府が一貫して行うよう督励するための宴会がモスクワで開かれている[3]。

ロンドンの『鐘』もこのニュースを1852年1月1日付の第7号のトップに「農民の解放！」と大きな見出しをつけて掲載し，「われわれは農奴身分の解放にふみ出したアレクサーンドル二世への挨拶をもって新しい年に入った……このことをもって新しい年を始めうることはわれわれの幸せである。この年がロシアにとって真に新しい時代となるように。」と述べている[4]。

このように解放に対する明瞭な意図が皇帝からはじめて具体的に示されたことは[5]，ゲルツェン自身にとって大きな喜びであった。彼は『鐘』の第9号の冒頭につぎのように書いている。

「«ガリラヤ人よ，汝は勝てり！» われわれは容易にこのように言うことができる。なぜならわれわれの戦いには自尊心や利己心は混入してはいないからだ。……アレクサーンドル二世が最初の勅書に署名して，自らが農民解放をのぞみ，その側に立っているということを全国民に言明して以来，われわれの彼に対する立場は変ったのだ……

アレクサーンドル二世の名は今後歴史に属するものである。彼の治世がたとえ明日終ったとしても，あるいは少数の独裁者の反抗やバールシチや笞刑を支持する者の反乱によって倒されたとしても，このことは変らない。農民の解放は彼によって[6] 始められたのであり，来るべき世代はこのことを忘れないであろう！」[7]

しかしこのような手離しの称讃の末尾にゲルツェンがつぎのような言葉を付していることをわれわれは注目せねばなるまい。

---

1) 菊地昌典『ロシア農奴解放の研究』御茶の水書房，1964，301頁。
2) 菊地，前掲書，307頁。
3) 同書，308—309頁。
4) Колокол, выпуск I, стр. 51. この署名は Р. Ч. となっているが，オガリョーフの手になるものである。Базилева, Указ. соч., стр. 83.
5) 解放についての皇帝の意図はこれよりも前1856年3月30日（露暦）モスクワにおいて郡貴族団長らを前にしての演説において示されたが，まったく具体的なものではなかった。
6) 強調——原文（アカデミー版による。ファクシミリ版にはない）。
7) Колокол, выпуск I, стр.67（1858年2月15日付第9号）

「われわれに関して言うならば，われわれの前途は定っている。われわれは解放する者と共に，解放する限り[1]一緒に進むのだ。この点においてわれわれは全生涯を通じて一貫している。」[2]

そして早くもここに述べられているゲルツェンの危惧が『鐘』の18号にあらわれることになる。1858年7月1日付の巻頭論文は「アレクサーンドル二世は即位の時にロシアが抱いた期待を実現しなかった」[3]として批判を開始するのである。皇帝は解放の道へ踏み出したと思ったとたん，思い直してしまった。「右へ行くか左へ行くか」はわからないが，問題は彼を取り巻く反動的官僚の声しか耳に入らないということにある。「ツァーリは人民に手をさしのべようとされ，人民はその手を取ろうとするが，パーニンとその一味にさえぎられて届かない。これこそアリストパネス的情景である！」[4] われわれの主張を読者は胸に手をあててよく考えてもらいたい。いったいどこに「実現不可能な要求や，政治的ユートピアや蜂起への呼びかけ」[5]があるというのか？『鐘』は農民解放の勅書が出て以来変ったかも知れない。われわれは論争を一部犠牲にしても政府に近づいた。なぜなら政府の方がわれわれに近づいたからだ。しかし本質的にはわれわれの道は何ら変っていない。反動的な政治を否定し，現代的な，進歩的な統治をよしとしてきただけである。アレクサーンドル二世が流血の革命の時代に終止符を打って，平和なやり方で古い専制からより人間的で自由なロシアを建設するように，事実われわれには思えたのだ。勅書が出てから半年の間，われわれは一貫してその実現に努力してきた。このような努力がもしむくわれないとしたら，それは改革の事業に反対する腐敗せる一部の貴族が皇帝の足をひっぱっているからにほかならない。われわれは生ける者の声が皇帝にまで達するように，検閲の廃止，解放事業の公開をここに要求する。ゲルツェンはこのように述べたあとで，『鐘』のエピグラフに掲げた Vivos voco！の意味をあらためて強調するのである。

このようなロシアにおける反動勢力の抬頭に関しては，5月30日付のパリからゲルツェンにあてたツルゲーネフの手紙にも見られる。この中で彼は，ロシアの秘密警察が『鐘』の発売禁止をパリにおいて画策している事実を告げたあとで，チトーフ，カヴェーリン，シチェルバートフら自由主義陣営の退陣と，新文相コヴァレーフスキーや皇太子の教師としてチトーフに代ったグリムのことについて最新のニュースを知らせている[6]。慎重なツルゲーネフはこの中で，当局の嫌疑を受けることをおもんぱかって，口外せぬよう頼んだのであるが，ユーリー・サマーリンらからも同種の情報を入手したゲルツェンは，この事実を『黒い内閣』と題して『鐘』の第20号（1850年8月1日付）にすっぱぬいた。[7]

しかしツルゲーネフにおいても皇帝その人に対する期待は，はっきりあらわれている。いま見たゲルツェンあての手紙の末尾はつぎのようになっている。

1) 強調——原文（アカデミー版による。ファクシミリ版にはない）。
2) Там же, стр. 68.
3) Колокол, выпуск I, стр. 141（強調——原文）
4) Там же, стр. 142.
5) Там же.
6) Тургенев, Письма, III, 219, 563.
7) Колокол, выпуск I, стр. 161-163

「しかしぼくはいまでもアレクサーンドル・ニコラーエヴィチに期待をかけている。多分彼はわれわれが想像する以上に悪い連中に取り巻かれているのだろうが，それにしてもだ。友達の皆によろしく，君を抱擁する。水曜にはロシアに発つ。ベルリンから君に書こう。Addio. 愛する祖国ではむずかしい出来事がぼくを待ち受けている。」[1]

この時ツルゲーネフの帰国をうながしたのは，ロシアにいる友人たちからの手紙であった。マーイコフは創造的な，社会的な仕事をするためにロシアが彼を必要としていると言ってきたが[2]，それ以上にアクサーコフ老人のパセティックな「祖国の運命が決められる時に人は異国の土地に生きることは許されない」との呼びかけは[3]，地主として領地をどうこうするより「社会の一員」としてなすべきことをするためにロシアに帰る必要をツルゲーネフに熱っぽく説いたものであった。

*
*　　*

ツルゲーネフはベルリンからも，またまる一年にわたるロンア滞在期間中にも，ゲルツェンにあてて一通の手紙も書いていない。そしてこの時の彼は，めずらしく長期間を領地ですごすことになった。1858年6月末から11月中旬までの期間と，翌1859年の4月はじめから約1ケ月の，のべ半年間にわたってツルゲーネフはスパースコエの持ち村で「農民との諸関係の調節」[4] に当った。この年8月11日 ヴィアルド夫人へあてた手紙の中 で彼は，秋からは自分の農奴に土地の半分を譲り，年貢（オブローク）を支払うように改め，自分の土地は農夫をやとって耕やさせることになろうと述べている[5]。

スパースコエに着いた翌日，彼はオリョールまで行って県の農奴解放準備委員会の選挙に立会うことをのぞんだが，選挙はすでに終っていた。現地で見た農奴解放の事業はツルゲーネフの目にも容易ならぬものにうつった。もっとも反動的な人間が委員に選ばれただけでなく，政府の任命する委員が委員会に加っているという事実がまずはじめにこのことを痛感させたからである。「まったく奇妙な時代にわれわれは生きているものだ！… Qui vivra verra.（時がたてばわかるだろう。）」[6] とこの時彼は友人チェルカースキーへ書き送っている。

さらにこのような政府の改革事業への不信は，『鐘』 においてより強く あらわれるようになる。8月15日付の第21号は『もはや農民解放はない！』 というセンセーショナルな題の下に，ゲルツェンとオガリョーフによって，ロストーフツェフを長くする農民問題中央委員会の改革案を皇帝が認可されぬよう要請しているのである。この改革案によれば，ヴォーロスチの長は貴族によって貴族から選出 されることになるが，「地主が長官 として残れば，農奴身分が廃止されない」[7] ことはあきらかだからである。

1) Тургенев, Письма, III, 219-220
2) Тургенев и круг «современника», М-Л, 1930, стр. 346
3) 1857年12月20日付の手紙。Cf.Granjard, op. cit., p. 275
4) Тургенев, Письма, III, 230（1858年8月11日付ポリーヌ・ヴィアルド夫人への手紙。）
5) Там же.
6) Там же, стр. 227（1857年7月21日付の手紙。）
7) Колокол, выпуск, I, стр. 169.

ところでツルゲーネフはこのスパースコエ滞在中も，他方ではシギ撃ちの大旅行をしたり[1]，夏中長編小説《貴族の巣》の執筆もしたりしている[2]。そして11月にはモスクワに戻り，冬の間をずっとペテルブルグですごした[3]。しかし翌1859年の二月末には「陛下の命」によってポーランド語の新聞《Słowo》が発禁となり，編集者イオサファト・オグルイスコがペトロパヴロフスク要塞監獄に監禁される事件が起った。この新聞(週二回発行)はもともとリベラルで妥協的な性格のものであったといわれるが，2月21日の紙上にポーランドの亡命政治家イアヒム・レレーヴェルの編集者オグルイスコとペテルブルグ大学教授アントン・チャイコフスキーあての書簡を掲載し，且つこれに同情的な言葉を編集部が付けたことが当局の怒りを招いたのである[4]。

前にツルゲーネフがゲルツェンへの手紙で予告した政府の反動化は一つ一つ事実となってあらわれた。

彼はただちにこの事件に関し，3月17日に皇帝アレクサンードル二世へ書簡を送ったが，これは7年前のゴーゴリ追悼事件で首都を追放された時に未だ皇太子であった皇帝へさし出した手紙につづく二度目のものであって，この中には当時のツルゲーネフの皇帝に対する態度や，改革の事業への期待がよくあらわれている。

「至仁なる国父陛下！

陛下にお手紙をさしあげる前に私は数日間躊躇致しました。かかる行為が非難すべきものかも知れないことは私とてもよく承知しておりますが，ロシア人として，陛下の臣民として，またかつて陛下の暖き庇護を蒙り，恩恵を記憶している者と致しまして陛下に御説明申し上げますことは聖なる義務と考えるに至った次第であります。私は自らの意図が完全に清廉潔白であることを確信いたしておりますが，もし私の表現に不適当なる箇所がございましたら陛下のご寛恕を乞うものであります。

私が陛下に対して抱いている感情は説明の要もありません。私は他のすべてのロシア人とかかる感情を共にしております。農民解放の大事業に賢明にも着手され，これを毅然として遂行されておられる君主——すでにこのことのみをもってしても後の世の称讃と臣下の愛とは永久にゆるぎないものとなったのであります。しかし乍ら，陛下のご名誉がなによりも輝くべき臣下の者の中に，政府の行動——ロシアにとって幸せにもこれまでに陛下の御代を記念してまいりましたかの精神を認めえない者のおりますことを陛下のお耳に入れるということを，私の良心は命ずるのであります。罪なき者が監禁されるということ——もしそれが法の字句，本質の前でなしに行われ，二つの民族の合体と和合というもっぱら理にかなった独自の目的をもつ雑誌が発禁されておりますということは，——これら同種のやり方はすべて陛下に忠実なる者を悲しませ，生まれた信頼を取り除き，いまだ不幸にもわが国民の自覚においては弱き法の精神をゆるがせ，権力が自らの支柱と期待する国家と個人の利益の最終的融合の時期を延期せしめたのであります。陛下，過去四年間におき

1) Тургенев, Письма, III, 230–231.
2) Там же, стр. 230, 236.
3) Там же, стр. 655.
4) Там же, стр. 648–649.

まして，世論がかくも一致して政府の施策に反対を表現したことは未だかつてありませんでした。先見の明ある政府がどれほどかかる表現に注意すべきか。またこの事実を陛下のご考慮に供すべきか否かを勝手にきめることは許されないのであります。

孤独な声たりとも玉座に達するこの幸せな時代とは言いながら，私は自分の孤独な声が何の意味も持たぬことは承知いたしております。しかし私は自分が一般の人びとの共通の確信を述べているのだと考える疑いえぬ根拠を有するものであります。これらの人びとは陛下からごらんになられてご不審を持たれるかも知れませんが，陛下を信ずることは誰よりも固く，ひたすら陛下ひとりにその期待をおかけしているのであります。彼らの目には，ロシアの安寧と発展とは政府の成功と結びついているのであり，そのためにはあらゆる犠牲もいとわぬ覚悟が出来ているのであります。願わくは陛下，われらが祖国のいと美しく光栄ある未来への確信を，すべてのロシア人の胸にあって陛下への期待を支えているこの確信を，ひきつづき抱かれんことを。

至仁なる国父陛下！

陛下の忠実なる僕

イワン・ツルゲーネフ」[1]

ここに見られるアレクサーンドル二世への期待は，調子こそはるかにへりくだっているが，先に見た『鐘』の呼びかけと本質的に同一である。この時期にはまだツルゲーネフも，ゲルツェンも，ともに新帝へ改革事業遂行ののぞみをかけ，それを阻止せんとする政府部内の高官や反動的貴族層に警戒と怒りを抱いていたということができる。皇帝はあくまで農奴を解放せんとしているが，皇帝をとりまく反動達がその足をひっぱっているからには，何よりも彼らのなしている事実を陛下に告げ，彼らを改革の事業から追放しなければならないというのが二人に共通の考えであった。そしてその場合ツルゲーネフにあっては，世論を形成している教養ある階級と政府との連携が一番重要であって，もしこの連携が失敗するならば改革の事業も必ずや挫折するに違いないとの確信が胸中にあった。日頃の言動から見て，きわめて慎重で国内の事情にも通じていた彼が，この時期に皇帝へあてて直接手紙を書いた事実は，まさに以上の如き確信にもとづくものと考えてよいであろう。しかし彼やゲルツェンよりも一世代若いよりラジカルな傾向の若者たちにしてみれば，このような期待は甚だ甘い，現実の何たるかを知らぬ貴族の夢と思われたのである。彼らのツルゲーネフやゲルツェンに対する——さらにひろくは40年代の貴族インテリゲンツィア全体に向けられた——手きびしい批判は，早くもこの頃からジャーナリズムの世界に登場するようになる。

1858年10月1日付の『鐘』の第25号には，「いまだにアレクサーンドルを信ずることは空しいことである」[2] というペテルブルグからの「編集者への手紙」が掲載された。

「アレクサーンドルがどれほど迷いこんでしまったか見てみよ！　彼は自らの忠実なる臣下にどれほどの圧迫を加えんとしていることか！　もしも人民が完全な自由ではなく，

1) Там же, стр. 397-398.
2) Колокол, выпуск I, стр. 201.

半分の自由を与えられるとき，これに対して反抗しないだろうか。」[1] と手紙の筆者ははげしい意見を述べている。

これに対してチチェーリンは12月1日付の『鐘』の第29号に反論を寄せ「ロシアの思考する人の大部分」[2] の名において『鐘』がロシアにおいて「力」でもあり「権威」[3] でもあるこの時に，「自分ののぞみを実現するために棒と斧を取ることを呼びかける」のは，あたかも「しずかにじっと療養していなければならない病人が，激しい発作にかられて自分の傷を突っついて膿ませる」[4] にも等しい愚かなことであると警告した。彼に言わせれば，農奴解放の事業は未だ緒についたにすぎず，政府が結論に達する前に，「決定的なことを言うことはできない。」何世紀にもわたって続いてきた制度や諸関係が，わずかに二・三ヶ月で一挙に変ると考えるのは誤りであり，「時が必要」であり「忍耐が必要」なのである[5]。もし『鐘』が「穏健で，慎重で，理性的な論議」をするなら「政府の信頼」も得られるのに，これでは政府を「恐れさせるだけ」である。そしてこれを喜んで「これこそ自由主義的傾向の末路なのだ」と手を叩くのはひとり反動だけであるとしてチチェーリンはくりかえし「忍耐」と「慎重」とを『鐘』に要求する。

なぜなら政治活動として必要なことは「単に目的だけではなく手段をも考慮に入れる」[6] ことだからである。「どのような手段によって目的に到達するのか——愚かなる流血の道でか，平和で市民的なやり方でか」ということを『鐘』は「第二義的」にしか考えていない。しかもロシアの若者は「いまだ内的な嵐を堪え忍ぶ習慣がない」のでロシアにおいては「ほかのどこよりも政治的プロパガンダは有害」[7] なのである。しかしロシア「社会は自由の権利を理性的な自制によって買いとらねばならぬ。」

このようにしてチチェーリンはゲルツェンに対してふたたび「アレクサーンドル二世に対し協力するよう呼びかける」[8] ことを求めたのである。これが『鐘』の誌上その後数回にわたって行われた例の「起訴状」論争のきっかけとなったのは前に触れた通りである[9]。かくしてゲルツェンはひとりロシア国内の反動のみならず，チチェーリンに代表される西欧的市民秩序の確立をめざして政府との協力において平和裡に上からの改革を押し進めんとする自由主義陣営からも批判の対象とされるようになるのである。

*

*　　*

ところでツルゲーネフは先のアレクサーンドル二世への手紙を書いた一年前の1858年

1) Там же, стр. 202.
2) Там же, стр. 236.
3) Там же, стр. 237.
4) Там же, стр. 238.（但しこの頁付は誤って138になっている。）
5) Там же.
6) Там же, стр. 237.
7) Там же, стр. 238.
8) Там же, стр. 239.
9) チチェーリンの見解を支持する見解は『鐘』の第32—33号（1859年1月1日）に，これを反駁するゲルツェンの意見に共感を寄せる読者の手紙は第32—33号，第39号（1859年4月1日），第40—41号（1859年4月15日）に掲載された。これを見ると，ロシアの世論もまた二分されていたことがわかる。См. Базилева, Указ. соч., стр. 124

1月にチェルヌイシェフスキーの編集する『同時代人』誌上に作品《アーシャ》を発表したが，これは同年4月『アテナイ』誌上チェルヌイシェフスキーによって《ランデブーにおけるロシア人》と題する一文において痛烈に批判されるところとなった。チェルヌイシェフスキーに言わせればこの「純粋に詩的で観念的な」作品における曖昧で弱い性格の主人公がなした「俗悪さはわれわれの社会のいわゆる上品な人びととか最上の人びとのきわめて多くがなすかも知れないものであって，これは多分われわれの社会に深く根ざした流行病の徴候にほかならない。」[1] 彼の目から見れば，このような人間は，「何ひとつ偉大なもの，生き生きとしたものを理解することに慣れていない。なぜなら彼の生活があまりにも卑小で魂の抜けたものであり，彼が慣れ親しんできたあらゆる関係や仕事がこれまた卑小で魂の抜けたものだった」からである[2]。このような主人公が「あたかもわれわれの社会の何か貢献者とか，われわれの文明の代表者，われわれの最上の人」であるかのように考えることは，まさに「くだらぬ夢想」でしかない[3]。ロシア社会のさし迫った情況の中で考えるならば，かかる主人公を描くよりも，もっとなすべきことがほかにあろう。もっと現実の要求に直接にこたえるような仕事をなすべきではないか。しかし実状はどうだろうか。この点で「われわれののぞみとは反対に，現状を理解し健全なる思想に沿って行動してもらいたいと思っている人びとの明敏さと精力に対するわれわれの期待は日毎よわくなっていっている。少なくともこれらの人びとが分別ある忠告は聞いたことがないとか，自分たちの状態について説明をうけたことはないということだけは，言わせないようにすべきだ。」[4] という言葉の中に彼の苛立ちが見てとれる。

この《アーシャ》につづいて前述の《貴族の巣》が1859年1月『同時代人』に発表されるや，今度はチェルヌイシェフスキーのみならずドブロリューボフもはげしい批判を展開することになる[5]。これら60年代のラジカルな若者たちとツルゲーネフとの関係については，単に美学理論やイデオロギー的相異にとどまらず，人間の生き方，価値観をも含めたいろいろな問題が，当時の社会の現実との関係であらためて論ぜられるべきであろう[6]。さらにまた彼らとゲルツェンとの関係についても，「はじめに」述べた如く，それ自体独立したテーマで扱われるべきであるが，さし当ってここでは，1859年6月末のチェルヌイシェフスキーのロンドン訪問について，ツルゲーネフが少なからぬ関心を抱いていたということだけは指摘しておかねばならない。周知のようにこの時のチェルヌイシェフスキーの目的は，『鐘』の第44号（1859年6月1日）にゲルツェンが《very dangerous!!!》と題する一文を発表して『同時代人』誌の傾向，とくにドブロリューボフの論文《オブロー

1) Н. Г. Чернышевский, Полное собрание сочинений , т. V, М. 1950, стр. 166.
2) Там же, стр. 167.
3) Там же, стр. 171–172.
4) Там же, стр. 172.
5) H. Granjard, *Turguénev et Cernyševskij dans les années* 60's. *Notes prises au cours de littérature russse, revues et corrigées par M. le professeur Granjard, éditées par le groupe des étudiants en russe*, Paris, 1958, pp. 17 et suiv.
6) 1970年7月の「スラブ研究施設」の研究報告会において，この問題をめぐって出かず子氏が報告されひきつづいて討論が行なわれた。この点についての出氏の論文が期待される。因みにこのことについてのヴェントーリーの記述も十分ではないように思われる。Cf. F. Venturi, *Roots of Revolution*, N.Y., 1960, p. 157.

モフ主義とは何か» を批判したことに関して，ゲルツェンの誤解をとき正確な情報を提供することによって両者の一致点を見出さんとすることにあった[1]。このチェルヌイシェフスキーのロンドン訪問について，ツルゲーネフは9月16日付の手紙でつぎのように問いただしている。

「明日ぼくはロシアに帰る……君に手紙を書いたのは，じつはチェルヌイシェフスキーが君を訪れたということが本当なのかどうか，彼の訪問の目的が何であったのか，また彼が君の気に入ったかどうかききたかったからだ。」[2]

しかしゲルツェンはこのことについてツルゲーネフに何も返事しなかった。ロシアに帰る彼の代りに，パリにいる二人のロシア人にあてて事の詳細を書き送るようにというツルゲーネフの依頼もかなえられなかった。ゲルツェンにしてみれば，きわめて政治的な微妙な問題を単に好奇心を持った第三者に書き送ることがためらわれたのであろう[3]。いずれにせよこの手紙の冒頭で言っているように，この夏を例年通り国外ですごしたツルゲーネフは，6月のはじめ一週間ほどロンドンに滞在して「毎日のように」[4] ゲルツェンに会ったあと，パリで二ケ月を送って9月末にはまたロシアに帰った[5]。

前の年に自分の持ち村でオブロークへの「切りかえ」を行った彼は，この年も9月末から12月はじめまでをスパースコエですごし，前年にひきつづいてバールシチナをオブロークへ変更する仕事をしている。

しかしここで注意しなければならないのは，彼の定めた小作料が決して農民にとってありがたいほどの少額ではなかったという事実である。ツルゲーネフの定めた「一デシャチーナ当り銀三ルーブリ」[6] という額は，この手紙を受け取ったアーンネンコフが減額をすすめているように，標準よりも2倍近くも高いものだったのである[7]。

ところで当時のツルゲーネフの農民観は，スラヴ主義者イヴァン・アクサーコフにあてたつぎの手紙の中にもっともよく見てとれる。この年11月3日付の手紙の中で彼はつぎのように書いている。

「……農民とはほとんど至る所で順調にお互いの境界をはっきりさせました。（もち論

1) チェルヌイシェフスキーのロンドン訪問に関しては，コジミーンとネーチキナとの間に有名な論争がある。Б. П. Козьмин, Поездка Н. Г. Чернышевского в Лондон в 1859 г. и его переговоры с А. И. Герценом. «Известья А. Н. СССР, Отделение литературы и языка» 1953, вып. 2. ネーチキナの反論は Там же, 1954, вып. 1. さらにこれに対するコジミーンの回答は Там же, 1955, вып. 2. 最近の研究については Т. И. Усакина, "Статья Герцена «Very dangerous !!!» и полемика вокруг обличительной литературы в журналистике 1857-1859 гг." Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг. М. 1960, стр. 246-270 所収参照。
2) Тургенев, Письма, III, 340.
3) См. Там же, стр. 620-621.
4) Там же, стр. 303（1859年6月21日付マルコーヴィッチへの手紙）。
5) Там же, стр. 655.
6) Там же, стр. 359（1859年11月4日付アーンネンコフへの手紙）。
7) Там же, стр. 627.

昔の土地の分は残したままです。）彼らを移住させました（賛成をえた上で）。そしてこの冬から彼らはすべて一デシャチーナにつき銀三ルーブリのオブロークになります。私はあえて申しますが，彼らには新しい秩序が大いに不満なのです。しかし古い秩序[1]に立ち返えることができないということは彼らにもわかっています。農民は《領主》と別れる前に，わが国でいうところのコサックになってしまって，手当り次第領主の所から引き抜いて行きます——穀物も木材も家畜などもです。私にはこのことが完全に理解できますが，最初私たちの所でも材木が消えてしまいました。それをいまでは誰でもが気違いのように売っている仕末です……われわれの所にはしらふの者はいません。ひどい酔っぱらいの住みかになってしまいました。上からの指示が与えられぬ限り，一デシャチーナとか農奴一人あたりとかいうのではなく，土地の小作料の上に坐りこんでいる農民はこのようになりましょう。ミールについて，オープシチナについて，ミールの責任制についてはこの附近では誰一人耳を傾けたがりません。私はこれが行政的，財政的手段の形で農民の上に課せられるべきだとほとんど確信していますが，彼らは勿論賛成しないでしょう。ということは，彼らは法律的見地からもしこういうことができるなら自主裁判制[2]（самосудство）としてのみミールを評価しているからで，決してそれ以外ではないからです。」[3]

ここには，自分が親しく経験した事実がそのまま語られている。ツルゲーネフにしてみれば，二年の領地での改革の経験から，農民がそれを利己的に利用していること，単に賦役から小作制度への「切りかえ」ひとつ取ってみても，農民自身の側に大きな問題があり，ミールの問題もスラヴ主義やゲルツェンが理想化したり，また政府が行政的に利用しようと思っているのはかけ離れた実状があることを指摘したかったのであろう。おそらく彼の本音は，ロシアの農民については《猟人日記》の作者であり，実際に現実面で農民と接触して多少なりとも改革をやった自分が誰よりもよく知っているということにあったのであろう。そしてこのような気持は，遠くロシアを離れて現実の動きから十年余も遠去かっていたゲルツェンに対して，後年の論争に際してより明瞭な形で示されるのである。

*

*　　*

翌1860年の春，ツルゲーネフはまたも国外に出てまる一年をロシアから離れてすごした。8月のはじめにはロンドンに4日ほど滞在したあと，9月までの約20日間をワイト島のヴェントナー（Ventnor）で送ったが，この有名な避暑地にはロシア人も少なくなかった[4]。ここでツルゲーネフは小説《父と子》の構想にとりかかったが[5]，同時にロシアに初等教育を普及させるための協会の創設の計画もしている[6]。彼はこの案を友人たるアーン

1) 強調はいずれも原文。
2) 強調はいずれも原文。
3) Там же, стр. 357-358.
4) Тургенев, Письма, IV, 116（1860年8月18日付ラムベルト夫人あての手紙）。
5) Там же.
6) Там же, стр. 120（1860年8月31日付アーンネンコフへの手紙。）См. Там же, стр. 496-497

ネンコフをはじめ，クルーゼやH. Я. ロストーフツェフ[1]らの協力を得て作製し[2]，ペテルブルグやモスクワの知識人に検討してもらうことを計画したが[3]，その内容はつぎの如きものであった。

今日ロシアにおける読み書き，初等教育の必要はすべての人が痛感しているところであって，政府もまた軍隊における読み書きの普及を配慮し，個人でも日曜学校や都市・農村に学校を設立したり，人民のために安価な本を出版するなどしている。これらの努力は貴い，共感を呼ぶものではあるが，それぞれがばらばらで且つまた十分保証もされていない。今やこれらの個々の努力を一つにまとめる時が来ているように思われる。この目的から，《読み書きと初等教育普及のための協会》の設立をここに提案する[4]。

この目的を実現するためには，わが国のあらゆる階層の協力と政府の庇護が強く期待される。政府が解放する人々を教育することは，政府を助けその事業を継続することであって，われわれは彼らをもう一つの奴隷制——即ち無教育から解放せんとするものである。われわれは国民の教育をめざすものではない。それはこの協会の手に余るものであって，協会のなさんとするところは，もっぱら基礎的な初等教育——読み書きと，神の掟，初等算数とごく初歩の歴史・地理の普及に限られる。このために協会はその目的として次の五項目を行う。

a) 学校の設立
b) 学校を設立せんとする者への補助
c) 廉価な教科書，指導要綱の出版
d) 協会の機関紙として《月報》の出版
e) 読書室の設立[5]

ここで学ぶ者は初等教育に限るが故に，協会の出版物は

a) 部数が多く，廉価で，誰でも，どこでも入手出来なければならない。
b) 内容はそれにふさわしいものたるべきで，「人民に対してはまじめに，誠実に，完全な尊敬をもって接しなければならぬ。」
c) 教科の内容はアルファベット，習字，法律，義務についての初歩的記述，算数，地理，自然科学，技術，農学，畜産，広い意味での経営[6]。

疑いもなく政府はわれわれの目的に共感を示すであろう。農民解放に関する内務大臣の貴族への訓示にも，私立学校の創設の必要性が卒直に述べられているではないか。

必要な資金は会員の毎年の払込金と寄附をもってあてる。（会費は年銀三ルーブリを考えている。）会員は農民をも含めあらゆる身分のものを勧誘する。また望むならば農村共同体も会員たりうる。もしあらゆる階級の女性が会員たることに同意するなら，協会にと

1) これは解放令編纂委員会の長たるヤーコブ・ロストーフツエフの息子でこの時ワイト島にいた。См. Там же, стр. 116.
2) 前半はツルゲーネフが書き，後半はアーンネンコフが書いた。См. Тургенев, Сочинения, XV, 425.
3) Тургенев, Письма, IV, 121, 497.
4) Тургенев, Сочинения, XV, 245.
5) Там же, стр. 246-247.
6) Там же, стр. 248.

ってとくに喜ばしいことである。

さし当って80人ほどの会員が集まれば協会の開設は可能であろう。会員の中から中央委員会のメンバーを総会の同意を得て決める。中央委員会はペテルブルグに置かれる。総会は年に一度，協会創立日に開かれる。

以上の案についてご意見をお持ちの方は，パリのツルゲーネフかペテルブルグのアーンネンコフにお寄せ下さると有難い[1]。

ツルゲーネフの草稿には，この案を送る人のリストが書かれてあったが，その中にはカヴェーリン，チェルヌイシェフスキー，コヴァレーフスキー，ガラーホフ，クラエーフスキー（以上ペテルブルグ），アクサーコフ，カトコーフ，バブスト，ケッチェル，ホミヤコーフ（以上モスクワ）らの名が見られる[2]。そして事実彼はこれを以上の人々のほか，ゲルツェンとオガリョーフにも送っている[3]。

チェルヌイシェフスキーはこの計画に慎重な態度をとったが[4]，ドブロリューボフの方は『呼子』の1860年6月号で皮肉な扱いをしている。彼はこの案をリベラリズムの中途半端な性格のものと受け取ったのであった[5]。他方ゲルツェンの方は，ツルゲーネフからぜひ意見を聞かせてほしいと頼まれているのに[6]，何も言っていない。おそらく作家の一時の気まぐれとして重視しなかったのであろう。その証拠に彼は二年後につぎのように皮肉な調子でツルゲーネフに書いているのである。

「ぼくは君をかつて一度も政治的人間と考えなかったし，今も考えていない。たとえ君がワイト島でロビンソン・クルーソー[7]と共にアルファベットについて語ったにしてもだ。」[8]

おそらくゲルツェンの言う通りであろう。しかしこの時期のツルゲーネフは，一人のロシア人として，一人の市民として多分生涯のいかなる時期よりも社会への貢献をまじめに考えていたに違いない。このことは今みた計画からも，また以下に見るアレクサーンドル二世への手紙からもはっきり言うことができる。しかし80人ばかりの会員を集めて，年額三ルーブリばかりの会費で学校を建てたり，教科書を発行したりできると考えていたとすれば，まさに「ドン・キホーテ」的と言わねばならぬ。事実はツルゲーネフもこの計画を一部の友人に配布はしたものの，実際に印刷することはなかったし，計画だけに終って実現はされなかった。以下に見る皇帝への手紙も下書きだけ書いてやめている。やはり彼の中の「ハムレット」が計画の実行を思いとどまらせたのであろう。さらに付け加えるなら

1) Там же, стр. 249-252.
2) Там же, стр. 425.
3) Там же, стр. 426.
4) Чернышевский, Указ. соч., т. XIV, стр, 409.（1860年9月24日ドブロリューボフあての手紙）。
5) См. Тургенев, Сочинения, XV, 426.
6) Тургенев, Письма, IV, 128（1860年9月18日付の手紙）。
7) 前に出てきたクルーゼの名をもじっている。
8) Герцен, XXVII, 261（1862年11月1日付の手紙。）

ば，「その前夜」のロシア社会の現実は，このような計画を真剣に問題にするほど悠長なものではなかったとも言うことができよう。

ワイト島を9月1日に発ったツルゲーネフは9月2日から5日までロンドンに滞在した。しかしこの時にはゲルツェンにもオガリョーフにも会わずにパリに帰ってしまっている[1]。

その後彼は翌1861年の5月はじめまで，パリと近郊のクールタヴネルですごしたが，この期間に書いたアレクサーンドル二世への請願文の草稿がフランスのスラヴ学の泰斗アンドレ・マゾンによって発見され，パリの国立図書館に保存されていたのが，最近の全集にはじめて公刊されたので，これを検討することにする。この草案は訂正や書込みの多いほんの下書きであって[2]，皇帝に送られることはついになかったが[3]，この時期のツルゲーネフの考えが何よりもよく出ているのと，後に見るようにゲルツェンとも少なからぬ関係があるので翻訳の形で紹介する。

「至仁なる国父陛下！

われわれの真摯なる確信を陛下の御前に提出するに当り，あるいは陛下が御不審を抱かれるのではないかとの危惧を禁じえません。現下の混沌たる時代にあっては，この上なく正しい言葉も力を失い，最も清廉なる意図も疑惑を招いております。しかしわれわれは陛下が私どもの言葉を聞き入れられ，われわれの意図を知り給わんことを望むものであります。

われわれは陛下を信頼し，政府の更迭を考えぬのみか，権力に懇願せんとする人びとに属します。

この権力が農民を解放しましたことをわれわれは忘れませんでしたし，全ロシアもわれわれと共に忘れることはないでありましょう！。

陛下，われわれは陛下を信ずるものであります。しかしわれわれはわが祖国の理性的な自由と，われわれの正しき良き発達をも望んでおります。われわれは誠実且つ卒直に玉座に近づき，われわれのツアーリが世論に耳を傾けられ，その人民の希望に注意を払われんことを願うものであります。

これらの希望の正当性を証明することは致しません。またすでに政府によってその幾つかが認められた，かくも多くの改良について言及することもいたしますまい。目下祖国にとって，あたかも呼吸のために空気が必要なるごとく，さし迫って必要なることを陛下の前に申し上げます。これこそわれわれの祖国に対する愛と陛下への信服が命ずるところであります。

われわれは懇願いたします。

1) 体刑の完全な廃止

2) 裁判の公開

3) 政府の収支の毎年の報告とその検査への参加

4) 県会（губернские собрания）の活動範囲の拡大

1) Тургенев, Письма, IV, 128（1860年9月18日付ゲルツェンあての手紙）。

2) Там же, 393頁の写真参照。

3) Там же, стр. 651

兵卒の勤務年限の短縮

5) 分離派の他の臣下との平等化[1]

陛下！ あるいはかかる言葉は犯罪でもあり愚かでもあると陛下に申すものがあるかも知れません。われわれの懇願を要求と呼び，かかる要求をなすことは国を暴力的な変革の道へ導くものであるとさらに付け加えるものがあるかも知れません。しかしかくの如く申すものをお信じにならぬよう，われわれは陛下に懇願いたします。われわれは反対に，臣民の正当なる希望をかなえられることによって，陛下が永久にあらゆる破局の可能性を除去され，御身のまわりに社会のあらゆる最良の生き生きとした力をお集めになり，すべての軽卒にして性急なる熱中を根本から断ち切られることになるのだとあえて考えております。陛下，陛下はかつて貴族のあつまりにおいていみじくもこう申されました。《余に諸君のために立つ可能性を与えよ》と[2]。われわれにも，陛下のすべての臣民にも，われわれの指導者としての陛下のために一致して確固として立つ可能性をお与え下さい。どうかロシアの幸せと陛下の権力や皇室の御繁栄とを切り離すような考えはお許しになりませぬように。陛下，自分が十分に権利のある市民とも感ずることなく，非偽善的な臣下ともなりえない者をお信じになって下さい。ご自身の胸に聞いてみて下さい。それはわれわれの希望がいかに穏健で清廉なるものであるか，さらに今の各瞬間がいかに大切なものであるか，陛下が今もってその上に立たれうる，このかつてない政府と人民の団結がいかに偉大なものであるかを告げることでありましょう。ロシアは陛下に対し，いまだかつていかなるツァーリに対しても呼びかけなかったような呼びかけをしているのです。陛下はすでに多くのことをロシアになされました。陛下ご自身がお始めになられた道に沿ってさらに前進して下さい。われわれは皆陛下のあとにつづいて進むことでありましょう。」[3]

ここに見られるツルゲーネフの意図はきわめてはっきりしている。農奴解放を目前にひかえてロシアの世論が右と左に大きく分裂し，政府の施策がともすれば左への警戒心と，右からの圧迫によって挫折してしまうのではないかとの焦躁感のあったことは否定すべくもない。もしも改革の事業が失敗に終ったら，ロシアは「破局」の危機にさらされるであろう。いまこそ皇帝はその側近の反動的意図を断固として斥け，リベラルな進歩的知識人の意見を採用されて当初の意図に邁進されるよう伏して「懇願」するというのである。

ところでツルゲーネフはこの皇帝への請願を，1860年秋にゲルツェンからの紹介状を持ってパリにやって来たジャーナリストのアルトゥール・ベンニ[4]に示し，ベンニは1861年初夏にこれをロシアへ持って行った[5]。

このツルゲーネフの皇帝への請願文は，その後20年たってラーヴロフによって誤って

1) このあと6) a. 出版を一般法の下におくこと。б. 法に則ること。в. 検閲の廃止というのがあって，消されている。

2) これは有名な1856年3月30日のモスクワの貴族への演説をさす。

3) Тургенев, Письма, IV, 393-395.

4) ベンニは1857年にポーランドからロンドンに来て，英国国籍を得た。(Герцен, XXVII, 674)。ジャーナリストとしては《Русский Инвалид》や《Северная Пчела》に参加し，またゲルツェンの文書をロシア国内に配布した。(Тургенев, Письма, IV, 665)。

5) Тургенев, Письма, IV, 650.

ツルゲーネフの「憲法草案」として紹介されたものであるが[1]，ベンニ自身はツルゲーネフの名を出さずにこれをロシア各層の名士に見せて賛成の署名を得んとしたが成功しなかった[2]。それのみか当局の嫌疑すらも招いてしまった[3]。この年の8月（露歴）スパースコエにツルゲーネフをたずねたベンニは，彼の賛成を得た上でツルゲーネフの名は出さずにこの請願文の内容をロンドンのゲルツェンに手紙で知らせたが，これは二ケ月もかかって11月にようやく届いている[4]。このように遅れた理由はツルゲーネフ自身がこれをロシアからパリに持ち帰った上でゲルツェンに送ったためである[5]。したがってゲルツェンはこれがツルゲーネフの手になるものとは知らずにつぎのようにベンニに書き送っている。

「君の手紙はごらんの如く二ケ月もおくれてようやく昨日届きました。……君の提案される請願は今日の反動の時期には君をも多くの人をも破滅させることになるかも知れません。君が書いている請願は穏健なものですし，（重要な問題——農民の土地の買戻し——については触れていませんが）多分悪くないものでしょう。しかし首尾よく何事かをやりとげるということはとてもできますまい。君自身手紙の中で弱点について触れています。このような企画は土着の人間だけがうまくやりとげることができるので，君はあまりにもロシアの環境を知らなすぎます。もし君の請願の思想が社会の要求にかなっているものであるなら，うまくゆくでしょう。君は多分何もしないでいいのです。しっかりした思想を持つだけでは不十分です。いつでも用意された手段をはっきり知っていなければなりません。君は『鐘』の配布の成功と請願の困難について語っています。君がロシア人の間に真の市民権を獲得し，ロシアの生活のあらゆる（……[6]）を本当に知るまでは，君にとって何が出来，何が出来ないかはあきらかです。請願について言えば，君はこれがわれわれの意思と一致しているように感じさせようとしています。多分君は『鐘』をほとんど読んでいない人たちと話したのでしょう。きっと彼らはわれわれが賛成することはできないと卒直に言ったかも知れません。したがって，われわれはこのような請願に対してはドルゴルーコフの請願を邪魔しないのと同じように邪魔しない[7]ことができるだけです……」[8]

ゲルツェンの目から見たらこの英国国籍の一人の外国人の書いた請願文は，とりたてて邪魔しないというだけの毒にも薬にもならないものと思われたのである[9]。ロシアの現状を知らないところから来る甘い期待というこのゲルツェンの批判を，もしツルゲーネフが

1) «Вестник Народной Воли» 1884年の中の "И. С. Тургенев и развитие русского общества".
2) Тургенев Письма, IV, 649-650.
3) Герцен, XXVII, 647.
4) Там же, стр. 194（1861年11月19日付ベンニあての手紙）。
5) Тургенев, Письма, IV, 290（1861年9月25日ゲルツェンあての手紙）。
6) この箇所は原文で欠落している。
7) 強調—原文。
8) Герцен' XXVII, 194（1861年11月19日付の手紙）。
9) これに加えて，ゲルツェンはベンニがロシア政府の第三部と関係があるのではないかとの疑念も抱いていた。Тургенев, Письма, IV, 650.

読んだら苦笑したかもしれない。さきにゲルツェンに対して，ロシアから長く離れていることによってロシアの実状にうとくなったと批判したツルゲーネフ自身が，今度はまったく反対に同じ批判にさらされているのである。しかしこれは現実を知る，知らないというよりも，農奴解放令前夜の現状をどう認識しているかの相異にもとづくものであろう。1860年の末から1861年の初めにかけて，ロシア国内のさまざまなグループがアレクサーンドル二世に請願を行ったと言われるが[1]，ゲルツェンはもはやこのようなものにはまったく魅力を感じられなくなっていたのである。

ツルゲーネフがパリでこの請願を書いた頃から，近く解放令が発布されるらしいとの噂が耳に入るようになってきた。1860年も暮れのことであった。

IV 『終 り と 始 め』

ツルゲーネフがゲルツェンに対してロシアにおける農奴解放令がいよいよ発布されるに至ったことを告げたのは1861年2月下旬のことであった。

「君にまたもっとも確実な形で[2]知らせる。——解放に関する勅令が近く出される。ほかのいかなる噂も信じないように。勅令の主な反対者は誰だと——君は思う？（ガガーリンは言うまでもない，勿論だが）ムラヴィヨーフとクニャジェーヴィッチそれに…… A. M. ゴルチャコーフ公だ!! 伯父の手紙によると吹雪をともなったひどい寒さが大きな被害を与えたそうだ。すべての報道が断たれて，家畜も死んだ等々……」[3]

しかしゲルツェンの方も内務省の部長である B. П. ペルツォーフの兄弟である文学者の Э. П. ペルツォーフからすでにより詳細な情報を入手しており[4]，2月24日付の長男アレクサーンドルへの手紙では，解放令の公布が3月4日という日取りまでつたえている[5]。

周知のように農奴解放令は，この年の3月3日（露暦2月19日)に皇帝アレクサーンドル二世の署名をえて，半月後の3月18日に公布された。ツルゲーネフはゴロヴニーンなどから前もってこのことを知らされており，3月13日の手紙でゲルツェンにその事実を知らせたが[6]，さらに3月26日にはゲルツェンにつぎのように書き送っている。

「親愛なるアレクサーンドル・イワーノヴィッチ。

1) Там же, стр. 651.
2) 強調—原文。
3) Тургенев, Письма, IV, 197（1861年2月22～24日（？）付の手紙。）なおこれは Письма К-Дм. Кавелина и Ив. С. Тургенева к Ал. Ив. Герцену では2月13日（？）となっている。стр. 136.
5) Герцен, XXVII, 638.
5) Там же, стр. 137.
6) Тургенев, Письма, IV, 205.

偉大なる日の翌日，ということは3月6日に書いたアーンネンコフの手紙の写しを君に送る。ごらんのように面白いものだ。いままでのところ電報は（印刷されたものも個人のものも）全ロシアが完全な沈黙をもって布告を受け取っていると一様に語っている。布告自身はあきらかにフランス語で書かれ，誰かドイツ人によって不細工なロシア語に翻訳されたものだ[1]。《恩恵的に調整する》とか《良き家父長的諸条件》とかいう類の句があるが，ロシアの百姓は誰一人わかるまい。しかし事柄自体は理解することだろう。そして問題は可能な限り，かなり良く行なわれた。

ここにいるわれわれは一昨日教会に祈禱に行った。司祭[2]が短いが，感動的な説教をされ，ぼくはそれに落涙した。ニコライ・イワヌィッチ・ツルゲーネフ[3]はあやうく声をあげて泣くところだった。そこには（デカブリストの）老ヴォルコーンスキー公もいた。たくさんの人が，しかしその前に教会から出て行った。」[4]

ゲルツェンはこの手紙を受け取って，オガリョーフと連名でニコライ・ツルゲーネフに「祝賀」を述べるとともに，ヴォルコーンスキー公にもよろしく伝えてもらうよう頼んだ[5]。またイワン・ツルゲーネフに対しても解放令の全文があったら送ってくれるよう依頼し，同時に，ロンドンで「大祝宴」を開催し，そこに「すべてのロシア人を招待する」旨を告げた。[6]

『鐘』の4月1日付第95号は大見出しで解放令の発布をのせ「アレクサーンドル二世は多くのことを，実に多くのことをされた。いまや彼の名は彼以前のすべての皇帝よりも高く立っている……解放[7]の言葉が述べられた！皇帝は認められた。これは偉大な事だ。しかしすべてではない。言葉は事実とならねばならぬ。解放が真のものにならねばならぬ。」[8]として「第一歩」につづく「第二歩」を呼びかけた。そしてこの号の末尾には先のツルゲーネフへの手紙で予告された祝宴の案内がつぎのように掲載された。

「ロンドンの自由ロシア出版所と『鐘』の発行者は，4月10日迄ウェストホーン・テラスのオルセット・ハウスにて農民解放の開始を祝います。すべてのロシア人は[9]，いかなる党派であれこの偉大な事業に共感する者は，兄弟として迎えられるでありましょう。」[10]

1) 実はモスクワの府主教フィラレートに起草が委ねられ，司法大臣パーニンが校訂した。См. Там же, стр. 550.
2) パリのロシア大使館附属教会司祭ワシーリエフ。
3) ニコライ・ツルゲーネフは従来はこの農奴解放を手離しで歓迎したように記されてきたが，必ずしもそうではなく，また彼とイワン・ツルゲーネフとの間にこの頃頻繁な意見の交換のあったことが，最近の研究で指摘されている。См. Т. Голованова, "Н. И. Тургенев о крестьянской реформе." «Русская Литература», 1961, No. 4, стр. 134-142.
4) Тургенев, Письма, IV, 211.（かっこの中は原文）
5) Герцен, XXVII, 143（1861年3月28日付の手紙）。
6) Там же.（同日付）。
7) 強調—原文。
8) Колокол, выпуск, IV, стр. 797.
9) 強調—原文。
10) Там же, стр. 804.

しかしこの「祝宴は暗いもの」[1] になってしまった。「ワルシャワで流された新しい血が「乾杯を不可能にさせてしまった」[2] からである。

この年2月25日，ワルシャワにおいて1831年のグロホフの会戦を記念するデモが行われたが，その折群衆の中に騎馬憲兵が突入して多くの負傷者と逮捕者を出した。この事件に抗議して27日にはさらに大規模なデモが行われ，前回よりももっとひどい弾圧に会い，軍隊の発砲によって五人が殺され，多くの者が傷を負った。3月2日にはこの五人の死を追悼する民衆のデモがまたしても行われ，これにはワルシャワの住民の半数近くが参加したといわれる。しかしこの時デモは総督ゴルチャコーフの考えで，軍隊を出動させなかったため整然と行われて，犠牲を出さずにすんだ。しかしアレクサーンドル二世はこの処置に不満で3月5日にはゴルチャコーフあてに「必要とあれば内城から砲撃する」よう命令している[3]。四月のはじめになるとポーランド各地に賦役その他に反対する農民運動が起こり，954の村と16万3千の農民がこれに加ったという。[4]

ゲルツェンの許にこの事件が伝ったのは，まさに農奴解放令を祝う宴の数分前であった[5]。翌日彼は『1861年4月10日とワルシャワの殺害』と題する一文を書き，その中で「ああ，アレクサーンドル・ニコラーエヴィッチ，あなたはまたなんでわれわれから祝宴を取り上げたのか？なぜあなたはそれを台なしにしたのか？」と訴え，「ポーランドの無条件，完全な独立」と「ロシアとポーランドの兄弟の団結」を呼びかけたのであった[6]。

このポーランド問題をきっかけに，ロシアの世論は次第にナショナリスティックな色彩を強め，二年後の1863年の蜂起において『鐘』の孤立化は決定的になるが，その最初のきざしが早くもここに現われたのである。

ゲルツェンとツルゲーネフとの関係について言うならば，この時の祝宴のみじめな結果を知らせた以下の4月15日付の手紙に見られるように，オガリョーフに対するツルゲーネフの冷たい態度が加って，ゲルツェンの手紙にはじめてきびしい調子があらわれるようになる。

「ぼくが君に書かなかったのは，ロシアの祝宴については何ひとつよいことが言えないからだ。天気といい，客の数といい，全然未知のロシア人の人数といい（最初はきっと50人もいただろう），まったく予期せぬほど素晴らしかったのに，なにもかもがワルシャワの流血によって台無しになってしまった。すべてが葬式みたいだった……。

1) Герцен, XV, 65.
2) Там же.
3) В. Г. Ревуненков, Польское восстание 1863 г. и европейская дипломатия, Л. 1957, стр. 82–83.
4) И. М. Белявская, А. И. Герцен и польское национально-освободительное движение 60-х годов XIX века, М. 1954, стр. 28. なお二月事件と農民運動の関係については，阪東宏『ポーランド革命史研究』，青木書店，1968年，44頁参照。
5) E. H. Carr, *The Romantic Exiles*, London, 1949, p. 249. 酒井只男訳，『浪漫的亡命者たち』，筑摩書房，1953年，243頁。なおツチコーヴァ＝オガリョーヴァによれば，この報せはワルシャワから殺害の現場写真を受け取ったばかりのトホルジェーフスキーによってもたらされた。Тучкова-Огарева, Указ. соч., стр. 181.
6) Колокол, выпуск IV, 805 (1861年4月15日付第96号)。

ここでぼくはごく内密の[1]問題を提出する。というのは君が話さなければこのことについては誰も知らないし，また今後とも知ることはあるまい。

この前君が訪れたとき，ぼくは君のオガリョーフに対する態度になにか反目があるのに気がついた。ぼくにとってこれは辛いことだったがぼくは黙っていた。君が人との付き合いで，気まぐれで，媚びた点がなくもない示威的ふるまいが好きだということを知っていたからだ。君との手紙のやりとりはぼくが正しかったことを証明した。君に是非にとたのみ，クルーゼについて（けちなつまらない男だ）たずねたものの，オガリョーフの論文に関する問題に対しての君の返事はついにもらえなかった。この論文は疑いもなく学校計画と同じ程注目に値するものだ。ぼくは黙っていたし，今も黙っていられたらと思う。しかし君はそちらへ行ってしまったから，どういうことになっているのか是非ともきかなければならない。まさか君ははらみ女の様に賛成ときめて腹をふくらせているのではないだろう……」[2]

ここでゲルツェンがいっているオガリョーフの論文とは『鐘』の第89号（1861年1月1日）に載った『新年に』と題する署名入りの論文のことで，すでに1月5日付の手紙でゲルツェンはツルゲーネフにこれに対する意見を求めていたのであるが，ツルゲーネフは必ず読んで返事すると言いながら[3]，うちすてて返事を書かなかった。

ツチコーヴァ＝オガリョーヴァの『回想』によれば，すでに1856年9月はじめにツルゲーネフがロンドンを訪問した際ゲルツェンとオガリョーフの前で『ファウスト』を読んだ時に，これに対しオガリョーフが「きわめてきびしい批評をした」ことから両者の関係がまずくなってしまったといわれる。[4] してみれば両者の反目はずいぶん根の深い，いわば最初は個人的なものであったのが，さらにイデオロギー的問題をここに加えて，より面倒な事態になったと言ってよいであろう。

ところでこの『新年に』と題するオガリョーフの論文は，『鐘』の第89号全部を埋めるほどの長文であるが[5]，その中で彼は，従来の主張たる共同体的土地所有，自治，体刑の廃止，裁判の公開といった主張のほかに，全住民の選挙によるオーブラスチの議会，およびここから送られる議員によって構成される国会（государственная союзная дума）の創設など21項目におよぶ要求をかかげて[6]，農奴解放後のロシアの諸改革をかなり詳細に打ち出したものである。したがってゲルツェンにしてみれば従来の『鐘』の主張を集約したこの論文を一人でも多くの知人に読んでもらって，支持を得たかったのであろう。それがオガリョーフの手になるものとはいえ，ツルゲーネフが完全に依頼を裏切ってまったく返事を書かずに無視したことが黙過できなく思えたに違いない。先の手紙のいつになくきびしい調子がこれを示している。

1) 強調—原文。
2) Герцен, XXVII, 145–146.
3) Тургенев, Письма, IV, 177（1861年1月9日付の手紙）。
4) Тучкова-Огарева, Указ. соч., стр. 288. См. Тургенев, Письма, III, 24（1856年11月6日付ボトキンあての手紙）。
5) Колокол, выпуск IV, 745–752.
6) Там же, стр. 750–751.

いずれにせよツルゲーネフとオガリョーフとの間のわだかまりが[1]，これ以後の『鐘』の急進化にともないさらに大きくなり，それがゲルツェンとツルゲーネフとの関係にも後に見るように影響を及ぼすようになるのである。

農奴解放令が発布され，その内容が『鐘』の編集者たるゲルツェンとオガリョーフにも届き，且つまたロシア各地域毎の解放に際しての条件の相違や，これにプロテストする農民運動の様子が次第に判明するにつれて，『鐘』の調子は次第にツァーリ政府に対する批判の色を濃くしていった。1861年の後半は『鐘』の屈折点をなすが[2]，同時にこの頃がもっともこの小冊子の読まれた時期であって，発行部数は2,500部に達した[3]。この部数は『同時代人』誌でさえ，6,000部以下であったこと，ロシア国内のみならずツァーリ政府によって国外でもその販売が禁止されたり妨害されたりしていたことを考えるならば，当時として異例なほどの大部数であったと言ってよい。さらに『鐘』の性格からして，実際の読者は発行部数の三倍はあったろうとも推測されている[4]。

『鐘』が農奴解放の実状に批判を打ち出したのは1861年6月15日の第101号からであるが[5]，この巻頭の論文に『新しい農奴制の検討』と題された，これもオガリョーフの手になるものであった。この中でオガリョーフは「政府は真剣に人民の解放を考えてはおらず，ツァーリは本質的にはいかなる解放も欲してはいない。」[6] として「一般に農奴制は廃止されなかった[7]。人民はツァーリによってだまされたのだ！」[8] と痛烈な批判を行っている。

ゲルツェンもまた同じ号に『1861年4月12日』と題する一文を書き，有名なベズドナの農民反乱[9] と，アプラクシン将軍による「50人の犠牲」，ならびにアントン・ペトローフの処刑を怒りをもって伝え，「進歩と自由思想の政府が……ポーランドの血をなめたあと，下へくだって——血がぬるぬるする！」と攻撃の調子を強め，「自由！自由！」への呼びかけをここに打ち出した[10]。

ひきつづき『鐘』の第102号（1861年7月1日）には『人民には何が必要か？』と題

1) その証拠に1856年から1862年までの7年間にツルゲーネフからオガリョーフにあてた手紙はわずかに一通でその一通も本を借りるよう頼んだ短いものである。Тургенев, Письма, IV, 158（1860年11月20日の手紙）。
2) Базилева, Указ. соч., стр. 169.
3) Там же, стр. 136. Venturi, op. cit., p. 104.
4) Базирева, Там же, стр. 137. なおこの著の中でバジレーヴァは当時駐露大使たりしビスマルクがロシア語のテキストに『鐘』を用いていたという興味ある事実を紹介している。Там же, стр. 156.
5) その前の第98～99号，第100号にロシア各地における農民反乱と，政府による弾圧を通信員の報道として掲載している。
6) Колокол, выпуск IV, стр. 845.
7) 強調—原文。
8) Там же, стр. 848.
9) この事件についてはヴェントゥーリにくわしい。Cf. Venturi, op. cit., pp. 214-218.
10) Колокол, стр. 849.

る巻頭論文（署名なし[1]）が載り，「土地は人民以外の誰にも属さないものである」[2]こと，人民にとって必要なものは「土地と自由と教育」にほかならないと主張した。[3]

「何世紀もの間，人民は事実上，土地を所有し，事実上，土地のために汗と血を流してきた。それが紙の上にインクで書いた[4]命令によってこの土地が地主やツァーリの財産として没収されたのであった。土地と共に人民自身もまた不自由な身とされ，これが法であり神の正義であると彼らに認めさせようとした。しかし誰ひとりこれを認めたものはいなかった。人民を法の命令に従わせるために鞭で打ち，銃で狙撃し，流刑にし，苦役に処した。人民は黙っていたが，それでも認めはしなかった。不法な事実から正しいことが現われることはない。迫害によって人民も国家も共に荒廃しただけであった。

いまや前のようにやってゆけないことはあきらかとなった。事態を改めることが企てられた。四年の間書類が書かれては，また書き改められた。ついに事が決まって人民に自由が宣言された。いたるところに将軍や官吏が送られて布告が読まれ，教会という教会で祈禱が行われた。ツァーリのために，自由のために，自らの未来の幸福のために祈禱がなされたということである。

人民は信じた。喜びそして祈り始めた。しかし将軍や官吏が解放令[5]を読み始めるや，自由は単に言葉の上だけで，事実の上で与えられたものではないことがわかった。新しい法令の中では，以前の法はただ別の紙に，つまり転写されたのであった。バールシチナもオブロークも以前と同様地主にささげられ，もし自分の掘立小屋と土地が欲しいなら自分の金で買戻せというのである……将軍や官吏が自由について語るのを聞いた人民は理解することができなかった——地主や官吏の笞刑のもとにあって土地もない自由とはいったい何であるのか。かくも恥ずべきやり方でだまされる人民は信ずることを欲しなかった。四年もの間自由をえさにその言葉でわれわれをあやつってきたツァーリが，いまや実際には昔と同じバールシチナやオブロークや笞刑や殴打を与える筈はありえないと彼らは言っている。」[6]

一方ロシア国内においても，ベズドナの反乱のあと最初の宣言たる『大ロシア人』の第1号が6月に出され，9月には第2号と時を同じくしてミハーイロフとシェルグノーフの『若き世代へ』の呼びかけも出て[7]，ラジカルな反政府運動が活発化するとともに，夏ごろからは秘密結社《土地と自由》（第V章参照）の創設も始められるようになる。[8]

1) これもオガリョーフの手になるものである。См. Н. Н. Новикова, Революционеры 1861 года, М. 1968, стр. 29.
2) Колокол, стр. 853 強調—原文。
3) Там же, стр. 854.
4) 強調はいずれも原文。
5) 強調—原文。
6) Там же, стр. 853.
7) Н. Н. Новикова, Указ. соч,. стр. 29.
8) Я. И. Линков, Революционная борьба А. И. Герцена и Н. П. Огарева и «Земля и Воля» 1860-х годов, М. 1964, стр. 151.

*
*　　*

解放令の発布にあたって，パリの大使館付教会で祈禱を捧げたツルゲーネフは，この年も五月から九月までをロシアですごし，九月も末になってパリに出てきた。この夏スパースコエでベンニに会ってアレクサーンドル二世への請願文について話し合ったことは前に見た通りである。彼は10月7日付でゲルツェンに手紙を書き，再会したい旨告げるとともに，ベンニからの長文の手紙をあづかっていると知らせたが[1]，これに対しゲルツェンはロシア政府の「第三部が自分を葬り去ろうとしている」から「ロンドンから出ないよう」にとの忠告の手紙を受けとった旨告げて，さらにペテルブルグ大学の閉鎖に関して述べている[2]。さらに彼はツルゲーネフに「君のところには『鐘』の全号があるか？」ともきいているが，この手紙の直後に出た（10月15日）『鐘』の第109号は『ペテルブルグ大学閉鎖さる！』の記事[3]を載せるとともに『大ロシア人』第2号の全文も掲載した[4]。

つぎのゲルツェンのツルゲーネフあての手紙は10月28日付のものであるが，この中で彼は「昨日大使館からオガリョーフが貴族の身分を剝奪された旨通知があった」と述べたあと「ぼくはアレクサーンドル二世が急速に駄目になってゆく（полетит к черту）ように信じ始めている。」[5]と書いている。さらに彼は手紙の終りに「すぐに『鐘』を11月1日に送る」と告げたが，これは『巨人は目覚めつつある！』と題する論文が掲載された第110号のことである。

「ロシアでは大学が閉鎖された。ポーランドでは汚れた警察によって教会さえ閉ざされた。理性の光も宗教の光もない！闇の中で彼らはいったいどこへわれわれをつれてゆくというのか？彼らは狂ったのだ――彼らと一緒に落ちたくなくば，やつらを馭者台からひきづりおろせ！

しかし諸君，若者は学問から締め出されて，一体どこへ身を置くべきか？

耳を傾けて聞かれよ。――闇とても聞くのは妨げえないだろうから。ドンからウラルから，ヴォルガからドニエプルから，巨大なるわが祖国のいたる所から呻吟が大きくなり，不平の声があがっている――これこそあきあきさせる凪のあとの嵐によってたち始めた海の波の最初の吼える音だ。人民の中へ！人民の方へ！ここにこそ学問の追放者たる諸君の場所がある。……君たちに名誉あれ！君たちは新しい時代を開きつつあるのだ。諸君にはささやきの時代が，遠まわしのほのめかしの時が，禁書の時代がもう過去のものになっていることがわかったのだ。君たちは国内では今でも秘密裡に出版をしているが，公然とプロテストしている。弟である君たちに名誉あれ！われわれは遠くから祝福をする！ああ，われわれが，ペテルブルグにおける学生の日[6]を読んだ時，どれほど胸が高鳴り，涙がこぼ

1) Тургенев, Письма, IV, 290.
2) Герцен, XXVII, 185.（1861年10月12日の手紙）。
3) Колокол, вып. IV, стр. 916.
4) Там же, стр. 913–914.
5) Герцен, XXVII, 190.
6) 強調はいずれも原文。

れそうになったか諸君が知ったなら！」[1]

ここにおいてゲルツェンはロシアにいる若者たちに，大学の閉鎖を機会にはじめて「人民の中へ！」の呼びかけをしている。もはや皇帝にも政府にも期待は持てなくなった。国内にあっては農民運動を抑圧し，大学を閉鎖し，国外ではポーランドで多くの血を流した。かくてゲルツェンはあらためてロシアの若い良心とエネルギーとに期待をかけるようになる。（第 V 章参照）

*
*　　*

さきの記事から二ケ月ほどたった 1861 年 11 月 22 日，『鐘』の第 113 号はトップにつぎのような簡単な記事をかかげた。

「ミハイール・アレクサーンドロヴィッチ・バクーニン，サンフランシスコに。彼は自由の身となった！バクーニンはシベリアを脱出して，日本を経由しイギリスに向っている。このことを喜びをもってバクーニンのすべての友に知らせる。」[2]

ゲルツェンがバクーニンのシベリア脱出の知らせを聞いたのは 10 月 13 日のことであるが[3]，10 月 15 日のバクーニンのサン・フランシスコからの手紙はつぎの言葉をもって始っている。

「友よ！ぼくはシベリアからの脱出に成功した。アムール河に沿っての長い旅，韃靼海峡の沿岸，日本を経由して，いまサン・フランシスコに着いた。しかしこの長旅はぼくを消耗させた上に，そうでなくても幾許かの費用を要した。もし善い人にぶつかってニューヨークまでの 250 ドルの金を貸してもらえなかったら，大いに困惑したことだろう。遠く離れた此処では友人も知人もいない。ニューヨークには 11 月 18 日ごろ着くだろう。ぼくの計算では君はこの手紙を 11 月 15 日ごろ受け取ることになるから，月末には君の返事がニューヨークに届くだろう。ぼくのためにロシアから君あてに金が送金されることを望んでいる。しかしそれが駄目でも 500 ドルをぼくあてニューヨークに送ってくれるように頼む……」[4]

このあとバクーニンは 11 月 2 日付で船の上から手紙を書き[5]，さらにニューヨークからも手紙を書き，重ねて送金を頼んだ[7]。これに関してゲルツェンは 11 月 20 日にツルゲーネフにあててつぎのような手紙を送っている。

1) Колокол, стр. 918.
2) Колокол, стр. 941.　強調—原文。
3) Герцен, XXVII, 185（オガリョーフ夫妻あての手紙）。
4) Письма. М. А. Бакунина к А .И. Герцену и Н. П. Огареву, стр. 188–189.
5) Там же, стр. 191–192.
6) Там же, стр. 193.

「今日ぼくはもうニューヨークに来ているバクーニンからの第三の手紙を受け取った。11月16日には着いていたのだ。彼はロシアからの金を待っている。彼の親友たちが（これは秘密だが）十分集めたことをぼくは知っている。しかしそれはどこにあるのだ？ぼくは2,000フラン送ったがそれ以上送れない。ボトキンにぼくあて500送るようにさせてくれ。もし彼が欲するならぼくの所にバクーニンのための金が送られてきた時に1,000でも500でも戻そう。奔走してみてくれたまえ。」[1]

この手紙に対してのツルゲーネフの返事はわかっていないが[2]，その後再三ゲルツェンからバクーニンを援助する資金についての手紙が行って，結局ツルゲーネフも「今後無期限で毎年1,500フランをバクーニンに与える」ことにし，さし当って500フランをただちにパリからロンドンに送る旨約束した。[3]

バクーニンがついにロンドンのゲルツェンの許に姿を現わしたのはこの年も押しつまった12月27日の夕方であった[4]。ゲルツェンはツルゲーネフにあて，オルセット・ハウスの自宅でイギリスの労働者の代表がバクーニンの到着を祝すべく来ることを1月はじめの手紙で告げたが[5]，彼はついにパリから腰をあげることなく，ロンドンに来たのはそれから四ケ月余もたった5月の中旬のことであった[6]。バクーニンとオガリョーフはすぐにでもツルゲーネフが飛んで来るものと期待していたが，ゲルツェンはこのようなのぞみを一切抱かず，この点で二人を「ロマンチシスト」と呼んでからかっている。[7]

バクーニンはロンドンへ来るや，ただちにその活動を開始し，1862年2月15日付の『鐘』の第122—123合併号に附録の形で『ロシア，ポーランド，すべてスラヴの友らへ』と題する長文の論文を発表した[8]。ところでこの号にはオガリョーフの筆になる «ход судеб» と題する巻頭文が掲載されているが，これは『鐘』の従来の主張をさらにラジカルに押し進め，人民の名においてツァーリと貴族に，あらゆる身分の平等化，官僚制の廃止，ミールの自治の導入を要求したものであった。[9]

バクーニンとオガリョーフが具体的な闘争へと情熱を燃やしていったのに対し，ゲルツェンは半歩身をひいてロシアの進むべき道について思いをこらしていた。彼は1862年1月1日付の『鐘』の第118号に «Mortuos plango…(死者を悼む……)»[10] と題する一文を寄せたが，またしてもこの中であの『古い主題による変奏曲』が新しい背景の中でかな

1) Герцен, XXVII, 200.
2) Там же, стр. 677.
3) Тургенев, Письма, IV, 325. (1861年1月25日の手紙)。
4) このあたりの描写は E. H. カーの『バクーニン』第19章にくわしい。
5) Герцен, XXVII, 206.
6) Тургенев, IV, 657.
7) Н. Богословский, Тургенев, М. 1959, стр. 325.
8) Колокол, вып. V, стр. 1021–1028.
9) Колокол, стр. 1017. См. Е.Л. Рудницкая, Н. П. Огарев в русском революционном движении, М., 1969, стр. 265.
01) Колокол, стр. 981–983.

でられている。それは以下のようである。

1852年から10年たって，過ぎた過去をふりかえってみると，ある者はイギリスへ，ある者はアメリカへと去ったが，多くのすぐれた人が死んで行った。生き残った者も老けこんでしまった。この間ロシアでも「不満と反対から」「さまざまな空論家が西ヨーロッパのたわごと」をくり返すようになったが，これらはすべて根のないものであった。このように書き出してゲルツェンはまず西欧の事物の無批判な摂取を批判するのである。これがチチェーリンらいわゆるリベラル西欧派に対するあてつけであることは言うまでもない。

ところでヨーロッパにはさまざまな理想はあっても，生活慣習（быт）は一つである。この慣習はながい戦いの中で形成されたものでヨーロッパにとってはきわめて自然なものであるが，ロシアはそれを忘れて西欧文明のファサードと形式だけを取り入れてきた。

それならばロシアはどうすべきか。西欧文明の形式だけを摂取するのではなく，その内容をも自己のものとなすべきだろうか。あるいはロシア独自の歴史的要素をこそ発展させるべきだろうか。

しかしヨーロッパはもはや限界に達しており，社会・政治生活のあらゆる面で根本的改革の必要性が痛感されている。しかしヨーロッパ文明の継子たるロシアにはかかる限界はない。西欧社会の上に重くのしかかっている古い廃墟は，いまだ建設すら行われていないロシアにはまったくない。これは素晴らしいことだ。ロシアには惜しむべきものがないのだ。もしわれわれに惜しむものがあるとすれば，それはあの残虐な父祖の思い出ではなく，彼らに泣かされ，痛めつけられた人々でこそある。しかし彼らを悼むことはできても，われわれが呼びかけることができるのは，君たち，生ける人びとだけである。

この『死者を悼む……』一文には内容的に格別新しいものは何も含まれていないが，ゲルツェンにしてみれば，多くの期待を抱きながら死んでいった人びとのことを考えるにつけても，現実のロシアは彼らの期待とは反対の方向へ進んでいることが耐えられなかったのであろう。死んでしまった人びとはもはや再び生き返らぬ以上，生き残ったわれわれは沈黙を守るべきか，という気持が最後の呼びかけに見てとれる。さらにこの一文はこのあと半年ほどして書かれた『終りと始め』のいわば前奏をなすものでもあった。

この年の5月中旬にツルゲーネフは5日間ほどロンドンを訪れたが[1]，パリに帰った直後彼はアーンネンコフにあててこの時の訪問をつぎのように書いている[2]。

「……[3] ぼくはロンドン訪問について君に話したいが，このつぎ会うまでみなとっておいた方がよいだろう。ただひとこと――まったく人生とは何と薄情な風車であることか！このようにして人を苦しみに変えると君は言いたいのかい？いや塵芥に変えるだけだ。し

1) Тургенев, Письма, IV, 644. 657.
2) Там же, стр. 388 (1862年5月18日ごろの手紙)。
3) …は原文。

かしすべてこういったことは比喩的なことだ。」

この手紙の調子こそ「比喩的」で判然としないが，第一に言えることはこの時彼がロンドンでバクーニンと甚だ面白からぬ再会をしたということ[1]，第二にゲルツェンとも論争を交えたという事情があった[2]。以前から反目していてオガリョーフとの間にも，『鐘』の第115号に掲載された解放令の変更をツアーリに要請する署名等をめぐって，やりとりがあったことは充分推測される[3]。ツルゲーネフにしてみればまさに四面楚歌の思いであったことだろう。

このときのツルゲーネフのゲルツェンとの論争は，すでに見てきた『再び古い主題での変奏曲』や『Mortuos plango……』で論ぜられたところと同じテーマ，即ちロシアと西欧との歴史的比較，ロシア文明と西欧文明との関係，さらにロシアの現状と今後の進むべき道等々に関するものであった。そしてゲルツェンはこの時の論争をきっかけとして以上の問題をめぐって『鐘』誌上に9回にわたって八編もの『終りと始め』と題する長文の論文を書くことになるのであるが[4]，そのことを彼はツルゲーネフがロンドンからパリに帰った直後つぎのように予告している。

「さらばだ。Bon voyage，そしてまた。……もし君が本当に君の弁論法（ディアレクチカ）で負わせたぼくの傷に膏薬をはってくれる気があるなら『死の家の記録』を送ってくれ。……
ぼくは君に――われわれの論争について前衛的な手紙（авангардное письмо）を書くつもりでいる。……」[5]

ゲルツェンの方もツルゲーネフとの論争で深手とは言えぬまでも，かなり深刻に考えさせられる破目になったことがこの手紙からわかる。『死の家の記録』については，この年一月に《Время》誌から別冊で出されたのを帰国するツルゲーネフに依頼したものであるが，絶対にすっぽかすことがないように四度も大きな文字で表題を書いている。

このようにして書簡形式の論文『終りと始め』が『鐘』の第138号（1862年7月1日）から連載されるようになるが，これは『フランスとイタリアからの手紙』にはじまるゲルツェンの思想のいわば集大成とも言えるものであって，文体の上でもツルゲーネフを意識

1) Там же, 645.
2) Герцен, XVI, 403. XXVII, 222. См. М. К. Клеман, Иван Сергеевич Тургенев, Очерк жизни и творчества, Л., 1936, стр. 152. なお後のツルゲーネフの反論の手紙を参照。
3) Тургенев, Письма, V, 48–50, 51（1862年10月8日付ルギーニンあて手紙および同日付ゲルツェンあて手紙）。Герцен, XXVII, 264–265（1862年11月22日付ツルゲーネフあて手紙）。
4) 「第一書簡」―第138号（1862年7月1日）。「第二書簡」―第140号（8月1日）。「第三書簡」―第142号（8月22日）。「第四書簡」―第144号（9月4日）。および「追記」―第145号（9月15日）。「第五書簡」―第148号（10月22日）。「第六書簡」―第149号（11月1日）。「第七書簡」―第154号（1863年1月15日）。「第八書簡」―第156号（2月15日）。
5) Герцен, , XXVII, 222.（1862年5月21日の手紙）。強調―原文。

したためか，きわめてすぐれたものであった[1]。以下順を追ってこれを見てゆくこととする。

〔第一書簡〕

「親しい友よ，かくて君はもう決定的にこれ以上行こうとはしなくなった。豊かな秋のみのりの中で，長いあのうだるような夏のあとで，ものうげに葉をふるわせている木陰の公園で休みたいというわけだ。日の短くなることも，山の頂きが白くなることも，ときどき陰気な冷い空気の流れが吹きすぎることも君を恐れさすことはない。むしろ君にはわが国のあの春の雪どけの膝までつかる泥濘が，川のはげしい氾濫が，雪の下から顔を出す裸の大地が恐ろしいというわけだ。そうだ，未だわれわれが得ていない秋の収穫の前の，嵐や霰や豪雨や日でりやはげしい労働によって切り離されたわれわれの期待全般の方がむしろ君には恐ろしいのだ……」[2]

ゲルツェンはこのような比喩的な言葉をもって手紙を書き出し，つづいて次のように文章を書き進めている。

ぼくには君の恐れがよくわかる。君がすっかり出来上った市民生活の形態に惹かれ，粗野でまだ踏みならされていない道のつづく生活が厭わしいものに思つていることも理解できる。ぼくの知人の中には，1848年の革命のあとアメリカへ渡ったものの，そこでのあまりにも荒けづりの生活に耐えられなくなってヨーロッパへ再び舞い戻った者もいる。またフランスでは二月革命のさなかに，大衆の合唱を聞きたくないばっかりに，パリからロンドンへ逃れた歌の教師の例も見た。

ところで現在のロシアには，パリとアメリカから人びとが逃れた二つの原因が，ともに存在している。「人も制度も，教養も野蛮も，何世紀も前に死んだ過去も 何世紀もの 後に生まれ出る未来も——あらゆるものが発酵と解体の状態にある。」[3]

かつて君は西欧世界の思想[4]を擁護した。しかしこれはまったく不必要なことだったのだ。西ヨーロッパの思想や科学は，誰でもが認めている人類の相続財産なのだ。いまや君は西ヨーロッパの生活形態までをも長子相続権として移さんと欲している。そしてヨーロッパの歴史的に形成された生活状態（быт）だけが人類の進歩の美的要求にふさわしいものであり，この生活状態だけが知的・芸術的生活に必要な諸条件を与えるものだと考えている。芸術はヨーロッパに生まれたのであって，それ以外の芸術は存在しないというわけだ。

ダンテ，ブオナロッティ，シェークスピア，レンブラント，モーツアルト，ゲーテといった人びとは確かに西ヨーロッパに生まれたし，それを議論する者は一人もあるまい。し

1) См. Иванов-Разумник, История русской общественной мысли, т. I, Спб., 1911, стр. 378, Freeborn, op. cit., p. 136.
2) Колокол, вып. V. стр. 1141. Герцен, XVI, 131.
3) Колокол, стр. 1141. Герцен, XVI, 131.
4) 強調—原文。

かし現在のヨーロッパの何処に新しい芸術が，創造的で生き生きとした芸術が存在するだろうか。いつでも同じベートーヴェンのくり返しではないだろうか[1]。

それはいったい何故だろうか。原因はヨーロッパのプチ・ブル根性（*мещанство*）[2]にこそある。その中では芸術が塩づけの野菜のように萎れてしまうのだ。このプチ・ブル根性の中にある二つの才能は《中庸と正確（умеренность и аккуратность）》である。「しかしこれは全然芸術的ではない。」[3]

ヨーロッパがめざしている理想はこのプチ・ブル性[4]である。「道に面した小窓のついた小さい家。息子は学校に，娘には着物を。労働者にはつらい労働をというわけだ。これこそまったく救いの港というものだ！—— havre de grâce！」[5] この「プチ・ブル性[6]こそ所有権の無条件の専制にもとづいた文化の最後の言葉であり，貴族制の民主化，民主制の貴族化なのである。」

アメリカ合衆国は中産階級だけの国であるが，ここにもプチ・ブル根性は残った。ドイツの農民は耕作するプチ・ブルであり，あらゆる国の労働者も，これまた未来のプチ・ブルなのである。そしてこのプチ・ブル根性と共に個性が失われてゆく。

プチ・ブル性の支配は，土地なき解放[7]に対する答である。人びとを解放し，土地を少数の選ばれた者に緊着させた結果である。一文の金のために夢中になって働く大衆が勝を占め，自らの流儀で享楽し，世を支配する。彼らにとって強力な個性やオリジナルな知性などというものはまったく不必要なのである。

J. S. ミルの言葉を借りるなら，いまや西欧社会の至るところに「集団化した月並み（conglomerated mediocrity）」が存在している[8]。しかもここから脱出することは，きわめて難しい。今日支配しているブルジョワジーの蔭に，ブルジョワ的生活をめざす候補者が更に多く[9]いるからである。土地なき世界，都市優先の世界，極端な所有権の世界には他に救いの道はなく，すべてはプチ・ブル根性をめざして進んでいる。われわれの目から見ればこれは退歩なのに，農民やプロレタリアートには教養とも発展ともうつるらしい。

このようなプチ・ブル根性は以前にもあったが，これほどひどいものではなかった。昔は何よりも理想と確信が，誇り高い騎士の精神があった。われわれの《神はわが櫓》や《マルセイエーズ》は一体何処へ行ってしまったのだろうか。

ワイト島　1862年6月10日

1) Колокол, стр. 1142. Герцен, XVI, 135。
2) 強調—原文。イワノフ＝ラズームニクがつとに指摘したように мещанство の概念はひとりゲルツツエンのみならず，19世紀ロシア・インテリゲンツィアの思想においてきわめて重要である。イワノーフ＝ラズームニクによればインテリゲンツィアがインテリゲンツィアたる一つの指標は анти-мещанство ということですらあった。Иванов-Разумник, Что такое интеллигенция, Белрин, 1920 及び Указ. соч., стр. XIX и след.
3) Колокол, стр. 1143. Герцен, XVI, 136.
4) 以下においては《мещанство》を「プチ・ブル根性」または「プチ・ブル性」と訳す。
5) Колокол, Там же. Герцен, XVI, 137.
6) 強調—原文。
7) 強調—原文。
8) Колокол, стр. 1144. Герцен, XVI, 141.
9) 強調—原文。

以上に見られるように，「第一書簡」はフランス革命後のブルジョワ西欧社会を быт あるいは moeurs の面からするどく分析した[1] ものである。そしてその根底にある唾棄すべきプチ・ブル根性の存在を，彼はモラリスト的観察眼をもって見抜いている。この点での指摘はすでに『フランスとイタリアからの手紙』や『向う岸から』にも見られるが，今日の「大衆社会」の心理的状況がすでに100年も前に適確にとらえられているのはあらためて評価されるべきであろう。

さらにここでは芸術や科学の普遍性が取り上げられているが，この点がツルゲーネフとロンドンで議論した焦点の一つであったことは容易に想像される。ゲルツェンは芸術や科学が人類に共通の相続財産であり，それらを生み出したのがもっぱら西ヨーロッパ社会であったことを認めつつも，いまや初期の創造的精神は完全にプチ・ブル根性の中に見失われてしまっていることを指摘するのである。この裏には，『向う岸から』その他でくり返し述べてきた彼の主張——即ち古代ギリシア・ローマの普遍的文明が，没落せんとするローマ社会において創造的精神を喪失し，むしろ遅れたあの暗いゲルマンの森のワルワールによってこそ受け継がれたのだとの考えがあった。冒頭の引用はこれを象徴的に語るものであるが，この点は「第五書簡」でさらにくわしく述べられている。

〔第二書簡〕

つづく第二書簡は，前の芸術論，科学論をうけて，近代ヨーロッパの歴史をマッツィーニに例をとって論じたものである。

マッツィーニがその全生活を革命運動に捧げていることは周知の通りであるが，ヨーロッパで40年以上暮したこのイタリアの革命家は，現在のヨーロッパの生活には《いかなるイニシアテブ》も存在しないという結論に到達した。即ち「保守思想も革命思想も単に否定的な意味しかもっていない」との結論である[2]。

ヨーロッパにおける革命の波が1789年に勝利を収めたことは疑い得ないが，しかしあらゆるものがこの波におおわれ，再び波の表面に胴体のない頭が浮かび出たとき，人びとははじめて何か恐ろしい欠落を感じざるをえなかった。解放された力はたがいに切り離され，その後疲れて立ち止ってしまった。彼らは何も為すことがなく，あたかも日傭労働者が仕事を待つように，日々の事件を待ちうけるだけであった。何よりもいけないのは，はっきりとした目的がないことであった。しかし目的がなければ，それを作り出せばよい。どんなことでも目的になりうるからである。ナポレオンはこのことを確信していた。彼自身が目的となり，戦争が目的となった。そして革命の波が，思想を押し流すよりも，もっと多くの血を流したのである。マッツィーニにはこのことがわかった。そして彼は決定的な判決を下すに先立って政治的な壁の向うを見てみた。その時彼の目にうつったのが，ゲ

1) フリーボーンはこの論争を通じてのゲルツエンの分析的方法を，ツルゲーネフの syncretic な叙述と比較している。Freeborn, op. cit., p. 137.

2) Колокол, стр. 1158. Герцен, XVI, 143.

ーテの偉大なエゴイズムであった。その泰然たる無関心ぶりと，人間の事象を自然科学的に実験的に見ようとする知識欲とである。さらに彼の目には，自らを責めるバイロンのこれまた巨大なエゴイズムもひときわ強くうつった。その主人公はマッツィーニに大きな衝撃を与えた。しかしバイロンの主人公には客観的な理想が，信念が欠如していた。マッツィーニの活動的な精神は，このような病気の診断書に満足することはできなかった。彼は新しい時代の言葉，イニシアテブをさがして古代ローマを中心とするイタリアの統一と解放[1]にそれを見出したのである[2]。

しかし狂信的なマッツィーニは誤った。そして彼の誤りの巨大さが，カヴールの成功と単一なるイタリアとを可能にしたのであった。

だがわれわれにとっては彼がどのように問題を解決したかはそれほど重要ではない。より大切なことは，西ヨーロッパにおいては人が既製のフォームから自らを解放し，自分の足で立つようになると，とたんに事業がうまくゆかなくなり，発展が脇へそれてしまう，ということである。そこで革命家も保守主義者も民族主義の原理をもって欠如せる原理に代えることによって，このようなうまくゆかないという不満な気持をあざむくことになる。マッツィーニは民主的思想の何か空しさ[3]を自覚して，イタリアのドイツ人からの解放をかかげた。ここにおいて彼の周囲のすべてが卑俗なるものに，小さなものになってしまったと J. S. ミルは指摘している[4]。

ところで歴史と自然における発展は，その針路から外れるものではないと言われるが，はたしてそうであろうか。一般的法則が同じものとして残るのは言うまでもないが，個々の場合になるとまったく相反する現象となってあらわれる場合もある。たとえば，同じ引力の法則に従いながらも鉛は落下するのに綿毛は飛ぶ，といった具合にである。

しかして現在のブルジョワ文明・資本主義国家は，土地なきプロレタリアートの上に，所有権の無制限な承認の上に，きわめて一面的に，いわば畸型的に発達してきたものである。J. S. ミルはブルジョワジーの優勢とともに，生活が卑小化し，個性が磨滅して，あらゆる精神生活の堕落が始ると言っているが，これは決して英国に限ったことではない。あるいは何らかの危機が来て，このような堕落への道から西欧諸国を救い出すことがあるかも知れないが，それがどこから来るか私も知らないし，ミルも知らない……[5]

ワイト島 1862 年 7 月 20 日

このようにしてゲルツェンは，近代西欧社会の歴史をマッツィーニを例にとって論じ，ミル[6]の言葉を援用しながら西欧社会の行きづまりをくりかえし述べている。われわれにとって特に興味あるのは，ブルジョワ社会における民主主義の「空しさ」から，民族主義

1) 強調はいずれも原文。
2) Колокол, Там же. Герцен, XVI, 144.
3) 強調はいずれも原文。
4) Колокол, Там же. Герцен, XVI, 145.
5) Колокол, стр. 1159. Герцен, XVI, 148.
6) J. S. ミルについてはゲルツェンは『過去と思索』の中で一章（第 6 部第 3 章付録）をさいて論じている。

が発生してくるとの指摘である。周知のようにゲルツェンはマッツィーニと個人的にもつき合いがあり，『過去と思索』の中でもこの多少ならずファナテックな革命家の姿を見事に描いているが[1]，ここでのべられているゲーテやバイロンに対する注目は，ゲルツェン自身の経験でもあった。ところでマッツィーニにおけるナショナリステックな要素は，その中央集権への確信とともに，バクーニンがその後70年代の初頭になんども舌鋒するどく攻撃したところであった[2]。その問題がここではごく簡単に触れられているわけであるが，必ずしも直線内に結びつかない民主主義と民族主義の間の微妙な関係は，ゲルツェンの場合すぐあとに「ポーランド問題」をめぐって，具体的な形で解決を迫られるようになることを後に見るであろう（第VI章参照）。

*
*　　*

ところでゲルツェンは，以上の第一，第二書簡について，1862年8月22日付の手紙で，ツルゲーネフにつぎのように質問を発した。

「君はぼくの君にあてた一連の書簡体の作品（『終りと初め』）を読んだろうか——それらに満足したか，それとも腹を立てたか——お願いだから言ってくれ。
前の号を送る。明日の号もすぐに送ろう。——返事を待っている。」[3]

これに対しツルゲーネフはバーデン・バーデンからすぐに返事を書いた。

「親愛なるアレクサーンドル・イワーノヴィッチ——第一に即刻の返事に感謝する。しかし第二に君が自分のこの二つの作品（『終りと初め』）がぼくを怒せるかもしれないと考えたことに対して——詩的な言葉で言うなら——いささかおかんむりでいる。たったいま読んだところだが（読み出したときには，それがぼくにあてられたものだということは想像もしなかったが，そのあとすぐに気が付いた。），この中に君のすべてを見出した。君の詩的な頭脳も，とくに素早く深く視る才能も，君の高潔な魂のひそかな疲労等々も。しかしだからといって，これはぼくが完全に賛成したことを意味しない……ぼくには，君が問題をこのように提出したとは思われない。ぼくは——言葉のあらゆる意味で必ずしもたやすいことではないけど——君と同じ雑誌に返事を書く決心をした。君の方はお願いだから，ぼくの名前は秘密にしておいてくれ。そしてもしも出来ることなら他人の目をくらましてほしい。一週間後には君に返事を送りたいと思っている——もうそれに取りかかった。」[4]

ここで見る通り，この時にはツルゲーネフは比較的好意ある受け取り方をしており，自分のこの書簡に対する反論を『鐘』に送ろうとすら考えていた。しかしこの時たまたまバ

1) 第5部第37章，第6部第2章等。
2) Archives Bakounine, «Réponse d'un Internationale à Mazzini» vol. I-(1), pp. 1-12. «La Théologie politique de Mazzini» pp. 19-78. «Article "Contre Mazzini"» vol. I-(2) pp. 77-101.
3) Герцен, XXVII, 252.
4) Тургенев, Письма, V, 40. (1862年8月27日付の手紙)。

ーデン・バーデンに来た駐仏ロシア大使キセリョーフから口頭で「警告」を受けて，彼はこの計画を思いとどまり[1]，結局以下に見るようにツルゲーネフの反論は，もっぱらゲルツェンへあてた私信の中で行われるようになるのである。

〔第三書簡〕

つぎの第三書簡は8月10日執筆の日付になっているが，冒頭においてゲルツェンは，この夏中ずっと悪天候がつづき，もしかしたら地球に亀裂でも生ずるのではないかとの不安がヨーロッパ中にひろがっていたという噂を述べたあとで，「しかし，この亀裂もオリョール県までは届かないだろうから，君を恐れさすことは何もないわけだ」[2] と具体的な地名をあげている。これはそのすぐ前の，「詩人としてまたイデアリストとしての君は」云々という表現とともに，当時のロシアの知識人にはすぐにツルゲーネフを想起させる表現と考えてよい。さきに見た「他人の目をくらませてほしい」という頼みを結果的には裏切ることになったが，ツルゲーネフの手紙をもらった時にはすでにこの論文ののった『鐘』は発行されたあとであった。

ところでこの書簡の主題は前の書簡で論じたマッツィーニの形象を普遍化して，「革命のドン・キホーテ」を論じたものである。「革命のドン・キホーテ」とは神の王国ならぬ地上の人間的王国を狂信的に信じ，共和国の到来を確信して疑わない献身的革命家の謂である。彼らは18世紀の山脈のいわば頂上をなす人びとであり，最後にはついに敗れ去った90年代の使徒たちでもある。彼らの多くは人民のために働いたあとで非業の死をとげたが，生き残った人びともいまや悲しい姿をさらしている。子も孫も彼らの仕事を受け継いではくれない。そのジャコバン的言辞は周囲の者をおびやかすだけで，人びとは彼らの白くなった髪をさしては，立ち去ってゆく。ヴィクトール・ユーゴーの小説の中の「不幸な人びと」がたいてい老人であるのもむべなるかなである。彼らは子供たちから断絶しており，僧房の中の修道士よりも家庭の中では孤独である。しかしユーゴーもほとんど見落しているが，彼らの苦しみは，自らの正しき行為が不必要だということを自覚せざるを得ないことにこそあった[3]。

この90年代の狂信的で理想主義的な「父」をその「子」とくらべるならば，「子」の方が慎重で思慮分別があり，あきらめているところは「父」よりも年上のようにすら思われる。さらに帝政時代の近衛騎兵の制服をめかしこんだ「孫」になると，もっぱら自分の地位を利用するためにうまく出世することだけを考えている。したがってこれら三つの世代の間には自然な関係や均衡は破られていて，世代の有機的な相続が歪められてしまったとしか思われない[4]。

以上のように述べてゲルツェンはユーゴーの『レ・ミゼラブル』等を批評したあとで，世代論からまたしても歴史論を展開する。しかしこれは『向う岸から』の中でリアリスト

1) Там же, стр. 516 及びつぎの書簡参照。
2) Колокол, стр. 1173. Герцен, XVI, 150.
3) Колокол, стр. 1174. Герцен, XVI, 154.
4) Колокол, стр. 1175. Герцен, XVI, 155.

たる「中年の男」と「医者」が述べている歴史観[1]のくりかえしである。

すなわち種が成熟してしまったところでは，歴史は停止するか，少くとも発達のテンポはにぶってくる。これは民族や国家についても言えるのであって，発達の最後の状態に近づけば近づくほど，自らが世界の文明の中心であると思いこむようになる。シナがそのよい例だが，今日のヨーロッパも，イギリスやフランスはさまざまな矛盾を抱えながら，自分たちが世界で一番進んだ国であると思っている。

すくなくとも目に入る限りでは，いたるところ白髪と皺と屈んだ背中とが見える。遺言と出棺と「終り」ばかりが見える。「だれもが『始め』をさがし求めているが——それは理論と抽象の中にしかない。」[2]

ここで初めて本書の表題である『終りと始め』の意味があきらかになる。しかしこれまでの書簡で述べられてきたのは，もっぱらそのうちの「終り」だけであって，まだ「始め」は出てこない。「終り」とは言うまでもなく，プチ・ブル性によって象徴される西欧的生活の衰退であり，創造的精神の喪失である。ここで論ぜられた主題は，前にゲルツェンが『向う岸から』の中で（とくに第 V 章の «Consolatio» の中で）述べたところとほとんど等しいと言ってよい。

〔第四書簡〕

これは1862年9月1日付の本文と，同年9月7日付の追記『終りだ！　終りだ！』とから成っており，その中でゲルツェンは前の書簡につづいてフランス革命以後の西欧社会の変化を歴史的に概観している。

まず初めに彼は去年自分の所にサラトフの友人が来て，パリもずい分退屈だとこぼしていったが，退屈と言えばロンドンの生活もひどいものだ。それではどうしてこう退屈なのか，まずその原因を考えてみることにしょう，と話のいとぐちを切っている。

ゲルツェンはまず19世紀初頭以降の西欧の植民地戦争とアメリカ合衆国の南北戦争を取り上げ，民主主義者が奴隷制を維持すべく戦い，共和主義者が不可分なる国家という奴隷制のために戦ってきたことを皮肉に叙述する。

西欧社会の行きづまりは学問の領域についても言えることであって，歴史も法律も宗教も，すべてが純粋知識の枠におさまってしまい，あたかもそこにおいてクモの巣にからまって動けなくなったような状態が今日の西欧科学の姿である[3]。かかる科学によれば，人類の進歩というものは，あたかも貴人のおしのび旅行の如きものであって，宿場宿場に馬が待っていて，定められた目的地へわれわれを運んでくれるものとされていた。そこへ突如として勃発したのが二月革命である。しかして「この蠅はクモの巣にはひっかからない」ものであった。

ついで七月革命の比較的弱い衝撃が起り，これによってニーブールとかヘーゲルとかい

1) 前掲拙稿参照。
2) Колокол, стр. 1176. Герцен, XVI, 157.
3) Колокол, стр. 1191. Герцен, XVI, 163.

った巨人も一撃の下にやられてしまった。ここでも教条主義が勝利をおさめ，オルレアン家とともに，ジャーナリストやコレージュ・ドゥ・フランスや経済学が玉座の最上段に座った。それからまた10年たったが，何ひとつうまく行ったものはなかった。ドノゾ・コルテスの欲した[1]ようには英国はカトリックにならず，幾人かのドイツ人が欲したように19世紀が13世紀に戻ることもなかった。大衆がフランス流の友愛や死も，プルードン流の尊敬すべき貧困も，平和な社会のための国際法も，断乎として欲さないからである。

いったい人類はどこに行くというのであろうか。つい数ケ月前にも彗星が地球にあやうくぶつかるところだったということだが，今日でなくとも明日には人びとの噂のようにこの地球に一大亀裂が生じるかも知れない。

このようにして「第四書簡」は終り，ついで『終りだ！　終りだ！』と題する追記がつづいている。

「……そうだ親愛なる友よ，この地球の上に乗って行くわれわれが，どこへ行きあたるか知るのはむずかしい。それは背後には彗星が，足下には亀裂の可能性があるという理由ばかりからではない。われわれは奇妙な同志と同じ車に乗り合わせ，途中下車も停止も進路修正もできないまま疾走しているからだ。[2]

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

先日私はマッツィーニに会って[3]別れを告げたが，これはつらいものだった。私は彼の事業の成功を信じていなかったし，彼も完全には信じていなかった。マッツィーニとガリバルディというこの二人の最後の「革命のドン・キホーテ」は祖国と人間の尊厳の名においてオーストリアとフランスとイタリアの銃剣に抗して，わずか一握りの同志と共に立ち上ったのだ。私の前に坐って，負傷して蒼白い痩せたマッツィーニはこう言った。「そうです。われわれは亡びるかも知れません。しかしイタリアはわれわれの滅亡に我慢できないでしょう！」と。「我慢できますよ」と私は言いたかったが，口に出しては言わなかった。四日後に，すべては終った[4]。さながら何ものかが心の中で裂けてしまったようであった。これら聖なるドン・キホーテが居なくなることによって，生活はもっと貧しく，月並みなものになることだろう。それなのにわが国の雑誌[5]では「かかる人間は所詮暴徒にすぎない」として片づけられている，

人間というものは恐ろしく矛盾したものだ。死んでゆく人の枕辺にあって，だんだん力尽き，息絶えてゆくのを見ながら，あたかも死を待ちうけてはいなかったかの如く柩のそばで号泣する。さればわれわれも矛盾したものになろうか[6]。

---

1) 『向う岸から』第 VIII 章「ヴァルデガマス侯ドノゾ・コルテスとローマ皇帝ユリアヌス」参照。
2) Колокол, стр. 1197. Герцен, XVI, 165.
3) 1862年8月25～6日ごろのことである。
4) 1862年8月29日，ローマを解放せんとするガリバルディ指標下の義勇軍はアスプロモンテにおいて敗れ去った。
5) «Северная Пчела» 第226号（1862年8月22日）。
6) Колокол, стр. 1198. Герцен, XVI. 167.

この追記が，つい十日ほど前に体験したマッツィーニとの別離と，その後の彼らの悲しい敗北から矢もたてもたまらず執筆したことは，あきらかである。ゲルツェンにしてみれば彼らが敗れ去ることは初めからわかりきっていたし，止めたとて止められるものでないことも，はっきりしていた。しかし「革命のドン・キホーテ」たる彼らの敗北を必然的なものとして見通しながらも，実際に彼らが敗れ去ったあとで完全な第三者として冷い批評を下すことはゲルツェンにはできなかった。最後の自嘲を含んだ一句がこの内面の「矛盾」を反映している。このような理想を追求し，ついに斃れた人びとへの愛情は『向う岸から』の「若者」にも「黒衣の夫人」にも見られたところであり，さらには，この追記の執筆直後にゲルツェンが会ったポーランドの中央民族委員会の代表たちに対して彼が後に抱いた感慨でもあった。(第 VI 章「ゲルツェン・バクーニンとポーランド問題」参照)。

*
*　*

他方ツルゲーネフから見るならば，この書簡が自分とのかつての論争からひどく逸脱してしまっていると思われたのも無理からぬところであった。これら「第三，第四書簡」を読んだあとで，彼は10月8日付の手紙でゲルツェンにつぎのように書き送っているが，これは事実上，以上の書簡に対するツルゲーネフの反論となっている。

「『鐘』にのった手紙に対するぼくの回答に関してだが，もうすでに何頁かの下書きを書いたから君に見せようと思っているが，君がぼくに宛てて書いていることがすべての人に知られている上に，『鐘』に印刷しないようにと半ば公けの[1]警告をこっそり受け取ったのでちょっとストップしてしまった。一般大衆にとってこれは本質的に大したことではないが，ぼくにとっては重要なことかも知れない。ぼくの主な反論は以下の如きものだ。君は本来ぼくとの関係において，このように問題を出してはいなかった。ぼくは——ゴーゴリの表現を借りれば——ヨーロッパ的原理と制度の流れの影[2]に去ったのだ。もしぼくが25歳だったら，また別の行動をしたかも知れない。——自分自身のためだけでなく，人民のためにも。ロシアにおける教養ある[3]階級の役割は文化を人民に伝達することにある。そしてそれを受け取るか拒否するかは人民自身が決めることだ。ピョートル大帝もロモノーソフもこの役割の中で活躍し，またこの役割を革命的行動に移すものがあるとは言え，本質的にはこれはつつましい役割なのだ。しかしぼくに言わせれば，この役割は未だ終ってはいないのだ。それなのに，君たちは反対に（スラヴ主義者の如く）ドイツ的思考のプロセスをもって，ほとんど理解もせず理解もされない人民の本質から，人民がその上に生活を打ち建てるべきだと君たちが考える諸原理を抽象しては，霧の中でぐるぐる廻りをしている。そしてより重要なことは，君たちが本質的には革命を拒否していることだ——なぜなら君たちが敬服するところの人民というのは par excellence（この上なき）保守主義者だからだ——そしてなめし皮の外套を身にまとい，ぬくぬくとした泥だらけの掘立小屋に住み，いつも胸やけがするほど太鼓腹を満腹させながら，あらゆる市民的義務や自発的行為を嫌悪するようなブルジョワジーの萌芽すら持っている——彼らは君が書簡の中で描いた西

1) 強調—原文。
2) 3) 強調はいずれも原文。

ヨーロッパのブルジョワジーのきわめてはっきりした特徴をすべて未来に留保している。べつに遠くへ行ってみる必要もない。わが国の商人たちを見てみたまえ。ぼくは抽象する，という言葉を用いたが，故あってのことだ。君たちがロンドンでぼくの耳にタコができるほど語ったゼームストヴォ[1]だが，この評判倒れのゼームストヴォ[2]というやつは，実際のところはカヴェーリンたちの言う父祖伝来の生活慣習[3]と同じような長い間かかって作り上げた机上の空論だということがはっきりした。ぼくは夏中シチャーポフ[4]に取っ組んだが（本当に取っ組んだのだ！）今日でもぼくの確信はなんら変ってはいない。ゼームストヴォ[5]とはどれか任意の同じ力をもった西欧の言葉が意味するものとまったく同じものを意味するか，あるいは何ものをも意味しないかどちらかだ。シチャーポフ流[6]の意味は，百姓にとっては百中の百というように何だかわからないものだ。君たちは自分らの発見した《ゼームストヴォ，アルテーリ，オープシチナ》とはまたちがった別の三位一体を見出すべきだ。あるいはまた，このロシアの人民の努力によって国家・社会形態に付加された特別な制度というのは，われわれ熟慮反省する人間が一つの範疇に入れるには未だ十分解明されていないのだということを自覚すべきだ。さもないと，人民の前で自己卑下したり，人民を歪めたりするおそれがある。人民の信念を神聖で高潔なものと呼んだり，あるいはバクーニンが最近のパンフレット[7]でほんの一頁書いているように，人民に対して不幸にして愚かなものという烙印を押すようになる。彼について言うなら，21頁で《もしツァーリが全人民的なゼームスキー・ドゥーマを召集しなければ，1863年にはロシアに恐ろしい災が起る》と言っている。もし彼が望むなら，ぼくはどんな賭をしてもよい。ツァーリはいかなる召集もしないだろうし——1863年はとりわけ静かに[8]すぎるだろう。Es gilt？〔（賭けに）承知かい？〕ぼくは自分の予言が，春にロンドンで——覚えているかい——ウスターフナーヤ・グラーモタ[9]について言ったのと同じように的中するだろうと確信している。あの時はただ年末までにはその半分が提出されるものと考えた点で間違っただけだ——しかしそれらは今ではほとんど全部提出されている。さあ，旧友よ信じたまえ。生き生きとした革命的プロパガンダの唯一の支点は，バクーニンが頽廃し，土地から切り離され，裏切者と呼んだロシアの教養ある階級の中の少数にこそあるということを。いずれにせよ，君には他の購読者はいないのだ。さあ，これで十分だろう。Dixi et animam meam salvavi（われは言えり，しかしてわが霊魂を救えり[10]。）ぼくはそれでもなお君を心から愛している。そして君の手を固く握る。

君の Ив. ツルゲーネフ」[11]

1) 2) 3) 5) 強調はいずれも原文。
4) 1860年代の革命的思想家，カザン大学歴史学教授 А. П. シチャーポフ（1830—1876）のこと。彼の著作である『ゼームストヴォとラスコール』についてゲルツエンはこの年2月20日の手紙でツルゲーネフに読んだかどうか質問している。Герцен, XXVII, 213, 689.
6) 強調—原文。
7) バクーニンの論文『ロマーノフ，プガチョーフあるいはペステリ？』をさす。
8) 強調—原文。
9) 1861年の農奴解放令後，地主と前の農奴との関係を定めた法規。
10) この慣用句には裏に「われは警告せり。故に何らの責任も負わず」という意味もある。
11) Тургенев, Письма V, 51-53.

ツルゲーネフの反論はあきらかである。フリーボーンが指摘しているように[1] ゲルツェンの主張がともすれば散漫であるのに対し，ツルゲーネフの回答は直接的でするどい。まず第一に彼は，ゲルツェンやオガリョーフにある人民の偶像化をはっきり否定し，人民が本質的にはすぐれて保守的なもので，ゲルツェンの嫌悪するところのプチ・ブル性すら萌芽の形で持っていると断言している。これがツルゲーネフ自身の領地での農民との間に持った経験に根ざすものであることは，いままでの経過からして言うまでもあるまい。ゲルツェンに始まるロシアの「人民主義」は，その思想の核に人民への負債や人民崇拝を持つものであったが，現実の人民が彼らの考えている理想像とはほど遠いものであることを後に「人民の中へ！」の革命家たちは身をもって体験しなければならなかった。作家ツルゲーネフの透徹した眼は，すでにこのことを見抜いていたとも言える。

ゲルツェンも『フランスとイタリアからの手紙』や『向う岸から』の中で，いかに民衆というものが気まぐれで，忘恩の徒であるかを指摘し，彼らにおける保守的な傾向やプチ・ブル的性格を適確に見抜いている。これは彼が西欧社会の中でいわば第三者として冷静に事態を観察しえたことと，さらには前に見たゲルツェン自身の言葉を借りるならば，書物によってではなく，広場で，集会で，大衆の中に入って経験したところからなしえたことであった。しかしロシアの人民について彼は本当に彼らの中に入って体験したところはほとんどなかったと言ってよい。おそらくこの時までロシアの文学者の中で，真の意味で民衆とともに生活し，彼らの良きにつけ悪しきにつけ，矛盾に満ちた複雑な姿を実際に見て，それをヴィヴィッドに描き出したのは，ドストエフスキーが最初であろう。『死の家の記録』はこの点でまさに記念碑と呼んで然るべき作品であり，これをゲルツェンがツルゲーネフに是非送るように頼んだことは，きわめて象徴的である。

第二に以上との関連においてツルゲーネフが問題にしているのは，ロシアにおける「教養ある階級の役割」である。彼はそれをもって，全人類に普遍的な文明（ということは事実上近代西洋文明ということになろうが）を，人民に伝達することにあると，はっきり定義づけている。それを受け取るか否かは人民自身の決めることであるが，ピョートル大帝やロモノーソフに始まるこの仕事は未だ完了してはいないというのが彼の立場である。この点ツルゲーネフの西欧主義は一貫して変っていない。そしてこのような立場が，ロシア国内の反動的貴族層や，さらには保守的で，プチ・ブル的要素をも秘めた人民に対する不信にもとづくものであることは，今まで見たところからもあきらかである。しかも彼は，この役割が本来ひかえめで，「つつましい」ものであるということまでことわっている。それならば社会の諸矛盾はどのように解決さるべきかというならば，それは「漸進的に」改革してゆくよりほかに方法がない，というのが，ツルゲーネフの「漸進主義」の立場である。

第三にツルゲーネフが指摘していることは，ゼームストヴォといい，アルテーリといい，オープシチナといい，これらのものは学者（シチャーポフ）や評論家（ゲルツェン，オガリョーフ及びスラヴ主義者）によってロシアに固有のすぐれた制度であると主張されてい

1) Freeborn, op. cit., p. 137.

るが，これは実態をよく知らない者の空論だということである。それらの制度がはたして将来への発展の可能性を秘めた一つの範疇として確立しているかどうかは，まだあまりにも多くの留保を含んでいるということをツルゲーネフは言いたかったのである。ゲルツェン自身もこのことは認識していたのであって，彼はこれらの制度がそのままで将来のロシアの社会主義の基礎になりうるとは一度も言っていない。なりうる可能性があるということをくりかえしているのである（「第八書簡」）。そしてその根底には，彼が『向う岸から』の中で詳細に述べた，必然性を排し可能性を主張せんとする歴史観があったことをわれわれは知っている[1]。それならば，ここでのゲルツェンとツルゲーネフの見解の相違は両者の歴史観，人間観にもとづく基本的な相異に由来するものであることをここに確認すべきであろう。

最後にツルゲーネフが言っているのは，バクーニンやオガリョーフにおける現実認識の誤りである。彼らは来年にでもロシアに革命が起るようなことを言っているが，こんなことは絶対にありえない，というのがツルゲーネフの賭けの内容である。この点でゲルツェンが，バクーニンやオガリョーフとは異った現状認識をしていたことをわれわれは以下に見るであろうが（第 V，VI 章参照），事実から言うならば，ロシア国内に関する限り，ツルゲーネフの方が賭に勝ったとも言える。革命的反乱はロシア国内ではなくポーランドに起ったからである。そしてこの事件を契機にロシアの世論は一段とナショナリスティックな色彩を濃くし，右傾化して行き，『鐘』は孤立化するようになる。ツルゲーネフの指摘したように「教養ある階級」がそれから離れていったからである。

しかし結論を急ぐことはあるまい。ゲルツェンはひきつづき「第五書簡」を書いているからである。

〔第五書簡〕

これは『鐘』の第 142 号（10 月 22 日付）に発表され，執筆の日付は 10 月 15 日となっているが，アカデミー版ではどういうわけかこれが落ちている。

書簡の冒頭でゲルツェンは『過去と思索』の一部に予定して 1855 年に書いてこの時まで公刊されなかったところの[2]，若き日に読んで強い印象を受けたフランスの歴史小説『アルミニウス』を回想している。

この小説のテーマは，古代ローマの没落とゲルマン世界の勃興という二つの世界の「衝突」を，壮大な歴史的事件に場面を取らずに，もっぱら「静かな家庭生活」の中に描いたものであって，これを読んだ時には将来自分も亦これと同じような「衝突」に遭遇するようになるとは夢にも思わなかったとゲルツェンは述べている。

彼の目から見るならば，古代ローマとゲルマン世界の関係は，今日の西欧社会とスラヴ世界の関係によく似ている。われわれスラヴ人はワルワールであり，その文明はほんの表面的なものだが，くりかえして言うが，われわれには「あの西欧的頽廃の，伝統的な，し

1）前掲拙稿参照。
2）これは後に第 5 部「家庭の悲劇の物語」の中に挿入された。

かし変りやすい洗練さはほど遠いものである。」[1] 反対に西ヨーロッパの生命力を失った文明の中に生きている人びとの心の中には，多くの損われた，人為的な，老人くさい情熱が混入しており，彼らは羨望やうぬぼれや，実現できぬ快楽やいやしい利己主義にとりつかれている。

このような自分の考えは，今でも変っていない。なるほどロシア人はたしかに粗野だし，それを誇っているようなところすらある。外国でよく見かけることだが，ロシア人はサロンでも大きな声で話をするし，傍若無人な笑い声を立てる。食堂でも禁煙に抗議し，一般に西欧社会で認められている習慣に従おうとしない。しかし何世代もかかって作られた文明というものは，いわば年代もののブドー酒にも似ていて，真似られるものでもなければ，一度に[2] 取り入れられるものでもない。

ところでロシア貴族を見てみると，なにか無理に地主の邸に集めさせられた百姓にも似た不細工なところがある。彼らはツアーリの命令で伝統的な生活から切り離され，民族の生活の悪い側面だけを頑固に保っている。自分に対しても他に対してもタタール的とでも言える軽侮を抱いている。貴族的名誉もなければ市民的自主性もない。

しかし貴族の中にも古代の英雄や中世の騎士にも比せられる若き獅子たちがいた。デカブリストがそれである。彼らはあきらかに斃れることを知りながら，若い世代を新しい生活に目覚めさせるために立ちあがったのであった。

それにくらべ西欧文明社会に吹き荒れている砂漠の熱風とはいかなるものか。進歩につぐ進歩，自由なる制度，鉄道，改革，電報といった類のことか。多くのよきことが為され，多くのよきことが積み重ねられた。しかし熱風は吹きに吹く。「死者を思い起せ」というが如く[3]。

以上に見る如く，ゲルツェンはこれまでくりかえし述べてきた古代社会の没落とゲルマン民族の勃興とを現代西欧社会とスラヴ世界の関係になぞらえ，未来は粗野ではあるが若い後者に属することを主張している。さらにロシアの貴族の大部分の退廃とデカブリストに代表される少数の貴族のヒロイズムを対比するが，同じ「教養ある階級の役割」と言いながらツルゲーネフの考えているところと，ゲルツェンの考えとの間にいかに大きな隔りがあったかは一目瞭然であろう。

ゲルツェンはスラヴ世界がその共同体を核として将来社会主義社会へ脱皮する際に，西欧近代社会において確立した「個人の原理」を導入することが絶対に不可欠であると考えていたが，そのためにはいわば「酵母」の役割をなすインテリゲンツィアの存在がどうしても必要だと主張している[4]。これとツルゲーネフのいう西欧文明の伝達者としての「つつましい役割」とを比較するならば，両者の相異はよりあきらかである。さらに後に見るように，バクーニンにおいては，革命は人民自身が行うものであって，革命的インテリゲンツィアはその発火点となるべきだとの思想があったが，ここにおいて三人の見解の相異

1) Колокол, стр. 1222. Герцен, XVI, 168.
2) 強調—原文。
9) Колокол, стр. 1223. Герцен, XVI, 171.
4) 前掲拙稿（仏文）参照。

が一段と浮き彫りにされる。ツルゲーネフもバクーニンもその立場ははっきりしていた。ゲルツェンもさまざまな屈折を持ちながらその姿勢においては基本的に一貫していた。そして三人は三様にあの四十年代にさかのぼる「ロシアにおけるインテリゲンツィアの役割」をめぐって二十年の歳月を経てこのように明瞭に分れてくるのである。

*
* *

この「第五書簡」を書いたあとでゲルツェンはふたたびツルゲーネフに手紙を書き，彼の読後感を求めている[1]。前に引用した「ぼくはかつて一度も君のことを政治的人間だと考えたことはなかった」云々の手紙はこの時のものである。

これに対しツルゲーネフは11月4日付の手紙でつぎの様に回答している。

「…『鐘』にのった君の最後の書簡についてだが，前のすべてのと同様，賢明で，繊細で，美しい。しかし結論もなければ応用もない。しかしこれほどくりかえして外的に素晴らしく内的に醜い西欧と，外的に醜く内的に素晴しい東方とを対置されると，どれほど賢明な人にもなお存するごまかしがあるように思われてくる。ごまかしというのは，第一には複雑でなくわかりやすいからであり，第二に a l'air d'être très ingénieuse（気がきいて巧妙であるかのように見える）からだ。しかしぼくにはすでにそこに使い古され，見えすいた意図が感じられる——いかに君の雄弁をもってしても，このごまかしを大きく口を開いた墓穴から救い出すことはできまい。この墓穴の中でごまかしが，ヘーゲルやシェリングの哲学だとか，フランスの共和制だとかスラヴの種族的生活慣習だとか——遠慮なしに付け加えさせてもらうなら——偉大なる社会主義者ニコラーイ・プラートノヴィッチ[2]の論文などと en très bonne compagnie.（きわめて仲よく）横たわっているわけだ。

君の言っている砂漠の熱風[3]はひとり西欧だけでなく，わが国にも吹き荒れている——それなのに君はほとんど四半世紀（16年間）もロシアから離れていたので，頭の中でロシアを改作してしまったのだ。君がロシアのことを思うにつけ悲哀を感ずるのは傷ましいことだ。しかし本当のところ，この悲哀は君の想像以上に悲しいものだということは信じてくれ。そしてこの点ではぼくは君以上に人間嫌い（ミザントロープ）だ。ロシア人は虐待され鉄の鎖をつけられたミロのヴィーナスではない。それは姉と同じような娘だ。ただお尻が少し大きいだけだ——そして彼女はもう〈……[4]〉——やがて姉たちと同じようにほっつき歩くことになることだろう。まあ，オストローフスキーの言葉でいうなら，姉妹中の醜い娘というところか。兄弟よ，もう少し一生懸命ショーペンハウアーを読む必要がある。

だけど，これで十分だろう。君のこれからの書簡を待ちこがれている。そして君の手を握る。

---

1) Герцен, XXVII, 262（1862年11月1日付）。
2) オガリョーフのことである。
3) 強調—原文。
4) 原文において欠けている。〈生娘ではない〉の意か。

君の Ив. ツルゲーネフ」[1]

かなり辛辣な返答である。しかし論旨は一貫している。ロシアが西欧諸国と同じ家族の一員であり，西ヨーロッパに荒れくるっている近代化の嵐はすでにもうロシアにも来ており，やがては姉たる西欧諸国と同じ運命を妹たるロシアもたどるにちがいないという主張がそれである。

さらに作家たるツルゲーネフのするどい目は，ゲルツェンの文章の美質を認めながらも，そこにある種のいつわり，ごまかしを見抜いている。哲学とか社会主義とか共和制とかいったさまざまのものがスラヴ主義者のいうロシア的伝統の優越性や，ゲルツェンおとくいのロシアの若さと一緒になって，ある種の手品の種をなしている，というのである。

手紙の最後に触れられているショーペンハウアーに関しては，その後の論争の中で何度か言及されるが，ツルゲーネフは早くからこの哲学者に注目していたと言われる[2]。しかし全集の書簡中にその名が出てくるのはこの時がはじめてである。グランジャールによれば，ゲルツェンも亦ツルゲーネフのすすめで，すでに1855年ごろにはショーペンハウアーの «Die Welt als Wille und Vorstellung» を読み，その後も何度か読みかえしている[3]。ツルゲーネフについて言えば，彼の1848年の革命の挫折以来心の中に抱いてきたペシミズムが，農奴解放後のロシアの現実に対するどうにもやりきれぬ気持と，『父と子』に対する若い世代の批判とからより強められ，1862年以後は一段とショーペンハウアーの哲学，とりわけその政治的スケプティシズムに惹かれるようになったということが指摘されている[4]。ツルゲーネフのこのペシミズムは散文詩 «Давольно !» (1862—64) や «Призраки» (1863)，さらには長編小説 «煙» (1865—67) において明瞭に出てくるが，そこにおけるショーペンハウアーの影響は疑いの余地がない[5]。しかしショーペンハウアーの場合そのペシミズムは「美的静観」に最後に逃げ場を見出すことができたが，ツルゲーネフの目からすれば，これもまた他の芸術的創造を含めた人間の創造一般と同じようにある種の「わな」でしかなかった[6]。上記の作品を通しての彼の思想は，「このうつろなる幻の世界において，死だけが唯一の現実的なもの」(«Призраки») であり，所詮人生は同じむなしい営みのくりかえしにすぎない («Давольно !») として，ゲルツェンとはまた違った意味で人間の進歩を否定するものであった[7]。

いずれにせよツルゲーネフには，この「第五書簡」に自分が以前すすめたショーペンハウアーの西欧文明へのペシミズムがゲルツェンによってたくみに西欧社会の否定のトーンとして利用されていることが見てとれたのである。彼にすれば，これも一種の「ごまかし

1) Тургенев, V, 64-65.
2) H. Granjard, *Ivan Tourguénev et les courants politiques et sociaux de son temps*, Paris, 1954, p. 325.
3) Granjard, ibid., pp. 325. ゲルツェンがこの作品をはじめてとりあげたのは『北極星』I-1855 においてであった。ファクシミリ版245頁，注44参照。
4) Granjard, ibid., pp. 324-327.
5) ibid., p. 324.
6) ibid., p. 330.
7) ibid., p. 328-329.

と思われたのであろう。さらに，ロシアを離れて何年にもなるゲルツエンのロシア観そのものも，同じく想像上の産物としか考えられなかったのである。現実のロシアの「悲哀は君の想像以上に悲しいものだ」という表現の意味するところは甚だ重く且つ深い。

〔第六書簡〕

つづく10月20日付のこの書簡では，かつて『向う岸から』で述べられたゲルツェンの「自然的歴史観」あるいは「種の歴史観」とでもいうべき主張があらためてくりかえされている。

自然においてはあらゆる生成・形成が，それぞれの種の受胎のときに決定された原理に従って発達する。しかし新たな要素や条件や環境が発達の傾向を変えることもまた可能である。個性とか特殊性[1]はこのようにして生まれる[2]。しかもこのことは植物のみならず動物についても言えるところである。一般にわれわれは完成した形しか見ることになれていないが，それぞれの種が今日の形をとるまでには多くの志向や，進歩や，avortement（流産）や平均化があったのである。

さらにこのことは人類の歴史についてもあてはまる。人類の中には自らに適合した形態を作りあげ，いわば歴史に勝ったものとあれば，現に活動と戦いの中に歴史を創造しつつあるものもある。また第三として，すべての他の種のために肥沃な土壌を準備する役割をもっているものもある。

ところで自分には，西欧世界が何かある限界にまで到達してしまったように思われる。そこでは少数の活動的な人びとすら新しい思想にふさわしい形態を作り出すこともできなければ，古い理想と訣別することもできず，さらにはこの出来上ったプチ・ブル的国家が，中国的形態が中国にふさわしいようにゲルマン＝ラテン民族の生活形態にふさわしいと公然と見なすこともできないでいる。しかしてこれと同じような例を，われわれはかつてローマ社会の末期にも見たことがある。彼らもまたその限界にまで到達して，ワルワールにとって替られた。彼らは新しい原理を自らのものとすることができなかった。今日の西欧文明もこの点では同様である。「カトリシズムの最後の言葉は宗教改革と革命によって語られた。それらがカトリシズムの秘密を暴露したのである。神秘的な贖罪[3]は政治的解放[4]によって解決された……入口における信仰，愛，希望が，出るときには自由，友愛，平等になったのである。」[5]

「ゲルマン＝ラテン世界は1789年の勝利につづくどよめきと狂奔の中に終りを告げた。」そしてその余震は1848年まで続いたが，nec plus ultra（もうそれ以上何ものもない）。

学問についても道徳についても同じことが言える。生命を失った科学には生ける人間の声は届かず，初期のキリスト教徒の時代には大胆で新しかったモラルも古びてしまった。

1) 強調—原文。
2) Колокол, стр. 1229. Герцен, XVI, 172-173.
3) 4) 強調はいずれも原文。
5) Колокол, стр. 1230. Герцен, XVI, 176.

1848年のあの結実することなき事件は，絶望のプロテストであった。それは創造ではなく破壊であったが，破壊されたものは反対に一段と強固になった。民主的共和制のユートピアは，地上の天国の夢と同じように消え去ってしまった。カトリシズムと革命の全人類的志向は世俗的な愛国主義（パトリオティズム）に席をゆずり，名誉あるスローガンは民族の唯一にして侵すべからざる名誉となってとどまった[1]。

18世紀の最後のモヒカン族たる革命のドン・キホーテは，眠ることを欲さず，出来うる限り大衆を煽動しようとする。しかし言葉すくなきプチ・ブルは眠りを欲し，進歩や自由について何やらはっきりせぬことをもぐもぐつぶやいている。

ここでもまた同じ主張がくりかえされている。この「第五書簡」は11月1日付の『鐘』に掲載されたが，これを読んだツルゲーネフは，すぐにパリからつぎのようにゲルツェンに書いてきた。

「何という手紙のやりとりか，親愛なるアレクサーンドル・イヴァーノヴィッチ！　おそらくぼくの中にこのような文句を見出すことは君の気に召すまい。今日の手紙は『鐘』にのった君の最後の書簡によって書く気を起されたものだ。

君はまれに見るほどのデリケートさと敏感さをもって現代人の診断をやっている。——しかしいったいなぜそれが «bipèdes（両足動物）» 一般ではなくて，どうしても西欧の人間でなければならないのか？　君はまるで慢性病のあらゆる徴候を検討して，すべての疾患は患者がフランス人であるということに由来すると宣伝する医者に似ている。ミスティシズムと絶対主義の敵である君が，ロシアの毛皮外套に対してはミスティックに敬服して，未来の社会形態の偉大なる天佑や新しさやオリジナリティといった，要するに君があれほど哲学者に対して笑った das absolute（絶対的なるもの）——をその中に見出している。君たちの偶像はすべて破壊されてしまった——しかし偶像なしには生きられない——それならその恩恵がほとんど何も知られていないこの新しい不可思議な神に祭壇を築けばよい——再び祈り，信じ，期待できるというわけだ。この神は君たちの期待することは何ひとつとしてしない。君たちに言わせれば，これは外的権威によって強制的に接木された，一時的，偶然的なものだからだ——君たちの神は君らの憎むものを熱烈に愛し，君らの愛するものを憎悪する——この神はまさに君らが彼のために拒否することを受け入れる——君たちは目をそむけ，耳をふさぐ——そして懐疑主義にはうんざりしているすべての懐疑主義者に特有のあの超狂信的な恍惚さをもって «春の新鮮さ，恵みの嵐» 等々についてくりかえす。歴史も文献学も統計も——君たちにとっては何でもない。たとえばわれわれロシア人が言語の上からも人種的にもヨーロッパという家族に «genus Europaeum» に属するということ——従ってまさに生理学の変ることなき法則からしても同じ道を歩まねばならないという疑いの余地なき事実も，君たちにとっては何でもないのだ。ぼくはまだかつて，カモ科に属しているカモが，魚のようにえらで呼吸するかもしれないなどという話は聞いたことがない。それなのに君たちは，心の痛みと疲労と，からからに乾いた舌の上に

1) Колокол, стр. 1231. Герцен, XVI, 180.

新雪の粒をのせたいという渇望とから，すべてのヨーロッパ人にとって，ということはわれわれにとっても貴いあらゆるもの——文明，法秩序，革命そのものすら手当りしだいに攻撃する——そして若者の頭を君たちの未だ十分に発酵していない社会主義的・スラヴ主義的至福で一杯にしては，彼らを酔ってふらふらした状態で世の中へ突き放す。そこで彼らは一歩進むやつまづく破目になるというわけだ。君たちがすべてこうしたことを良心的に，誠実に，憂いに満ち，心の底から熱烈な自己犠牲をもってやっていることはぼくも疑ていないし，このことは，君も信じているだろう。……しかしだからと言ってよりたやすくなるというものでもない。二つに一つだ。前と同じように革命やヨーロッパの理想に奉仕するか，あるいはすでにそれらが破産してしまったことを信じて，あえて両方の[1]目で特徴を見た上で，すべてのヨーロッパ人の前で[2] guilty（有罪）と言うか。その場合には，君も個人的にはヨーロッパの救世主と同じように本質的には信じていないロシアのメシアの新たな到来があるなどとは，はっきりした形でもほのめかした形でも例外にしてもらいたくない。君は言うかもしれない。これは恐ろしいことだ。人気を失うかもしれないし，事業を続けることもできなくなるかもしれないと……（ぼくはそれに）賛成だ[3]。一方では君が現在しているように行動することは不毛でもあると考えるし，他方では，ぼくは君が真理だと思っていたいかなる結果に対しても驚かないほどの十分の精神力を君自身の中に持っていると，君の意に反しても予想しているからだ。もうすこし待ってみよう。だが，目下のところはこれで十分だろう。

敬具

Ив. ツルゲーネフ。」[4]

先の返事と同様，ここにおいてもツルゲーネフはかなり辛辣にゲルツェンを批判している。そしてその場合の彼の主張は一貫して変っていない。ロシアがヨーロッパに属するか否かということは，三十年前にチャアダーエフによってはじめて取り上げられて以来[5]，四十年代の西欧派とスラヴ派の間で激論がたたかわされたところであったが，ここでツルゲーネフは，はっきりと言語の上からも人種の上からもロシアがヨーロッパに属することを自明の理とした上で（カモがえらで呼吸するか？），ゲルツェンがスラヴ的メシアニズムをもって若者を迷わしていることを，はげしく批判している。前の手紙に書いたゲルツェンの「ごまかし」の実態が，ツルゲーネフの目からみてどこにあると思われたか，この返事にはっきり示されている。さらに個人的にもゲルツェンをよく知っていた彼は，ゲルツェン自身すらこのようなスラヴ的メシアニズムを心の底で信じていないことを確信していた。ゲルツェンが懸命になってヨーロッパの衰退を説けば説くほど，ツルゲーネフにしてみれば，「狂信的」にも「ごまかし」にも思われたのである。

一方ゲルツェンの方は以上の11月4日と11月8日付のツルゲーネフの手紙に対してつぎのように返事を書いた。

1) 2) 強調はともに原文。
3) かっこ内は引用者の挿入。
4) Тургенев, V, 66–68（1862年11月8日付の手紙）。
5) 拙稿「哲学書簡—翻訳及び解説—」『スラヴ研究』Nos. 6–9 参照。

「ぼくは一月ほど前君にかなり悪意のある手紙を書いたのだが，自分の家の机の中にしまっておいた。その後君の『終りと始め』の最後の書簡を反駁した手紙が届いた。君の評価は間違っているが，これについて書くことは気がすすまない。君は自分がショーペンハウアーと一緒に（ショーペンハウアーについては，ぼくはエンゲルソンと《北極星》第一巻に，ということは1855年に書いたことがある[1]。）ニヒリストになってしまったことに気づいているだろうか……第一に君はその鋭い観察力からしてぼくとオガリョーフが仲のよい親密な関係にあるのを知っていながら，どうしてぼくにあてた手紙の中で彼の論文を罵ることを賢明なことだと思っているのだろうか？第二として，ぼくはすべて公けの場で行われる誠実な行為は，すくなくともいやいや姙娠した女性よりも非難に対して多くの道理を付加するものだと思っている。君はオガリョーフのどんな社会主義について語っているのだ？　どんな意見に，いかなる結論に君は不満足で，賛成できないのか？　なぜ彼の良心的な仕事をバクーニン流のデマゴギーの fatras（ごみの山）と同列に置くのだ？

『鐘』はオガリョーフが作ったものだ。

『ヴェーチェ』もオガリョーフが作ったものだ。もっともこれは君たちの家系には気に入るまいが……しかしこれによってわれわれは分離派教徒と通信が持てるようになったのだ。

かつてボトキンがぼくに対し，われわれは農奴的解放についてずいぶん書いているが……解放のためには決起を云々する論文をもって代えてはならなかったのだと言ったことがある……ボトキンはミリューチンと話すたびに，そのあとで保守的になる——君は若い世代に[2]遺恨を持っていて，老人みたいに始終がみがみ言っている——彼らが身近なのをよいことにして。

君がこれらの文章を全ロシアの文壇の大御所のようではなく，ぼくが憤慨しながらも愛している人間として読んでくれることを，今後にのぞんでいる。

Addio

A.　ゲルツェン」[3]

ここではもっぱらツルゲーネフが11月4日付の手紙で書いた「偉大なる社会主義者ニコラーイ・プラートノヴィッチ」に対する弁護が行われている。前にも触れたようにツルゲーネフとオガリョーフとの関係は，個人的な恨みもからんでかなり以前からよくなかったが，後にみるように（第 V 章）オガリョーフの起草したアレクサーンドル二世へのゼムスキー・サボール招集の請願をツルゲーネフがついさきごろ拒否したことも加わって，両者の間はいっそう悪化していた。かねてからツルゲーネフのオガリョーフに対する「反目」（第 III 章参照）に心を痛めていたゲルツェンは，ここにおいて論争の本質を忘れて猛然とオガリョーフの擁護に立ち上ったのである。しかし，この手紙の最後で暗示しているように，ゲルツェンから見るならばツルゲーネフの立場は，しだいにボトキン流の「保守主義」に傾いていっているように思われたのであろう。すくなくとも現実の政治に背を

1) 79頁の注3) 参照。
2) 強調—原文。
3) Герцен, XXVII, 264-265. (1862年11月22日の手紙)。

向けて，ショーペンハウアー流の懐疑主義から，ツルゲーネフ自身が『父と子』で描いて若い世代の間に物議をかもしたあのすべてを否定する「ニヒリスト」に近づいたように考えられたのであろう。この「ニヒリスト」をめぐって二人は後年何度か論争をかわすようになるが，今はふれない。

これに対してツルゲーネフはただちにつぎのような返答を寄せた。

「親愛なるアレクサーンドル・イヴァーノヴィッチ。君が自分の意図を変更して，ぼくに悪意のある[1]手紙を送ってくれなかったことを残念に思っている。悪意のある手紙でも，腹を立てた手紙よりまだましだ。しかしぼくは非難をしかえそうとはまったく思わない——とにもかくにも君が返事してくれたことを嬉しく思っている。たしかにぼくは自分の反論に対して反駁がなされるものと期待していた——しかし君がぼくの少なくとも記憶している限りでは，オガリョーフや，そう彼の理論と言った方がよい，彼の理論に対して全然辛辣でもなければ非礼でもない暗示に腹も立てれば，ふかく悩みもしたということはわかった。悪かった。このことは言わなかったほうがよいということを認める。そしてこれほど君が共感を抱いている側について君を苛立たせるようなことは，今後ひとことも言わないと約束しよう。しかしこれだけはぜひ言っておきたいが，ぼくの上述の理論に対する嫌悪の中には，«姙娠した女性» の嫌悪のような愚かなものはなにひとつ存在しない。どうしてそのように考えるか君に詳細に述べることもできるが，君を説得させることは望んでいないし，再び君を怒らせることを怖れもする。

だからこの問題は，サィース[2]の偶像のようにわれわれの間だけで，見通しのきかぬ覆いの下に置いておこう。

君のニヒリズム[3]についての非難もいただきかねる。（ところで，これは運命だ。ぼくはこの石を投げたのに——それがぼくの頭に当ったわけだ。）ぼくはニヒリストではない。なぜならぼくは自分の理解しうる限りで，全ヨーロッパ家族[4]（勿論ロシアも含めてだが）の運命の中にある悲劇的な側面を見ているということだけからもそうだ。それでもぼくはヨーロッパ人だ——として青年時代からその下に立っているこの旗を愛し，信じている。君は一方の手でその[5]旗竿を伐り，もう一方の手で未だわれわれには見えない何らかの旗竿をつかんでいる。これが君の仕事だ。——そして多分君は正しいのだろう。しかし，君がぼくに何か副次的な目的（寄生虫を養う満足といったような）や，若い世代に対する憤慨といったありもせぬ気持を付け加えたのは正しいとは言えない。どうしてそうしたんだ？　これは君に対して，君は確信からではなく虚栄心等から語ったり，書いたりしているといって非難するのに似てはいないだろうか？　このようなたぐいのあて推量や捏造は，卒直に言ってわれわれにとってふさわしからぬものだ。

君の手を固く握り，君の壮健を祈る。君がぼくを愛しているというのは，ぼくにとって大いに嬉しいことだ。よく考えてみれば君のぼくに対する不満が何の理由もないことに気

1）強調—原文。
2）シラーの詩 «Das verschleierte Bild zu Saïs» をさす。
3）4）強調はいずれも原文。
5）強調—原文。

づくことを確信している。

敬具

Ив. ツルゲーネフ」[1]

この手紙の調子はなかなか複雑であって，言外にもかくれた意味や感情のあることが見てとれる。ツルゲーネフにしてみれば，なぜゲルツェンがむきになってオガリョーフを擁護したのか当初面喰ったに違いない。しかし作家の鋭い目はそこに理屈を抜きにした人間関係の機微をいち早く見抜いて，「さわらぬ神にたたりなし」と避けたのが感じられる。しかし，最低これだけは是非言わなければならないと思ったことは，はっきり言っている。「ぼくはヨーロッパ人だ」云々がそれである。「ニヒリスト」という評価の誤りもまた甚だしい。いずれにせよ，二人の間のどうにも埋めがたい溝が，ツルゲーネフによってはっきり見て取られたことが，手紙の調子ににじみ出ている。「そして多分君は正しいのだろう」という表現も，君には君の行くべき道があり，それはそれでよいのだ，といった，つきはなした態度が背後に感じられる。

この手紙を受け取ったゲルツェンは，今度はすぐに返事を書いた。

「……君の手紙受け取った——ぼくが『終りと始め』の最後の論文に対する君の批評に答えなかったことを非難し，且つぼくを黙らせるまで攻撃したことを多分遺憾に思っているようなので，自己弁護のために一筆する。しかし君を慰めることができるだろう。ぼくは1863年の『鐘』にのる一連の書簡の続きの中で（勿論手紙のことは言及せずに）君に返答をするつもりだ。手紙の中で tête à tête（顔をつき合わすの）はうんざりだ。なお，君は誰かが（多分カトコーフ，チチェーリン，シェド＝フェロッティ，パーヴロフそしてチマーシェフだと思うが）ぼくの書くすべてが虚栄心からだと言っていると，怒って引合いに出しているが，いったいどうしてそんなことに腹を立てるのか——ぼくが金のために書こうと，退屈だから書こうと何であれ，そんなことは糞くらえだ。問題は—— was geleistet ist（行きついたところ）——よいものか悪いものかにある……

ニヒリズムが君の頭上に落ちたということだが——これは第一に砲丸を高く投げる力にはよくあることだ……はるか頭上たかく投げて，その頭の上に落ちてくるというやつさ。しかしくりかえして言うが君の最後から二番目の手紙は，チェルヌイシェフスキーやドブロリューボフたちのニヒリズムとは正反対の熱意や苛立ちとはまったく反対の疲れや絶望[2]の完全なニヒリズムを現わしている。

その証拠に君は観念論的なニヒリストにして仏教徒にして死をたたえるところのショーペンハウアーの権威を利用したではないか。（だけど彼のことを思い出させてくれたことは君に感謝する。）

君がオガリョーフの理論[3]の攻撃の秘密をぼくに明らかにしてくれなかったことは大い

1) Тургенев, V, 72-73（1862年11月25日）。
2) 強調はいずれも原文。
3) 強調—原文。

に残念だ。——ぼくがいかなる批判にも腹を立てることはありえない。ただ君の賛成できない法案の解釈の分れ目が exempli gratia（例として）見られたらと希望している。——今までのところは，傷ついている人びとに石を投げることは，姙娠した女の気まぐれとまではゆかなくとも，男の姙娠ぐらいふざけたものだとぼくは思っている。——君はその解釈でぼくに恩を施してくれた。きっと役に立つことだろう。

今後ぼくは——君の御承諾をえて——論争を終えることにしよう。」[1]

二人の手紙をくらべて読むと，打打発止の打合いを見る思いがする。お互いが相手の言葉を利用し，たくみな比喩を用いて筆の進むままにやりあう様は，まさに壮観な見物と言ってよい。しかしここでも述べているように，ゲルツェンはもっぱら自分の主張を『終りと始め』の中で展開してきたし，これからもつづいて「第七，第八書簡」の中で主張することになるのに対し，ツルゲーネフの方は，もっぱら私信の中でしかできなかった。そこにツルゲーネフのもどかしさが感じられる。しかしつぎの12月3日付の手紙は，この点で今までの手紙とはやや調子を異にし，言葉の上の打合いはやめて，論争の的をしぼって発言しようとしている態度が見られる。ツルゲーネフにしても，おそらく今までのような形でやり合うことは「うんざりする」思いだったのであろう。

「親愛なる友よ。誰だか思い出せないがどこかの賢者が，いかに賢明な人間といえどもこの上なく明らかな誤解から免れることはできないといって言った。われわれにはこの格言が当っていないだろうか？　自分自身考えてみよう。たとえば，ぼくは君の仕事の理由に虚栄心をさがすことは，寄生虫を愛するのと同様ばかげたこと[2]だという点で，自分が間違っていた。しかし君は自分が働くのは虚栄心からではないと主張して腹を立てている。ぼくがショーペンハウアーの名をあげる[3]と，君は権威に服従するとぼくを非難する。——ぼくがオガリョーフについてほんのひとこと言ったことには腹を立てないで，ぼくの質問に答えてくれと言うと，君はぼくが君のことを《黙らせるまで》攻撃したことを遺憾に思っているのではないかと皮肉に当て推量したりする等々。どうかこういう調子は願い下げにしよう。はげしく議論した方がよい。ただ ricanemets（冷笑）や言い残しは一切なしにして友人としてやろう。この点でぼくが（sans le savoir —自分でも知らずに）罪ありとせば，君に許しを乞うまでだ。——そして basta cosi（それが全部だ）。

君はぼくが作家としてのオガリョーフを嫌っている理由を述べるよう要求している。ぼくは喜んで君の言うことに従うが，手紙の上では，これはきっと根も葉もない[4]ことになるだろうと，思わずにはいられない。手紙の上で論拠を引用したり，数えあげることが不可能だということは君自身よくわかるだろう。——ただぼくにとってそれらが実際に存在するものであり，且つぼくが生理的にも心理的にもまったく姙娠してはいないということだけは信じてもらいたい。ぼくがオガリョーフに共感を持てないのは，第一に，彼はその論文でも手紙でも会話でも，ぼくの賛成できない共同所有等々の奇妙な社会主義理論を宣

1) Герцен, XXVII, 265-266（1862年11月29—30日の手紙）。
2) 強調—原文。
3) 強調—原文。
4) 強調—原文。

伝しているからだ。第二に，彼は農奴解放等の問題において，現在の民衆の生活と彼らの要求についておどろくべき無理解を示したからだ。このことは現状の理解の仕方についても言える。第三として最後に，彼がほとんど正しいところでも（たとえば裁判制度の改革），自分の見解をまったく才能の欠如した，重く，沈滞した支離滅裂の暴露的な言葉で述べているからだ。しかし君自身もこのことは感じていないまでも，『鐘』が次第に駄目になり，大衆が冷淡になっている明白な事実から疑問に感じてはいるだろう。まったく政治的亡命者の耳には，ツァーリの耳に入りにくいのと同じくらい入りにくいものだ。したがってそこまで聞かせるのは友人の義務だ。«『鐘』はオガリョーフが牛耳るようになってから，ずっと読まれなくなった» ——ロシアではこの文句は英国で truism（自明の理）と呼ばれているものになった。そしてこのことは理解できる。ロシアで『鐘』を読んでいる人たちは，とても社会主義どころではない。彼らは君が刀折れ矢尽きて退陣したまさにその批判を，純粋に政治的なアジテーションを必要としているのだ。バクーニンの解放令に抗議する文章の二分の一[1]と，オガリョーフの社会主義的論文[2]とを印刷した『鐘』は，もはやゲルツェン的[3]『鐘』ではない。ロシアが理解し愛していたようなかつての[4]『鐘』ではない。目下のところ，ぼくが君に言えるのはこれがすべてだ。

此の地で君の可愛い娘さんたちと会うのは大きな満足だ。彼女らにできるだけのことはしょう。君の手を握る。依然として君を愛しつつ。

Ив. ツルゲーネフ」[5]

この手紙にはこれまでの暗示やあてこすりはほとんど見られない。ツルゲーネフはかなり卒直に自分の気持を書いている。もともと彼はゲルツェンとバクーニンやオガリョーフの間には政治的見解の上ではっきり一線が画されており，ゲルツェン自身も内心では『鐘』の急進化をにがにがしく思っていたに違いないと考えていた。これは一面において当っていないわけではない。農奴解放以来のロシア国内の農民問題に対する鋭い指摘と，ツアーリ政府に対する非難は，『鐘』の中でもっぱらオガリョーフによってなされてきたからである。ゲルツェンはむしろ「ポーランド問題」に対する政府の弾圧政策の批判により大きな力を入れていた。

しかしこの手紙の中でツルゲーネフがオガリョーフを批判している三点のうち，すくなくとも最初の二点はゲルツェン自身にも当てはまるものであった。農村共同体を基礎としての社会主義への移行の主張は，決してオガリョーフによってではなく，まさしくゲルツェンその人によって十数年来説かれてきたことであるし，民衆の生活とロシアの現状に対する「おどろくべき無理解」ぶりも，オガリョーフより十年近く前にロシアを去ったゲルツェンにより妥当するところだったからである。

1) 前出のバクーニンの論文『ロシア，ポーランド及びすべてのスラヴの友へ』は後半が掲載されずに終った。
2) オガリョーフの『いくつかの問題の整理』〔『鐘』第136—138号（1862年6月15日—7月1日）〕等をさす。
3) 4) 強調はいずれも原文。
5) Тургенев, V, 73-75.

かつて『鐘』の発刊に際してその成功を危ぶみ，ゲルツェンの才能の濫費を惜しんだツルゲーネフの予言は，次第にその形をとっていったかに見えた。『鐘』はもうかっての『鐘』ではなくなってしまった，というツルゲーネフの言葉にはいろいろな思いがこめられていたことだろう。はたしてこの時から一ケ月余してポーランドに革命的蜂起が起り，かねてから時期早尚をとなえていたゲルツェンは，これを悲しい気持で，しかし心の底からの共感をこめて支持するが，ロシア国内の世論はこれを境にはっきり『鐘』に背を向けるようになるのである。(第 VI 章参照)

しかし『終りと始め』は未だ終ってはいない。翌 1863 年 1 月 5 日の『鐘』にはひきつづき次の書簡が掲載されている。

〔第七書簡〕

この書簡の日付は前年の 12 月 29 日になっており，前半は論文調であるが，後半はこれもまたゲルツェンの「好みのスタイル」である対話形式になっている。

まずはじめに彼は，これまでの六書簡につぐこの書簡を，六日働いたあとの日曜にたとえて，くつろいだ休日について物語る。しかし英国ではこの日曜というのはこの上なく退屈な日になっている。六日のあいだ毎日同じたぐいの退屈な仕事をし，そのあとでようやく訪れるこの日が，何らなすところない最も味気ない日になっているというのである。

ところで今日の教養ある階級の一部を見ると，彼らはあたかも若き日の夢と未だ見ぬ結婚の幸せとを憂いをこめて物思うオールド・ミスにも似ている。このようなヨーロッパのもっとも発達した階層の憂鬱というのは，実現せぬ夢と現実蔑視の間にはさまれたいつわれる状態からきている。そしてさらにその根底には，ヨーロッパ社会がすでに若き日を過ぎてしまったということが指摘されねばならない。かつての苦労や戦いのあとで，静かだが退屈な日々が訪れた。そしてこの「西欧文明の最終的形態がプチ・ブル性である。」[1]

浅瀬に乗り上げたと思ったキリスト教も，宗教改革の石の港で静かにおさまっているし，革命も座礁したと思ったらリベラリズムの静かな砂浜で憩っている。このリベラリズムというのは，政治的なよしなしごとの中ではかなりきびしい方であって，より狡猾な政府に対するたえざるプロテストと不断の服従とを合体することに成功した[2]。

西欧世界はこのような寛容な教会と飼い馴らされた革命とによって，落着きをとりもどし，平均化されてしまった。この息苦しさに耐えかねて，バイロンはギリシヤへと去り，フランクフルトに穏棲していたショーペンハウアーも，セネカのように死の進歩を認めてそれを救い主として歓迎したのであった……だがこのことをもってしてもヨーロッパの生活が静寂と結晶化へ変化することは何ら妨げられなかった。個性は擦り切れ，すべて際立つた個人的なものは滑らかになってしまった。人びとは隣人の生き方や個人の運命に無関心になり，炭鉱の災害も鉄道事故も，今日何人死に，明日は何人死のうと，あたかも個人

1) Колокол, выпуск VI, стр. 1278. Герцен, XVI, 183
2) Колокол, стр. 1278. Герцен, XVI, 184.

的不幸であるかの如く見なされている。人間が商品のように，一まとめにして数ではかられるようになったのである。

この満ち足り気なヨーロッパにおいて，今日だれが真剣に社会主義について考えているだろうか！　はるか彼方で雷鳴が聞こえるが，鎧戸は閉ざされ，稲妻も見えない。

ついでゲルツェンは場面を変え，八年前に描いた会話体の中編小説 «Поврежденный» の主人公たるエヴゲーニィ・ニコラーエヴィッチにたまたまロンドンで会ったことにして，このかつてのペシミストと会話をすすめている。イタリアにおいてガリバルディと共に戦った彼は，医者である友人のフィリップ・ダニーロヴイッチと共に，すでに明日はテキサスに渡ろうとしているところであった。期待した戦争は起らず，ヨーロッパの生活は彼らをうんざりさせるに十分だったからである。エヴゲーニィ・ニコラーエヴィッチから見れば，西ヨーロッパの国民はいまや疲れ果てて，休息を欲している。すでに彼らは満ち足りた生活の中にある。「資本も熟練も秩序も中庸も，必要なものは何でもある。」「かつてはむずかしい問題も，愛すべき夢もあったが，今やすべてが落着いてしまった。プロレタリアートについての問題も静かになった。」[1] それではロシアはどうかと言えば，クリミア戦争後は誰も恐れなくなった代りに，もはや期待もしていない。未来の期待に生きるのもよいが，目下のところは官吏が賄賂をとり，地主がいがみ合っているのを止めさせないことにはどうにもならぬ。

これに対してゲルツェンは，だからといってテキサスに行くことは逃避ではないか，「オランダ的安らぎに入り，フジマメの雑炊のために最良の夢と聖なる努力に別れを告げる」ことにはならないかと疑問を提する。しかしエヴゲーニィ・ニコラーエヴィッチは，このヨーロッパの「墓の如き安らぎはオランダ流のそれより悪い」ものであると悲しく頭をふるばかりである[2]。

以上の会話体の描写の内容は，本質的にはいままでの書簡と変らず，また『向う岸から』の中で「中年の男」と「若者」との間に行われた会話とも同じである。ヨーロッパ社会のみならず，ロシアの現状にも満足できなければ，それこそテキサスにでも行くほかはあるまい。ツルゲーネフの指摘したゲルツェンの「疲労」は，彼の分身であるこのエヴゲーニィ・ニコラーエヴィッチにはっきりあらわれている。会話の最後で彼は，一生暗い地下で穴を堀りつづけるモグラの話をしているが，いくら通路を作ってもそれを見ることもできないモグラの中に，人間の営みのむなしさが暗示されており，「このモラルをもって」ゲルツェンは「『終りと始め』の第一部と 1862 年の最後の月を閉じ」ている。

ツルゲーネフへの約束にもかかわらず，この書簡はまたしても「古い主題」のくりかえしに終っている。ただ西欧社会の行きづまりに対する考察は，いままでより一段と微に入り細をうがって，人間の心理や気分のひだまでを適確に見通しているところは，モラリストとしてゲルツェンの面目がよく出ている。

1) Колокол, стр. 1280. Герцен, XVI, 189.
2) Колокол, стр. 1281. Герцен, , XVI, 191.

〔第八書簡〕

『終りと始め』の最後をなすこの書簡は翌1863年1月15日に書かれ，2月15日付の『鐘』の第156号に掲載された。1月22日の蜂起の宣言をもって開始されたポーランドの革命的反乱はすでに口火が切られ，この号の巻頭には『ポーランドにおける犯罪』と題するゲルツェンの一文も亦掲載されている。

この書簡は，『鐘』を手にした一人の紳士がゲルツェンの部屋にあらわれて，ゲルツェンを「愛しその才能を尊敬する」が故に，『終りと始め』を「終りにすべき」だと言うところから始まる。彼に言わせれば，著者たるゲルツェンは語りかける読者の「年齢も環境も」知らず，ヨーロッパとその文明に対する不敬によってロシアの読者に「きわめて有害な影響を与えている」からである[1]。このような主張が今まで見てきたツルゲーネフの手紙の調子にきわめて近いことは言うまでもあるまい。ゲルツェンは相手がなぜ『終りと始め』を書くのかと質問したのに対し，「自分の真理だと思うことを書いているのであり，真理に無関心でいられない人は誰でもその真理を広めたいという弱さを持っている」と答えている。そして若者に悪影響を与えるとの批判には，古来ソクラテスもヴォルテールもシラーもベリンスキーも，みな同じ批判にさらされてきたし，さらにこの点でロシアの若者はニコライ時代のひどい環境の中でも「堕落する」ことが少なかったから，自分は心を安んじていられると返答している。

さらに相手はゲルツェンが「よき解剖学者」ではあるが，「悪しき産科医」であって，現代人の病気の原因を，患者がフランス人であるとかドイツ人であるということに求めていると批判しているが，いままでのツルゲーネフの手紙を見てきたわれわれにはこの発言が，とりもなおさず彼の反論そのものであることがわかる。それなのにゲルツェンは死体ばかり解剖してきたことにうんざりして，今度は《未来の外套を，共同体の外套を，社会主義の外套》を讃美するようになった。懐疑主義から義務や仕事を引出してきては，人民にあらゆる善を期待し，未来の社会形体の独創性を説くが，現実を見ようとはせず，超狂信的な恍惚さをもって耳をふさぎ，目を閉ざしている。ゲルツェンも若者たちもなかなか酔をさまそうとはしない。ゲルツェンたちにとっては歴史も，文献学も統計学も，すべてこれら反駁し難い事実が二束三文の何でもないものになっている。

以上の発言はツルゲーネフの手紙の中の言葉そのままのくりかえしと言ってよい。このあとゲルツェンはそれでは一体何が疑うことのできない事実なのかと質問するが，相手はツルゲーネフがまさしく手紙の中で述べたこと，即ち「われわれロシア人は言語的にも人種的にもヨーロッパの家族に genus europaeum に属するものであり，従って，生理学の不変の法則そのものからも，同じ道を進むべきだ」と答えている。

このような批判に対してゲルツェンは，「第七書簡」まで述べてきた主張をつぎのようにまとめて反論している。

即ち，発達の全体図は予見することのできぬ無限のバリエーションを排除するものではない。発生的に同じだからといって，biography が同じになるということにはならない。

1) Колокол, стр. 1297. Герцен, XVI, 193.

カインとアーベルは兄弟だったのに，両者の経歴はまったく違うものになったではないか。このようなことは種についても言える。カモがえらで呼吸しないことはたしかだが，「よりたしかなのは石英がハチスズメのように飛ぶことはない」ということだ。それに学問ある友人は知らないかもしれぬが，君はきっとカモにも大動脈が下に曲ってエラを作るような枝脈に分れる一瞬があったことを知っているだろう。

私はプチ・ブル性というものが，ロシアが目ざしている最終的な形態だとは思わない。あるいはロシアが「プチ・ブル的時期を経過する[1]ことがあるかも知れない。またヨーロッパの諸民族自身別の生活に移ることもあるかも知れない。ひょっとしたらロシアがまったく発達しないこともありうる。しかしこれはまさに可能性[2]であって，したがって別の可能性もあるわけだ。」[3]

「ヨーロッパとアジアの間に[4]ひろく散在しているロシアの国民は，ヨーロッパ諸国民の共通の家族のなにか従兄弟に属しており，ほとんど西欧の家族の年代記には参加したことがなかった。」

「今日までロシアは何ひとつ自らのものを発展させなかったが，何ものかを保ってきた。……ビザンツの影響は多分もっとも深いものである。」その後ピョートルの改革が行われ，人民の沈黙と譲歩の中に国家だけが大きくなっていった。「これは幼児期にはよくある話である。」しかし現在ではその成長が止まってしまったことを，誰ひとりとして疑うものはない。「いまや自分の足で立つ時がきている。」

われわれは力の貧しさを，政府の視野の狭さを残念に思っている。しかしこれは政府などというものではない。大学のえらい先生がたは，「生理学の不変の法則」を教えているが genus europaeum に属するなどと説くこともこれと同類の古いたわ言に新しい装いをこらしたものにすぎない。

「自然の中にも生の中にも，新しい動物の種や歴史の運命や国家形態を予防したり阻止するいかなる独占も手段もないのである。それらに限界をつけることは，不可能なだけである。未来は過去の主題によって即興曲を作る。発達の相や生活形態が変るだけでなく，新しい民族が作られ民族性が作られる。そしてその運命はまた別の道を進むのだ。」[5]

以上においてツルゲーネフにあてられたゲルツェンの八つの書簡形式の論文『終りと始め』は終っているが，論争そのものはまだ終ってはいない。われわれは以下においてそれを見てゆくであろう。　　（以下続く。Саппоро, 5 ноября, 1970）

〔附記〕 本稿は昭和45年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

1) 2) 4) 強調はいずれも原文。
3) Колокол, стр. 1298. Герцен, XVI, 196.
5) Колокол, стр. 1299. Герцен, XVI, 198.

〔47頁の注(1)に Yoshio IMAI, "The London Meeting of Herzen and Chernyshevsky in June 1859", 工学院大学『研究論叢』第8号，pp. 1—20を付け加えたい。本稿執筆後筆者は読む機会を得たが，この論文の中で，今井氏はコジミーンとネーチキナの論争を紹介するとともに，その背景を論じている。〕